



カトリック全国社会福祉セミナー講演録

虐待・暴力と福音

カリタスジャパン社会福祉活動推進部会

はじめに

暴力による人間支配に「ノー」を

横川和夫（セミナーコーディネーター）

子どもへの虐待、夫や恋人など親しい人からの暴力（DV＝ドメスティック・バイオレンス）、女性へのセクシャルハラスメント、さらには権威や権力を使って弱い立場に立つ人を支配するモラルハラスメント（精神的虐待）など、暴力による人間支配は人権を侵害し、いのちを危険にさらし、ときには殺人事件となって人間社会を脅かしています。

減る兆しのないDV・虐待・性暴力

DV防止法改正（2004年12月）・児童虐待防止法改正（2004年10月）・改正児童福祉法（2005年4月）などが制定されたにもかかわらず、子どもへの虐待をはじめ、人間の尊厳を踏みにするさまざまな暴力は、一向に減る兆しがありません。

最近是新自由主義経済に触発された「大競争時代」の流れが、経済だけでなく、学校や家庭にまで浸透し、富める層と貧しい層との格差が拡大しています。厳しい支配や管理で精神的に追い詰められた人々の不満や怒りは、恨みとなって身体の奥底によどみ、ちょっとしたことが引き金になって一触即発の状況にあると言っても過言ではありません。

社会福祉を超える社会問題に挑戦

残念ながらこうした問題に対する教会共同体の取り組みは遅れ、暴力による人間支配についての理解はいまひとつ。被害を受けた人たちが声をあげても動こうとしない、こころの痛みに耳を傾け、共感する気持ちも持ち合わせない、そんな寒々とした無関心の世界が広がっているような気がしてなりません。

そんな光景を頭に描きながら2006年11月に開催されたカトリック全国社会福祉セミナー（カリタスジャパン主催）では、暴力による人間支配の構造に焦点を当て、一人ひとりが大切にされ、信頼し、安心して生きられる、自由で、思いやりのある家庭・学校、そして教会共同体を構築するきっかけになることを願って、社会福祉を超えた社会問題に挑戦しました。

二次被害の苦悩を背負われる被害者

テーマは「虐待・暴力・性暴力に被害者の視点で向き合う」です。

セミナーでは虐待・暴力・性暴力を体験した当事者や、自助グループで被害を受けた人たちの相談相手をしている女性に登場してもらい、想像を超える体験を語っていただきました。彼女たちは、被害に遭った当時の気持ち、心に刻まれた傷の深さ、時間のかかる回復の道のり、必要な周囲の人たちの理解、被害を受けた人としてのアイデンティティーの確立といったあり

のままの状況をさらけだしてくれました。きわめて奥深く、迫力ある訴えにわたしは心を揺さぶられました。

被害を体験した二人はカトリック、プロテスタントの家庭で育っているため、教会共同体を抜きに、この問題に対処できなかったのです。精神的に二重、三重の二次被害の苦悩を背負わされてしまった事実を知ってわたしの胸は痛みました。

教会共同体に突き付けられた課題

虐待・暴力・性暴力の被害に遭ったとき、そうした人たちを受け入れ、寄り添い、支えなければならないはずの教会共同体が、裁判官のような裁きをする人たちの集まりのように受け止められ、教会から離れていかざるを得ない状況になったという現実、キリストの福音に沿って生きようとする教会共同体にとって大きな課題を突き付けられたと、わたしは深く自戒させられました。

セミナーで提起された問題は、個人・家庭・学校の在り方として受け止め、解決するのではなく、このような状況をつくり出した教会共同体に所属する私たち一人ひとりの責任であることに思いをはせる必要があります。

暴力支配を断ち切る場に

この本は、そのセミナーの講演・シンポジウム・パネルディスカッションの全容をまとめたものです。この本が虐待・暴力・性暴力などの被害に遭い、心の傷を抱えながら一生懸命に生活している人たちの痛みを共感するだけでなく、自分の問題として受け止め、その連鎖を断ち切る場に家庭・学校・教会共同体を変えていくきっかけになればと願ってやみません。

横川 和夫（よこかわ・かずお 元共同通信論説兼編集委員）

1960年上智大学卒業後、共同通信社へ。社会部を経て教育問題担当の論説兼編集委員に。1972年に文部省を担当したことで教育の在り方、家族問題をはじめ少年事件、虐待問題などをテーマに取材を続けてきた。編著書には『仮面の家』（1993年度日本新聞協会賞）など多数。カリタスジャパンには1975年ころから2006年までカリタスジャパン委員などがかかわってきた。

目 次

はじめに～暴力による人間支配に「ノー」を…………… 横川和夫

- ◆減る兆しのない DV・虐待・性暴力
- ◆社会福祉を超える社会問題に挑戦
- ◆二次被害の苦悩を背負わされる被害者
- ◆教会共同体に突き付けられた課題
- ◆暴力支配を断ち切る場に

第1部 『虐待・暴力・性暴力』は、なぜ減らないのか：社会の構造から考察する

日本社会に根を張る暴力支配の構造…………… 遠藤優子

どこにも根を張る支配の魔力…………… 12

- ◆支配に価値を見出す風潮と文化
- ◆六つに分けられる支配の形態
- ◆経済的なパワーとヒエラルキー
- ◆性差や文化も支配に

暴力がはびこる素地…………… 13

- ◆母性と父性の違い
- ◆ルールを示すのが父性の役割
- ◆教育や保護のなかに潜む支配
- ◆支配に反発して起こる暴力
- ◆支配のゆがみのなかでの暴力の転化
- ◆加害者・被害者は逆転する

家族は暴力が起こりやすい集団…………… 15

- ◆長期間続く密接な人間関係
- ◆家族は仲良くは幻想
- ◆男が経済的パワーを失うと
- ◆保護は支配に変わりやすい
- ◆風通しをよくすることの大切さ
- ◆「見守り」が虐待防止に有効

コミュニケーションの仕方と境界線…………… 17

- ◆柔軟に役割分担の交代を
- ◆コミュニケーションの仕方も柔軟に
- ◆新しい事態への切り替えができないと
- ◆「我は我・彼は彼なり・されど仲良く」
- ◆暴力は悪しきコミュニケーション
- ◆踏み越えやすい世代境界線
- ◆家族境界のない家族も問題

被害者アイデンティティーを大切に…………… 19

- ◆暴力を目撃してもトラウマに
- ◆こころの傷には二つの条件
- ◆トラウマが深刻になる要素
- ◆周囲の見方が決定的に
- ◆被害者に責任はない
- ◆被害者アイデンティティーを支えていく

- ◆加害者教育プログラムが大切
- ◆身近なところで風穴になれ

- ◆神様の「おぼしめし」は危険

児童虐待死亡事例に学ぶ…………… 柏女霊峰

児童虐待はなぜ起きるのか…………… 23

- ◆増えるネグレクト
- ◆『ヤマアラシのジレンマ』
- ◆紡ぎ直すには第三者が必要
- ◆子ども虐待に五つの要因
- ◆もつれてしまう親子の絆

子育て機能を社会の仕組みに…………… 24

- ◆虐待を見つけた人に通告義務
- ◆「法は家庭に入らず」でよいのか
- ◆人と人とのつながりが大切
- ◆「在宅福祉三本柱」の子育て版
- ◆プライバシーより子どものいのち
- ◆子どもを産まない、育てない社会に
- ◆一時間500円で子どもの世話

82件の死亡事例から学ぶ…………… 27

- ◆国に虐待の実態検証義務
- ◆親子分離の判断を鈍らせるもの
- ◆家に入って子どもの安全確認を
- ◆末端まで届かない情報伝達
- ◆不十分な関係機関の連携
- ◆児童相談所の対応も不十分
- ◆岸和田市で起きた虐待事件
- ◆切れないドアチェーン
- ◆親子は一緒に、という援助観も問題
- ◆必要な子育て応援サービス

児童養護施設の実態…………… 30

- ◆増え続ける施設入所の子どもたち
- ◆深刻な一時保護所の待機児童問題
- ◆問題多い大舎制の集団生活
- ◆社会的養護の貧困

児童虐待への警告と援助…………… 31

- ◆顔に傷があったら要注意
- ◆虐待の可能性示す兆候
- ◆一振りで変える万華鏡援助論
- ◆子育ては次世代をつくる営み
- ◆乳児虐待が多い原因は何か
- ◆切り離す権限持つ児童相談所
- ◆赤ちゃんを窒息死させた父親

第2部 子どもや女性にとって暴力を受けるとはどういうことか

暴力を生き延びたわたしたちにとってのこころのケア…………… 中島幸子

複雑で、目に見えないこころの傷…………… 34

- ◆人が人を傷つけるという行為
- ◆被害に遭った人を尊重する
- ◆被害者は「☆（ほし）さん」に
- ◆他人事ではない暴力・虐待
- ◆加害者は「Bさん」と呼ぶことに
- ◆身体に傷跡がないこころの傷

- ◆こころの傷を自覚することが大切
- ◆18年も昔のことなのに
- ◆何十年も溶けないこころの傷

パワーとコントロール..... 36

- ◆上下関係に潜む危険性
- ◆Bさんのコントロールの仕方
- ◆相手によって態度を変えるBさん
- ◆自分の感覚を押し付けない
- ◆上から下へ仕掛けてくるコントロール
- ◆暴力は意図的な行為
- ◆DVは海面下に沈む冰山

DVのメカニズムを解明する..... 38

- ◆緊張感が高まりハラハラ
- ◆これが危険な兆候
- ◆指一本触れないでも身体的暴力
- ◆どこかにグレーゾーンがある
- ◆範囲が広い精神的暴力
- ◆優しさもコントロールのため
- ◆生きる力を弱める言葉の暴力
- ◆妊娠でDVはエスカレート
- ◆お金で自由を奪う経済的暴力

なぜDVから逃げられなかったか 40

- ◆暴力を受けていたことを認める勇気
- ◆暴力発生までのメカニズム
- ◆親密な間柄での暴力
- ◆暴力で消える自分らしさ
- ◆逃げ出した体験から
- ◆生死が分からぬ不思議な感覚
- ◆離れられないと思わせる効力
- ◆相手の孤立化を求めるBさん
- ◆交互に繰り返す虐待と優しさ
- ◆見方によって異なる受け止め方
- ◆何を信じてよいのか混乱

こころの傷つきからの回復..... 44

- ◆自分を変える作業は一生かかる
- ◆わたしに一番効いた脅し
- ◆わたしにとっての今後の課題
- ◆秘密にしなくてもよい環境を
- ◆日常の小さなことからスタート
- ◆心的外傷から成長したわたし
- ◆カトリックであることと暴力
- ◆こころの傷つきに罪意識が重なって
- ◆教会にいとつらくなる
- ◆こころの回復について
- ◆指の力を一本ずつ抜く作業

子どもの愛し方が分からない母親たち..... カズエ

クリスチャンの家庭に生まれて..... 48

- ◆落ち込みながら相談員の仕事を
- ◆教会をわが家のように
- ◆自衛官の父はアルコール依存症
- ◆空に向かって話す子に
- ◆トラウマ脱出のために火渡りも
- ◆母が語るのは聖書の言葉
- ◆父の飲酒は秘密

十歳のときに性的暴力..... 50

- ◆自分は無力で、男のおもちゃ
- ◆言ったら母が壊れてしまう
- ◆ポルノ雑誌で傷ついて
- ◆短大生活に耐え切れず家出
- ◆失業、大学で福祉を専攻

妊娠、出産、そして虐待へ 51

- ◆同じにおいに仲間が気付く
- ◆男を支配する気分に浸る
- ◆浴びるように酒飲み、妊娠
- ◆医者を信頼できず自宅出産
- ◆出産三日目に赤ちゃんを殴る
- ◆誰も助けてくれなかった感覚が
- ◆赤ちゃんの性器が性暴力の再体験に
- ◆子育ての責任が重くのしかかり

自助グループで救われた..... 53

- ◆閉塞感と孤独感と疲労感と
- ◆不安と怒りが赤ちゃんに
- ◆精神科から自助グループに
- ◆秘密にしてきたことが話せた
- ◆「わたしも同じだよ」と仲間がハグ
- ◆どうして抱きしめてくれないの
- ◆言っぱなし、聞きっぱなし
- ◆仲間の半数は児童期に性的虐待

援助職として心掛けていること..... 55

- ◆SOSを出せる関係に
- ◆批判しない、否定しない関係を
- ◆「やり直しはできる」と思って
- ◆問題を解決するのは本人
- ◆教会はやはり敷居が高い

アルコール・薬物依存症になってわたしは救われた..... 上岡陽江

寂しかった幼少時代..... 58

- ◆暗闇にいるような感じ
- ◆女性はアルコール依存になりやすい
- ◆実はわたしは薬物依存症
- ◆大家族のなかで過保護に
- ◆両親はアダルトチルドレン
- ◆四年間、ぜんそくで小児病棟に
- ◆面会は二週間に一回
- ◆少年院と同じだった病院生活
- ◆焼き場の煙を見ながら
- ◆言葉にならない「死」を実感

誰にも明かすことができなかった..... 61

- ◆ぜんそくの薬を子どものころから
- ◆依存症の親は子どもを不安に
- ◆疎外され、放置されている子どもたち
- ◆「摂食障害」の言葉がなかった時代に
- ◆女性の仲間に出会って号泣
- ◆「美人でも痔は医者に見せるよ」
- ◆地獄の底で人と会った感じ
- ◆自分だけではなかった

役に立たない人こそ大切な人..... 63

- ◆「陽江さんはこころの支えだった」
- ◆薬やめない人もわたしの力に
- ◆分娩室にダルクの男が侵入
- ◆怖い顔した男の手にバラの花
- ◆疎外しない、何でも受け入れる
- ◆仲間意識がわたしを助けてくれた

性虐待の被害者に何が起きているか…………… 65

- ◆「ないこと」にしてはならない
- ◆女性受刑者の多くが性虐待の被害者
- ◆20人のうち五人が多重人格だった
- ◆回復への長い道のり
- ◆二重、三重に人を脅かす暴力
- ◆昔からあった性虐待
- ◆手つかずの男性被害者の治療
- ◆アルコールや薬物で被害の痛み消す
- ◆父親から性虐待を受けていた女性は
- ◆怒りのコントロールは危険
- ◆虐待のケアで燃え尽きる人も
- ◆ゆるやかなつながりが大切

人間の尊厳を自覚し、成長し合う…………… 68

- ◆苦労を自分の手に取り戻す
- ◆生理を使って生き延びる方法
- ◆再発防止で効果ある「アミティ」
- ◆教会を安心できる居場所に
- ◆依存症者にとっての回復とは
- ◆罰するだけでは解決しない
- ◆医療刑務所に流れるバロック音楽

医療現場から見た女性の健康と女性への暴力…………… 佐々木静子

富士見事件から学んだこと…………… 72

- ◆目玉は超音波診断装置
- ◆被害女性が1138人
- ◆ノー・チェックの閉鎖的な病院
- ◆子宮の大きさはニワトリの卵
- ◆医療被害の奥にあるもの
- ◆必要ない手術をして金儲け
- ◆医者の言うままに、が良い患者だった
- ◆26年間も続いた民事訴訟
- ◆子宮を取られて卵巣欠落症に

男性の価値観に支配された医療…………… 74

- ◆産婦人科医療の根元的な問題
- ◆夫の意向で手術を断念した妻
- ◆永遠に枯れない花？
- ◆安易にとられる子宮
- ◆ホルモン補充療法は男の発想

医療にはびこる封建制…………… 75

- ◆中止となったホルモン補充療法
- ◆女性だけが責任負うピル
- ◆火曜日に集中する日本のお産
- ◆火曜日もなぜか午後2時に
- ◆産みたいときに産めないのは人権問題
- ◆日本で普及しない低用量ピル
- ◆ピルの副作用は血栓症
- ◆赤ちゃんが産まれないクリスマスイブ
- ◆週休二日制のしわ寄せで
- ◆正常な出産は助産師で

性暴力被害の実態…………… 77

- ◆わたしも知らなかった
- ◆多様な性暴力の被害者
- ◆性被害は「魂の殺人」
- ◆なかったことにしてきた社会の歴史
- ◆「本当に嫌なら逃げればよかったのに」
- ◆カナダから講師招いて勉強会
- ◆強姦＝処女膜損傷の神話
- ◆安全な場所はどこにもない
- ◆はびこる性暴力の神話
- ◆見えてきたDV被害の実態

産婦人科はDV被害発見の場..... 80

- ◆定期的に妊婦健診
- ◆怖い次世代への連鎖
- ◆病院のトイレにも問診表
- ◆サバイバーという言葉のもつ意味
- ◆二つのホルモンがあるのが女性
- ◆ダイオキシンが子宮内膜症
- ◆問診表でスクリーニング
- ◆「わたし、監視されているのです」
- ◆病院通いが多いDV被害者
- ◆重視されるスピリチュアルな健康
- ◆夜中に増える性腺刺激ホルモン

もうすぐ来る女医時代..... 82

- ◆「女性科」や「女性診療科」が
- ◆改善されつつある病院の密室性
- ◆まだまだの「ジェンダー医療」の視点
- ◆当事者が力を取り戻せる支援を
- ◆男女間の不平等な関係が問題
- ◆対等な関係のなかで

パネルディスカッション 被害者にとって必要な支援とは何か

..... 司会 松本和子
パネリスト 中島幸子・カズエ・上岡陽江・佐々木静子

ケアには連携が大切..... 85

- ◆身体から精神までのサポート必要
- ◆大切なのは志と心意気
- ◆みんなが協力し合って
- ◆サポートする側もネットワーク
- ◆歴史的な幕が開いた

二次被害にならない支援を..... 86

- ◆教会に多い二次被害
- ◆わたしが負担に感じたこと
- ◆「あの人、エンガチャーだよ」
- ◆尊重に欠けるセリフ

援助者に心がけてほしいこと..... 88

- ◆相手の代わりに解決しない
- ◆「あなたは悪くないのよ」に傷つく
- ◆ゆっくり進む回復のプロセス
- ◆「簡単じゃねえーよ」
- ◆どうしてほしいかを聞くのが一番
- ◆立場の微妙な違いが大切
- ◆入れ替わる加害者と被害者

ダルク女性ハウスに集まる人たち..... 90

- ◆相談には二つのタイプ
- ◆怒りとともに語る仲間の痛み
- ◆自分の問題として聞いてしまう
- ◆「覚えていますか。十年前のこと」
- ◆信じておいてよかった
- ◆神父様の前ではいい顔
- ◆虐待は雰囲気分かる

産む、産まないには複雑な背景が..... 92

- ◆医師の立場から
- ◆産めない状況もある
- ◆赤ちゃんポストか、社会の養育責任か
- ◆マリア様はレイプ被害者かも

難しい加害者の気付き..... 93

- ◆モラハラをどう気付かせるか
- ◆「あれはしつけ、プロレスの技だ」と言い訳
- ◆何十年も継続させないとダメ
- ◆自覚なしに変化は望めず
- ◆野放し状態の加害男性たち
- ◆自助グループには三つの種類

社会で疎外された人たち..... 95

- ◆当事者活動に共通点
- ◆支え合ったり、助け合ったりして
- ◆男は二種類しかいないよ
- ◆対処の際限ないのが依存症
- ◆回復のための知恵の蓄積
- ◆自分をつくらなくていい居場所

注目される「アミティ」の回復力 97

- ◆終身受刑者たちの自助グループ
- ◆閉じ込められていた被害者の側面
- ◆性虐待を受けていた殺人犯
- ◆罰するだけでは変わらない
- ◆少年院で被害者の話だけではダメ
- ◆『虐待という迷宮』
- ◆虐待ママグループに母なる存在
- ◆ハイヤーパワーに向かって話せ
- ◆DVの被害者家族に接する仕方は

一人ひとり自分に合うやり方で..... 99

- ◆母親自身のケアが子どものケアに
- ◆子どもは小さい人間
- ◆わたしはグループワークが苦手
- ◆大切なグリーフワーク
- ◆ため込まず、安全に出せる場が大切
- ◆「性暴力被害者支援専門看護師」が全国に必要

第3部 あらゆる暴力に「ノー」の教会を目指して

聖職者による性的虐待問題—教会が性的虐待に立ち向かうには..... 小柳義夫

極秘に処理してきた教会..... 102

- ◆15年間に200人の子どもの
- ◆ボストン・グローブ紙が報道した内容
- ◆被害者が次々に名乗り出る
- ◆異例の枢機卿会議がバチカンで
- ◆ストライク一つでアウト
- ◆バチカンは修正を要求

信徒だけの全米監視会議スタート..... 104

- ◆「児童と若者の保護局」の設置
- ◆被害者の81%は少年
- ◆ゲーガン元神父は30年間に130人も
- ◆アメリカ司教団が謝罪広告
- ◆ロー枢機卿の後任にオマリー司教
- ◆被害者への補償金は総額1800億円
- ◆性的異常者の専門病院

世界各国で聖職者による性的虐待..... 106

- ◆英国、ドイツ、フランスでも
- ◆日本でも性的虐待の調査
- ◆児童より女性への性的虐待多い日本
- ◆他宗派での性的虐待問題

教会の体質、構造に問題..... 107

- ◆個人的な罪とは言えず
- ◆教会の隠ぺい体質が被害者を拡大
- ◆日本でも未成年者の性的虐待が
- ◆「神父様は神様だ」
- ◆独裁的権力は腐敗する
- ◆司祭の独身制か、司祭の権威か
- ◆米国では少数派の閉鎖意識が
- ◆天文学的数字の損害賠償金
- ◆聖職者のチェック機構が必要

シンポジウム 「イエスならばどうするか」

..... 司会 横川和夫

シンポジスト 幸田和生・松本和子・小柳義夫

暴力が起きやすい教会、学校、施設 110

- ◆教会は助けてくれなかった
- ◆問題の本質は性より権力
- ◆どうしたら風通しのよい教会になるか
- ◆特権を持った力の行使が問題
- ◆教会にも被害者を黙らせる現実が

閉鎖的な教会を打破するには..... 112

- ◆この世にいない児童虐待の犠牲者
- ◆日本では女性への性暴力が問題
- ◆排除でなく共感の価値観を
- ◆教会の密室性を打ち破る試み

問われる司教・司祭・信徒の関係 113

- ◆固い教義に縛られて窒息する危険も
- ◆必要な司祭、信徒の意識改革
- ◆男性中心の神学、教会法
- ◆求められる主任司祭の地位相対化

男性に都合のよい聖書解釈..... 115

- ◆他人の妻だと姦通に
- ◆罪意識が被害者を追い詰める
- ◆教会は倫理で人を裁かない
- ◆女性の自己決定を大切に
- ◆現実にきちんと向き合う
- ◆姦通した男はどうなったの
- ◆いのちは誕生で終わらない
- ◆被害者だけで終わらない性的虐待

虐待で無視できない聖母マリアレイプ説..... 117

- ◆被害女性にとっては大きな力に
- ◆さまざまな受け止め方があっていい
- ◆男性の見方が主流に
- ◆例外ではない無原罪の聖マリア
- ◆損なわれない人間の尊厳
- ◆相手の立場に立って聞く人に
- ◆処女懐胎は何を意味しているか
- ◆第二バチカン公会議で変わった見方
- ◆マリアも自分たちと同じ一員

離婚の問題をどう考えるか..... 120

- ◆人間の苦しみの現実を考えて
- ◆離縁に二つの条件付けた律法
- ◆イエスが説いたのは律法ではなく福音
- ◆男の立場しか考えなかった律法学者
- ◆妻を追い出す理由も男の都合
- ◆イエスの言葉をどう受けとるか

教会は暴力防止に立ち向かえるか…………… 122

- ◆職能に応じた組織化を
- ◆被害者が声を上げるしかない
- ◆司祭は自分一人で抱え込まない
- ◆一緒に歩む受け皿を教会に

むすびに～聖書はトラウマからの回復物語…………… 幸田和生

- ◆エンパワメントとリコネクション
- ◆イエス時代の人々の苦しみ
- ◆「イエスのいやしとは？」
- ◆「重い皮膚病の人のいやし」
- ◆身体とこころの回復の物語
- ◆教会の使命
- ◆サバイバーの話を聞くことから
- ◆当事者が初めて主役に
- ◆感謝とご冥福を

第1部

『虐待・暴力・性暴力』は、なぜ減らないのか ：社会の構造から考察する

日本社会に根を張る暴力支配の構造

遠藤優子（遠藤嗜癖問題相談室長）

このセミナーで聞かれる話には、重い話もあるでしょう。でも、これは新しい話ではないのです。時代を検証してみれば、さまざまな文明のなかに歴史的な事実として、暴力や虐待は山ほどありました。現代の社会的な背景と、今日的な様相が付け加えられるなかで、目新しい出来事ではない暴力や虐待の問題を、どう見直したらよいのが今回のテーマです。

どこにも根を張る支配の魔力

支配に価値を見出す風潮と文化

暴力や虐待は、目新しいことではないという共通認識を持てていただきたい。これをうやむやにしまうと、もっと違った人間関係があった過去は、暴力や虐待のない素晴らしい世界だったという、とんでもない話になってしまいます。宗教をめぐるテーマは綿々と続いていたわけです。

もう一つ重要なことは、暴力や虐待は特殊な事例ではないということです。最近、悲惨な事件が相次いでいますが、決して特殊なことではなく、わたしたちの人間関係のなかでいつ被害者になるか加害者になるか分からないほど身近な問題であるということです。そのようなことを前提にして、改めて暴力を定義し直してみましょう。暴力は支配にかかわ

る問題で、支配に対する価値観が大きく影響していると思います。歴史を振り返っても、現代社会でも、この支配に価値を見出す風潮や文化といった価値体系が厳然とあるということです。それが結局、身近なところの暴力となって現れてくると考えてよいと思います。

六つに分けられる支配の形態

支配は、大きく六つに分けられます。

一つ目は「肉体的なパワー」です。当然、身体が大きく、力がある人間が示すパワーによって、自分よりも肉体的に弱者を支配下に置くことができます。この肉体的なパワーを行使するとき、暴力が入りこんでくる。これが一番分かりやすい例だと思います。

二つ目はパワーに接する機会が多いのが、「権威」とか「権力」です。権威や権力は、決して周りを支配する悪いものではないのです。秩序を守っていこうとするとき、権威や権力が必要である側面もあります。ただ権威

や権力は、支配の一つであるという自覚を持たなくてはいけないのです。この自覚なしに、権威や権力のパワーを持つ立場に立って行使すると、いろいろな形の暴力が住みついてしまいがちです。

権威はさまざまなところに存在します。宗教的権威という言い方もされています。皆さんが日ごろ活動されている教会での宗教活動にも、この権威につながる支配の問題があって、権威とどのような関係を保ちながら、教会社会との付き合いを維持されていくかはとても大事なことです。

経済的なパワーとヒエラルキー

パワーの三つ目は「経済的なパワー」です。現代社会では経済がかなりの比重を占めていますが、実は昔のほうがもっと強かったのです。今より格差社会はひどい状況で、奴隷とか人身売買などがありました。現在でも日本で働く外国人労働者など、ひそかに似たようなことが行われています。経済が実は支配をめぐる大きな力の一つです。特に高齢者をめぐる虐待は、経済的要素がかなりの比重を占めていると言えます。

四つ目が「ヒエラルキー」つまり階層です。最近、日本でも格差社会になってきたと言われています。社会的な階層も含めてヒエラルキーは、権威や権力と関係します。ヒエラルキーそのものが支配と言えらると思います。ヒエラルキーの構造にさまざまな暴力がはびこることがあります。企業、行政機関など、ほぼすべての組織は、ヒエラルキーを持たざるを得なくなっています。組織を維持するために、最初からそのヒエラルキーがつくられているという側面があります。

性差や文化も支配に

五つ目に、「ジェンダー」があります。男らしさ・女らしさといわれる性差です。セクシュアリティ、つまりオス・メスと言うよりも、男性性・女性性、男らしさ・女らしさと

言われるような社会的意味合いでの性別、役割制度的な性別にも支配があります。

最後の六つ目が「文化」です。文化のなかにも支配が数多くあります。特に大きいのは父性的文化です。男女ともに父性性も母性性も持っていて、それを行使するわけですし、それを発揮して人間関係を営むわけですから、母性は女性の持ち物、父性が男性の持ち物ではないのです。ただ役割という点では、親は自分の子どもを育てていくときには、母性的な働きかけ、父性的な働きかけという二つの違った、対比的なものになります。それが混然一体となって、どのような形で対象に向かうかが、働きかけの大きな要素となります。その意味で父性的なものは文化のなかで非常に大きなパワーを含んでいると言えます。

暴力がはびこる素地

母性と父性の違い

わたしの専門である心理学的立場で考えたときの母性の基本は ALL OK（ありのままを受け入れること）なのです。母の港と書いて母港。傷つき、疲れた船が帰ってくる母港、そして母なる学校と書いて母校。自分が育ち、戻っていける場所、そこから社会に出ていくという子宮的な意味合いがあります。

つまり ALL OK であると同時に、この胸のなかにいつでも戻ってらっしゃいという保護的な意味合いを持ちます。保護というのは、支配とは別ですが、とても重要な要素です。保護的に相手を癒してくれる、抱きとめてくれるというのが母性です。

それに対して、父性は社会に向けて外に押し出す力なのです。母性的なものが囲うものであるならば、外に押し出すものが父性です。ただ単に出て行けと押し出すのではないのです。重要なのは、社会に押し出すときに、外の世界も面白いぞという興味、関心を引き起こさせ、刺激して、母なるものから外へ出て

行くときのエネルギーを提供する、それが父性なのです。

そのときに、ぬくぬくとした母性的なかわりから外に押し出されるので、“こころ寒い”経験をします。外の世界の楽しさ・興味深さ・冒険・発展とかを提示できなければ、父性としては失格です。外に出るのは悲しく、つらいことだと教えている父性は、本当の意味での父性的とは言えません。押し出すどころか、逆に母性のなかに押しとどめてしまうことになります。

ルールを示すのが父性の役割

外の世界で安全に過ごすためには、何をしても ALL OK という母性とは違う関係性が必要です。そこには重複するさまざまな関係性があります。安全に社会の一員として機能していくためには、ルールを守ることが必要です。ルールを守ることによって自分の安全が図れます。つまり外の社会の基本は、支配・非支配ではなく、対等なルールを互いに守り合うことで機能しているということです。そのなかにヒエラルキーなどが重層的にあるので、ルールを守らなければ身の安全を守ることができないことになります。

父性の働きかけでもう一つ重要なことは、どのようにして外の世界で振る舞ったらよいか、そこにあるルールは何で、ルールの本質は何か、ルールを守ることによって自分の人生やいのちの安全が保てるのか、それが他者の人生あるいはいのちを尊重することとまったく表裏一体であるということを提示することです。お互いを尊重し合うことが難しい世の中になりつつあり、暴力事件が増えています。さまざまな事件は、父性的な社会の支配が暴力の問題につながることを示していると言えます。

教育や保護のなかに潜む支配

この支配が発揮されたときに暴力になることがよくあります。つまり支配を示そうとす

るとき、力のある者が弱者に対して、時として強烈なパワーを行使することになります。これを「虐待」と呼びます。ところがパワーを行使している者は、これが虐待だと自覚していないことが多いのです。自分の行動が暴力だと自覚せずに、何かを教えたり、伝えたり、時には保護であると思っているケースもあります。自分が子どもを保護しようとする思いのなかに、実は形を変えた支配が潜んでいるわけです。それが力のある者が力のない者に行使されたとき、虐待、暴力となります。

支配に反発して起こる暴力

この支配に反発しようとして起こる暴力があります。支配の圧力を感じている側が、支配から逃れよう、押しのけようとして起きてくる暴力です。それは権威や権力が、その力を行使したことに対して提起される弱者からの暴力です。身近なところでは「対親暴力」、青少年が大人に向けて起こす暴力は、大半がそうであると思います。ある種の犯罪なども、反発という面からみると、そのように言えると思います。

もう一つ抑圧されていた人たちが抑圧をはねよけようとして抵抗することがあります。部族間抗争だとか、場合によって、暴力がエスカレートしてテロリズムにまで発展する場合もあります。支配されていた者が、支配から逃れようとすることで起きてくる暴力です。

支配のゆがみのなかでの暴力の転化

このような支配構造のゆがみのなかで、パワーの行使を受けて支配されている者が、自分のなかにわき起こる反発を他に転化する形で起こる暴力があります。たとえば、父親から身体的な虐待を受けている長男が弟をいじめる形です。暴力の被害者である長男が、自分より弱者である次男に対して力行使するケースです。このような形のいじめは多く見られます。小、中学生だけではなく、社会人のいじめのようなことは陰惨なのが多いので

す。特にサラリーマンのいじめのようなことは、地域社会のなかでも起こります。子ども社会だけでなく、無視などのいじめは大人の社会でも横行しています。多くの場合は、支配構造のゆがみのなかでの転化です。このような転化は子どもが動物を虐待するケースでも見受けられます。

加害者・被害者は逆転する

これまでの話を要約すると、暴力というのは支配の問題であり、そのパワーにはさまざまな種類があり、暴力がはびこるのは、①支配の表現②支配に対する反発③支配のゆがみのなかでの転化の三つになります。しかし、さまざまなパワー、ヒエラルキー、権威、肉体的なこと、これらは永久に続くことは少ないのです。社会情勢の変化のなかで権威などは循環していき、肉体的なものも年令とともに弱体化するということです。その意味で、暴力という点では、力が弱かった子どもが成熟すると、親との関係は逆転します。つまり支配も変遷していく。ということは被害も加害も連鎖し、変遷していくのです。ある場面で被害者であった人物が別な場面では加害者に、加害者であった者が被害者に転ずる、あるいは、ある人物があるシーンでは被害者であっても、別なシーンでは加害者として振舞うといったような、加害と被害は交互に連鎖するという考え方で、この暴力の問題を見ていかななくてはなりません。加害者はいつまでも加害者であることはなく、時間の経過、場面の設定、シーンによってさまざまに連鎖していくのです。

ところが現実には虐待問題が起きると、加害者・被害者という一面的な見方で決め付けてしまいがちです。被害と加害がさまざまな形で連鎖しているという実態を理解せずには、全人的にその人と接して、その人に必要なことを考え、提供したりすることはできないのです。これが非常に重要なポイントです。

家族は暴力が起こりやすい集団

長期間続く密接な人間関係

このような暴力の伝播、連鎖がもっとも起こりやすい集団は、長期間にわたって人間関係が持続し、しかも密接な関係にあるという集団です。それは「家族」なんです。オギャーと生まれた新生児から、家族のなかで成長し、やがて自分を生んだ母親、ともに育ててくれた父親が高齢化し、弱体化し、ケアを必要とする要介護状態となって、今度は自分がその母親や父親を介護し、ケアしなければならない。こういう形で、長い時間、親密な関係が持続し、そして立場の逆転が起こる。それが家族なのです（起きない家族もあります）。実はこの家族が、最も支配の連鎖性を体験している集団なのです。

このようなことを念頭において家族を考えますと、家族とは大変善きものと言いきってよいのでしょうか。愛と慈しみに溢れ、互いを助け、尊重し合いながら、子どもを慈しみ育て、老いた親に対しては感謝をこめて接していくことは望ましいことです。夫婦は互いに尊敬し合い、愛し合い、兄弟も助け合う。それは素晴らしいことです。しかし現実には100%夢物語に近いです。わたし自身のことを考えても、わたしがカウンセリングで出会った人たちを考えても、家族は本当に善きものであるというのは幻想だと言い切っていい。

家族は仲良くは幻想

なぜなら家族には、さまざまな支配が入り乱れているからです。肉体的なパワーの支配があります。家族全員がみな同じ力を持っていません。父親の権威や権力がある家族も、ない家族もあります。父性的な価値観と経済的な力・ジェンダー・権威・権力、これらが混然一体となって父親を頂点としたヒエラルキーができていたり、実は、それはトラの威を借るであって、内面的にはすべて母親が支

配している。という具合に、いろいろな形で、それぞれの家族のなかに、それなりの支配が存在しているはずです。

これが全部悪いわけではなく、これらのことが無自覚に放置された状態であるとき、それは暴力の温床になり得るわけです。この点をきちんと自覚して、自分たちがどのような関係を築き、営むかを常に話し合い、検討していればよいのです。怖いのは、家族というものに幻想を持っていることです。「家族は仲良く・善きもの・夫婦は常に助け合う」と考えてはいけません、わたしに言わせれば幻想なのです。そのような幻想を抱いて、実態に眼を向けないときに怖いことが起きるので

男が経済的パワーを失うと

2008年4月に厚生年金分割制度が施行されると、熟年離婚が増えるといわれています。経済のパワーから解放されたときに何かが起こるという典型的な例でしょう。誰が財布を握るかの世界では、金だけで権威を振りかざすことができるとは限らないのです。経済をめぐるヒエラルキーが通用する世界、それとは別なところに別な権威があります。さまざまなパワーが縦横無尽にからみあっている現実を見ないで、自分は経済の要だから大切にされてしかるべきだと思って幻想を追っている男性。その男性が家庭で自分が思ったような対応をしてくれないので、「なんだ、お前！」と、机をたたいてしまうことがあっても不思議ではありません。

実はこんな取るに足らないことで家族間暴力が起きるのです。ちょっとした幻想が現実の前で崩れたとき、それを受け止めきれずに、互いの間で支配をめぐる暴力が起こる、それが家族間暴力の実態なのです。幻想を捨てて現実と直面していくほうが、暴力にならずにすみます。逆説的に言うと、自分たちの関係は危険だと思っているほうが安全なのです。自分たちは危険な関係を営んでいる

のだと自覚しながら、その現実を目に向けているほうが安全な関係を営むことができます。支配をめぐる関係で家族は大変危険な状態にあるのです。

保護は支配に変わりやすい

実は保護は支配に転換しやすいのです。保護を受けている者が保護だと感じている間は保護なのです。しかし保護を受けている側が、自分の力と保護の状況を考え、もう自分は保護は必要ないと思ったとき、保護はうざったくなるのです。その瞬間から保護は支配、拘束になります。母性は子宮的なもの、母港だと説明しました。港は追いかけてきて、囲ったりはしません、もし港が追いかけてきたら怖いのです。それは暴力です。傷ついて、癒されたいときに船は港に入ってきます。ドッグに入って癒されて、もう一回海に出る。これは拘束、支配ではなく保護なのです。港が追いかけてきたら怖いから、港を壊すしかないわけです。この自覚が、保護者と被保護者との間でずれている場合が多いのです。

あなたは力がないから、わたしがいなくては大めなのよ、というのも一種の暴力による支配です。あるいはそれを押しのけようとして、精神的な暴力が起きます。あるいはそれを転化して物を壊すというのも暴力です。このように保護が支配に転換しやすい状況も含めて、支配の最も濃厚な人間関係が、そして最も身近な集団が家族であるということです。

風通しをよくすることの大切さ

家族が暴力の温床となりやすいのは、密室性にあります。家族関係を暴力の温床にしたくないと思ったときは、密閉性を解く、風通しをよくすることです。第三者が出入りするとか、共通の知人のことを常に話題にする、だれそれさんから電話があった、と自然体に話せる場に家族がなっていれば、風通しがよく、密閉性が解けている証拠です。お客さんが多いだけでなく、家族が外の世界に出向く

のも風通しのよさです。「最近、わが家では風通しがよくないな」と思われたら、少しこころがけていただだけで、暴力の温床になりにくくなります。

家族間での暴力や虐待を終息させるために、わたしたちができることは、風通しをよくしてあげることです。わたし自身が風になる、お客さんとして訪問することも大切です。たとえば高齢者虐待防止法ができましたが、高齢者の場合、ケアマネジャーやヘルパーの家庭訪問があるだけでも救われます。継続的に相談にのり、お話し相手になるだけで、その家族のなかでの暴力を予防することになります。同時に、すでに起きている場合は対処の一つとなり、暴力を終息させる方向に向かわせます。

「見守り」が虐待防止に有効

わたしは児童虐待、高齢者虐待にかかわる方の指導・監督の仕事をしております。重要なことは問題のある家族に対して、常に「見えますよ」と思わせることです。それも相手に気付かれないようにするのではなく、「ちゃんと見えますよ」という行動、思いがきちんと伝わらなくてはなりません。ズカズカと家族のなかに踏み込んでいくのではなく、大切なのは「見守り」です。

「見守り」というのは、あなたの家のなかがどうなっているのか大変心配だから、わたしたちは見守っているということを示してあげること。それが家族のなかに伝わるだけで、虐待のリスクが半減します。どのような効率の良い「見守り」ができるのか、「見守られていること」が家族にとって心地よいもの、そのためにどうしたらよいかを考えるのが、虐待防止のためにとても重要な要素の一つです。

コミュニケーションの仕方と境界線

柔軟に役割分担の交代を

次は支配をめぐる、家族のなかでどのようなコミュニケーションがあるかという問題です。重要なことは、支配は常に動いているということです。弱者はいつまでも弱者ではない。加害者はいつまでも加害者ではないのです。ところが家族は時としてガチガチに固まってしまって、実際には変化しているのに、意識が追いついていないケースがあります。分かりやすく言えば、親はいつまでたっても、子どもを子どもとして見るのです。実際に親は老いて弱体化し、子どもからケアを受けなくてはならないのに、意識は親の意識のままなのです。子どもが「こういうようにするよ」と言うと、「そんなことをお前だけで勝手に決めるな」と怒る。

このように柔軟性を失ったコミュニケーションの典型的な例も家族に多いのです。実態に応じて柔軟に変化している家族は健康性が高いのですが、密閉性が高い家族はガチガチに固まりやすい。状況に応じて柔軟に役割分担が交代できているかどうかが問われます。

コミュニケーションの仕方柔軟に

コミュニケーションの仕方も大切な要素です。たとえば、子どもが小さいときには子どもを「ちゃん」付けで呼んでもいいです。しかし虐待がある家族を見ていると、殴られながら介護を受けている80歳のおばあさんが、介護をしている50歳の息子を「ちゃん」付けで呼んだりしている。つまりコミュニケーションの仕方が変化していないわけです。他人から見ると気持ち悪いですが、本人たちは問題だとは思っていないのです。

実際に息子が母親を蹴ったり、つねったりして介護しているケースがあります。息子はお漏らしをしたりする母親を受け入れることができないのです。息子にとっては、しっか

りと自分を守ってくれるはずの母親でなければならぬのです。このように役割の交代ができずに固まってしまっているケースと、コミュニケーションの仕方が固まっているケースは、同時に出てきやすいものです。家族が長年続けている生活スタイルを変えることは実に難しいのです。

新しい事態への切り替えができないと

家族がコミュニケーションの仕方を壊すきっかけとなる新しい要素は、それが喜ばしいことであっても、家族のホメオスタシス（外部からの刺激に対し、常に一定の安定した状態を維持する機能）を壊すことになりかねません。たとえば第一子出産は大変喜ばしいことです。にもかかわらず生まれてくる子どもは異分子として、それまでの家族スタイルを壊す要素にもなるわけです。だから新参者に家族機能から排除しようとする力が働くものなのです。それが悲惨な形で出てくれば幼児虐待・乳幼児虐待・ネグレクトになります。

子どもが生まれてきたとき、それを排除するのではなく、きちんと受容して、新しいコミュニケーションの仕方をつくっていくことは、なかなか大変なのです。第一子のときにはうまくいったけれども、第二子のときには失敗してしまうのも不思議ではありません。元気だったおばあちゃんが寝たきりになったというのも、新しい事態です。新事態は新しいコミュニケーションの仕方に切り替える絶好の機会なのに、それができない。つまり柔軟性が問われる場面で、切り替えができない状況になったとき、暴力や虐待が起きやすい状況が生まれるのです。

「我は我・彼は彼なり・されど仲良く」

支配・被支配というのは、わたしとあなたは別物ですよという個と個の境界の問題です。わたしはわたし、あなたはあなた。すべての人間関係がそうなのです。暴力だけでなく、すべてにおいて重要なのは「我は我・彼

は彼なり・されど仲良く」。これができれば人間関係は安全なのです。ところが、「我は彼」になってしまうと危険なのです。わたしの思う通りに彼が動いてほしいという気持ちが起きます。「何で勉強しないの」と親が思っている、子どもは「今はだれだれちゃんと話したい」と思っている。その状況を親は受け入れ難くなります。

たとえば「メシ、風呂」としか言わない夫が、「おれの顔色を見たら、それぐらい分かるだろう」と思っていて、それが通じない。だからといって妻に対してカリカリ怒っている夫も「我は彼」なのです。このように相手は自分の一部で、自分とつながっているという以心伝心の幻想を抱いていることが、まさに境界線を踏み越えていることになります。これは非常に暴力が起こりやすい。つまり家族というのは「我は彼・彼は我」の関係に陥りやすい環境にあるということです。

暴力は悪しきコミュニケーション

個人と個人の間にある境界線のことで言うと、暴力が一回でも起きたときは、その関係性のなかで境界線を踏み越えたと判断せざるを得ません。暴力にならなくても、こころのなかで境界線を踏み越える発想の仕方、物の見方、期待の持ち方をすることもあります。日頃からそのような見方をしていると、強い刺激がきっかけで暴力という形に表現されるわけです。そのような意味では、暴力は悪しきコミュニケーションの一つと言えるわけです。家族であっても、他人との間で保たれる「我は我・彼は彼なり・されど仲良く」という意識を持たなくては健康な家族関係を保つことはできません。

踏み越えやすい世代境界線

また世代間の境界線というのがあります。世代境界線を踏み越えてしまうと先ほど申し上げた港が追いかけてきてしまうことになります。特に今の家族は密閉性が高く、少子化、

核家族化しています。子どもも一人っ子だったりします。だから問題が全部家族に集約され、親は子どもに向けての垂れ流しを起しやすいわけです。つまり世代の境界線は踏み越えやすいのです。ですから子どもが親に秘密をもつようになったら喜びましょう。喜んでそれを尊重しましょう。親は子どもに愚痴の垂れ流しはやめましょう。でも抱え込んでいては健康に悪いですから、自分の愚痴を聞いてくれるような関係や場を家庭の外に持ちましょう。

家族境界のない家族も問題

家族境界、つまり家族と社会との枠について考えてみましょう。家族がガチガチに固まりますと、外の情報はなかに入りません、なかの情報も外に出ません。密閉性の高い状態になり暴力の温床になりやすいことはすでに説明しました。もう一方で家族境界という枠がない家族があります。家族としてのまとまりという意識が全くない。一つ屋根の下に住んでいても、ホテル家族のようなものです。

家に帰り、自分の部屋に入って、コンビニ弁当食べて終わりみたいな。好きな時間にお風呂に入って、勝手に好きなときに外出して、めいめいが携帯電話で外とつながって。つまり家族としてのまとまりが意識されてない。密閉性がないから暴力がないかというと、そうでもないのです。互いが、それぞれ「わたしが」という意識で生活していますから、どこかでぶつかったときには暴力が起きないとは限りません。

被害者アイデンティティーを大切に

暴力を目撃してもトラウマに

子どもの虐待が起きたとき、被害を受けた児童だけの問題ではないことを、ぜひ知っていただきたいと思います。実は目撃のトラウマというのがあります。暴力を身近で目撃し

た場合、直接自分が虐待を受けたと同じようなこころの傷を受けるのです。それを目撃トラウマと言って、こころの面では実際に暴力被害を受けた子どもと全く同じ傷を受けます。特に自己像、自分がどういう人間であるのかに傷がつくと同時に、自分から見た世界がどのようなものであるかの世界観も傷つき、人によっては一生生きにくい状態を体験しなければなりません。

子どもにとって何でこのようなひどいことが起きたのかは理解できない、その結果、こころが防衛して、自分が何かいけなかったのではないかと、自分でどうにかできるはずだったと考えてしまったりします。しかし実際はどうにもできないという状態、つまり、ここで無力感が生まれるわけです。そしてまた、こういったことが再び起こるのではないかという恐怖感に常にさらされなければならない。恐怖と戦慄（せんりつ）、無力感、そして、わけの分らなさというなかに置かれることがトラウマ・こころの傷になるのです。

こころの傷には二つの条件

こころの傷は、ただ単に大変な体験をしただけでトラウマとは言わないのです。精神医学上の診断基準では、自分や他人の生命の保全（危機）にかかわるような場面に遭遇していることです。大人にとって生命の危機でなくても、子どもにとって危機と映るケースは多いのです。たとえば夫婦げんかを見て、お母さんがいなくなると思えば、自分の居場所が壊れるわけですから、生命の保全にかかわることになります。子どもであればあるほど自分や他人の危機が拡大するのです。

そして遭遇したときに、非常に強い恐怖と戦慄、無力感を内面に感じる。この二つが同時に起きたときに、はじめてトラウマといえるわけです。子どもであればあるほど無力感が強く、逃げられません。自分の力で自分の身を守ることができたとき、他人に助けもらえたときには、無力感から解放され、トラ

ウマにはなりにくいのです。でも助けることができなかつたとき、救い出すことができなかったときには、非常に強いトラウマになるわけです。

大人同士の抗争やヤクザ同士の抗争の目撃ではトラウマになりにくい。しかし弱者が強者から行使された暴力に屈せざるを得ないとき、トラウマは強いわけです。児童虐待・要介護高齢者虐待・DVも怖いことになります。肉体的、経済的に男性の方がパワーを持ちやすい。ジェンダー、父性の文化、全てが絡み合って、夫婦間でも支配をめぐるパワーが厳然とあると認めざるを得ません。そのような状況のなかで妻がDV被害を受けている場合、強い無力感にさらされトラウマを受けやすいということになります。

トラウマが深刻になる要素

虐待でどの程度のトラウマを負うかを考えるとき、六つの要素があります。

まずは加害者との関係です。子どもにとって加害者が自分を保護してくれるはずの人であればあるほど、傷を受けやすくなります。

二番目は虐待の期間です。期間が長ければ長いほど、傷は深くなります。

三番目は虐待のタイプです。身体的虐待・心理的虐待・性的虐待・ネグレクトがありますが、どれがトラウマを深くするかは関係ありません。ただ反応の仕方が異なります。

四番目は二つ以上の虐待が合併していればいるほど傷が深くなります。わたしに言わせれば、単一の虐待はないのです。ほぼすべての事例が合併しています。考えてみてください、情緒的に傷つけることなく身体だけを傷つける、そんなことはありえません。必ず合併していると見ていいでしょう。

五番目は子どもの年齢と発達段階。これも誤解を受けがちです。子どもが小さいから大丈夫とか、大人に近づいているから大丈夫というのは全くの誤解です。年齢と発達段階で傷が浅いとか深いとかは関係ありません。虐

待にあったときには、その対応にエネルギーをそそぎますから、年齢と発達段階によっては、その年齢での発達の課題がうまくこなせないことになり、後の人生の生きにくさに影響します。

周囲の見方が決定的に

六番目はしっかり頭に入れておいてほしいのですが、虐待を受けた被害者に対して周りの人がどのような見方、反応をするか。これがトラウマになるか、ならないかの決定的な境目で、最も大きな影響を被害者に与えます。周りはだれも助けてくれないという世界観と自己像を持っている被害者がいかに多いかということ、カウンセリングで実感させられています。

カウンセリングで話を聞いていると、対応の仕方です。一人の人間の人生を台無しにしてしまうことがあることに気付かされます。「虐待を受けたことを分かっているのに、だれも助けてくれなかった」「虐待を受けてはだしで逃げたのに、隣の奥さんは『ごめんね』と言いながら雨戸を閉めてしまった」「玄関先で『入れることは出来ません』と言われた」などと被害者は訴えます。ある人は「わたしにとって虐待での悲惨な思いは、親から受けた虐待のアザを銭湯でどうやって隠そうかと思っていた時です」と語ってくれました。

被害者に責任はない

大切なことは、被害者には何の責任もないことをきちんと自覚することです。被害者にも非があるのではないかと考えたとき、被害者はそれだけで二次的な被害を負うのです。これは虐待だけの問題ではなく犯罪も同じです。「そんな夜中に歩いているから被害に遭うのだ」といったことが実際に言われるのです。とんでもないことです。この発言は「夜中に女性が歩いているのを見たら、襲っていい」というのと同じです。被害者を非難する人が意外に多いのです。虐待の被害だけでなく

く、世の中も二次的被害を負わせているのです。

被害者がどのようにして回復していくのかを考えますと、重要なことは、被害者が自分は悪かったという思いを捨てられるかどうか、大きなカギなのです。自分は被害を受けたという被害者意識だけではなく、被害者アイデンティティー、つまりわたしは被害者だ、被害を受けたことに関してはケアを受ける権利、必要があり、そして、立ち直っていくのだという被害者アイデンティティーの認識を持つ必要があるのです。それは力強く、自分自身を“良い”と肯定する意識です。

被害者アイデンティティーを支えていく

トラウマの自覚を持ってPTSDに悩みつづ、社会的に活動しながら自覚して生きている人たちがいます。自己肯定感、自分が自分の人生を新たに展開していくのだという意識に立てる被害者アイデンティティーをきちんと持てるように、お互いに被害者同士が支える、社会に向けてこんなことがあるのだから、気づいてほしいというような啓蒙的な動きをするといったことが大切なのです。

ということは、ただ単に被害者を保護すればよい、かくまえばよいということではないのです。ただ保護する、かくまうことは、逆に被害者意識をより強めて、場合によっては被害者の力を損なってしまう場合さえあるのです。まず保護は必要ですが、そこから被害者アイデンティティーを持って、被害者の回復をイメージできるように支えていく。これは被害者が回復していくときにもっとも大きな支えになると思います。

皆さんは宗教的な組織として、あるいは信仰者として、さまざまな被害を受けた方に出会うと思います。保護すれば、かくまえばよいという意識ではなく、被害者の回復イメージをきちんと持ってください。

加害者教育プログラムが大切

同様に加害者の治療を考えていかななくてはなりません。世界各国、日本でも取り組みを始めましたが、なかなか難しいとされています。加害者が回復するには意識改革しかありません。それはパワー、支配というものの価値観を変えなければならないからです。そこが変わるまで、こころのなかに踏み込んでいく必要があります、単なる啓蒙教育ではだめです。再発防止のための教育プログラムが有効だとされています。わたしもDV加害者の治療をしています、なかなか変わらない。彼らはガチガチの信念を持っています。しかし加害者の人間性が変わらないからと切り捨てるのではなく、地道にかかわり続けると、少しずつですが変わっていきます。地道な働きかけと加害者自身の地道な意識改革の努力によって変わっていくのです。

神様の「おぼしめし」は危険

宗教とのかかわり、宗教の役割で言いたいことは、被害者の保護をめぐる、被害者アイデンティティーを無視されては困ることです。神様の「おぼしめし」という考え方は危険です。自己改革を迫らない運命論に立ってしまう場合があるからです。自分の人生、変えようのない人生をきっちと自分のなかに受容して、自分のものとして、そこから力強く生きていくという発想なら、自己受容という面では分かります。しかし、そうではない諸刃の剣になる可能性があるわけです。

被害者意識にさいなまれがちな暴力や虐待の被害者に向けて、それは神様の「おぼしめし」と言ったときには剣になってしまうのです。虐待されて弱っている被害者に「神様の『おぼしめし』だから、それを受け入れて」と言ったら、「はい。わたしが悪うございました」になってしまいます。被害者が運命論者にならないように、自分で自分の人生をもう一度切り開いていくことができる被害者アイデンティティーを持ってもらうように働き

かけていただきたい。そういう意識を皆さん、ぜひ持っていただきたいと思います。

身近なところで風穴になれ

最後にひとこと、わたし自身も社会福祉を学んだことでこの領域に入ったわけで、カリタスの活動（教会社会における福祉活動）は多少とも知っています。皆さんはボランティアとして（草の根的に）地域のなかで活動しておられ、それに対する期待は大きいと思

われます。暴力・虐待は身近な関係から隠蔽（いんぺい）されやすい状況にあるのです。行政に頼るのではなく、草の根的なところで被害者が被害者アイデンティティーを持てるように、そして加害者が加害者の自覚を持つことができるように、地道な啓蒙と相談を受けるなかで、身近なところで風穴になれる関係性を皆さんの活動のなかで築いていただくことを期待し、そしてお願いしたいと思います。

遠藤 優子（えんどう・ゆうこ 遠藤嗜癇問題相談室長）

精神保健福祉士、臨床心理士。このセミナー講演直後に体調を崩し、2008年1月に死去。54歳だった。淑徳大学社会福祉学部で精神医学ソーシャルワークを学んだ後、成増厚生病院、嗜癇問題臨床研究所付属原宿相談室（CIAP）を経て1992年、民間の有料カウンセリング機関としては初の遠藤嗜癇問題相談室を開設。アルコール・薬物依存症・摂食障害・共依存などの問題や、近年は虐待問題に取り組んできた。さまざまな問題は、個人病理よりも家族を一つの機能としてとらえる家族システム、つまり夫と妻、母と子、父と子という三角関係のゆがみが原因で表出するという『家族システム論』を実践。各地で臨床心理士の養成に力を入れていた。『この心のいたみ、見えますか？ 児童虐待のケア』などの著書は <http://www.path.ne.jp/ecrap/> を開くと申し込める。

児童虐待死亡事例に学ぶ

柏女霊峰（淑徳大学総合福祉学部教授）

わたしは虐待という現象にどのように向き合い、付き合っていけばよいのかについてお話ししたいと思います。一つは虐待せざるを得ない親、そして虐待を受けている子どもたちを地域で支えていくためにはどうしたらよいのか。不幸にして虐待で子どもたちが、ここ数年、一週間に一人どこかでいのちを失っております。二つ目は、その子どもたちがなぜいのちを失わなければならなかったのかを検証していく作業を通して見えてきた、いくつかの問題点をお話させていただきます。

児童虐待はなぜ起きるのか

増えるネグレクト

子ども虐待というのは、いわゆる児童虐待防止法という法律で四つのタイプに規定されています。身体的虐待（45%）、ネグレクト（37%）、心理的虐待（16%）、性的虐待（3%）の四つです。この四つのタイプのうちで最近増えてきているのが、ネグレクトです。2004年度は37%ですが、2005年度は38%に増えています。他の三つの虐待は子どもに対して何かをする虐待です。ネグレクトは子どもに対して、何かしなければいけないことをしないという虐待です。子どもに必要なケアをしないという虐待が増えている、これは日本が人と人とのつながりや倫理観を失っていくという大きな病にかかっている、その表れだろうとわたしは思っています。

子ども虐待に五つの要因

不幸にして虐待で子どもたちが、ここ数年、一週間に一人、どこかでいのちを失っています。子ども虐待は一つの要因だけでは起きません。五つの要因があると考えられます。

①親の成育歴も含めた親自身の問題 ②夫婦関係や家族の病気などのストレスフルな家庭状況 ③近隣や親族を含めた社会からの孤立 ④手のかかる子ども自身の問題 ⑤親子分離体験、相性の悪さなど、親と子どもとをめぐ

ぐる状況の五つです。

こうした背景に加えて、子育てなど手間暇かかることを嫌う社会状況、あるいは母親だけに過剰にかかる子育ての負担と子育ての孤独、さらには子育てと就労社会参画の両立困難といった社会的な背景が複雑に絡み合っ

『ヤマアラシのジレンマ』

子ども虐待によって、子どもは大きな被害を受けます。しかし親自身も大きな代償を抱えていくことになります。虐待の問題を親子の絆という視点で考えてみましょう。

ドイツの哲学者、ショーペンハウアーは『ヤマアラシのジレンマ』という寓話（ぐうわ）を書いています。雪が降っている冬、山奥の洞窟の中に二匹のヤマアラシがいました。そのヤマアラシが寒いので、お互いに体を寄せ合って暖を取ろうとすると、お互いのトゲが刺さって痛くて仕方がない。かといって離れてしまうと寒い。近づけば痛いし、離れば寒い。こうしたジレンマのなかで、わたしたち人間は生きています。お互いに痛くも寒くもないかわり方をどうやって見つけ出し、いけばよいのか、親子の絆もまさにそうなのだろうと思います。

もつれてしまう親子の絆

親子の絆をつくろうとして、わたしたちは親になろうとし、また子どもであろうとする

わけです。しかし親子の絆は、親子だけではなかなか形成できないことに気付かされます。昔はさまざまな人とかかわりのなかで親子の絆はつくられていきました。しかし、今は人と人とのつながりが断たれ、親子だけで絆をつくっていかねばなりません。

ところが絆はすぐにもつれてしまいます。そして互いがくっついてしまい、互いのトゲで刺してしまう。こうして虐待の問題が起るようになります。あるいは逆に、離れてしまって互いに関心を持たないという放任の状況も生じます。このもつれてしまった絆、互いに好き好んでもつれたわけではありません。しっかりと絆をつくっていかないとだれもが思いながら、もつれてしまう。そして、もつれたものは自分で自分を縛ってしまう、あるいは親子を縛り、抜け出すことができなくなってしまう。こんな状況に陥ってしまっているのが、虐待の問題と言えるかもしれません。

紡ぎ直すには第三者が必要

もつれた絆は二人だけでは絶対にほどけません。不幸にして虐待で子どもたちが、ここ数年、一週間に一人、どこかでいのちを失っております。もつれた絆を第三者がゆっくりほどいていくことが必要になります。そうやってほどけない、離れようとしなないこともあります。そういった場合、強制的にでも二人を離さなければなりません。親がどう言おうとも、子どもから引き離す。それは、親から子を救出するという側面もあります。そしてお互いに縛り合ってほどけなくなってしまった親子の絆をもう一度、距離をおいて、紡ぎ直していく。そのきっかけを与えるものとして、無理にでも、そのときは引き離さなければならぬと思います。この親子の絆をどうやって紡ぎ直せばよいか、これが虐待の問題なのです。

虐待が生じてくる関係のなかに、地域や親族からの孤立があります。最近の調査を見ますと、小さいときから大人たちとかかわり

を持って育った子どもが大人になったときには、地域の人たちの援助を得やすいし、得ることに抵抗がない。子育て、親子の絆は、親子だけではできないと考えたときには、さまざまな人々が子育てにかかわっていくことが必要になると思います。

子育て機能を社会の仕組みに

虐待を見つけた人に通告義務

虐待の制度的な問題についてですが、学校の先生や児童福祉施設の職員などは虐待を早めに見つける義務が課せられています。また虐待を見つけた人はだれでも市町村や児童相談所に通告することになっています。2005年度から市町村が第一次的な相談機関になりました。通告を受けた市町村、児童相談所は、すみやかに安全確認や調査を行います。この安全確認では、子どもを自分の目で見るのが大事になります。

寒い夜に、子どもが罰としてマンションのベランダに出されているのを、たまたま見つけた人が虐待ではないかと思い、児童相談所へ通告しました。夜中の零時ごろに、児童相談所の職員二人が出かけて行きます。ドアをたたいて、「ご近所の方から連絡が入ったので確認をしたいのですが」と言う。親は「子どもは自分が悪いと分かったので、今は、もう、中に入れて休んでいます。ご迷惑をおかけしました」と返事をしても、「お子さんが寝たのなら恐縮ですが、寝顔を確認させて下さい」と言わなければ、子どもがどこに、どういう状態にいるか分かりません。確認せずに帰ってしまうことが繰り返されるうちに、子どもがいのちを失ってしまう事態になります。

プライバシーより子どものいのち

しっかりと確認しないと大事になるのです。そのためには社会が変わっていかないと

ません。つまり親子のプライバシーの問題に社会がどうかかわるかという視点です。その視点が変わっていかない限り、つまり第三者が家庭の中に入って、大人がプライバシーを侵害されるよりも、子どものいのちが救われるならば、その方が大切だという社会通念をどう構築していくのか。これは、今の日本が直面している虐待防止についての最も大きな課題だと思います。

これまでわたしたちの社会は、虐待については、「親がやるならしょうがない」という態度でした。夏の暑い日に子どもを車の中に置きっぱなしにして、親がパチンコをしている、だれも通告しません。下手に通告して、もし親がパチンコではなく買い物に行っているとしたら、親に迷惑をかける恐れがある。ということで、見過ごす、通告をしない社会をつくってしまったのです。大人が被害をこうむるのは嫌だから、子どもが死んでも仕方がない。これが従来からの日本の考え方です。そして、その考え方の下に日本の社会の仕組みはつくられてきました。

「法は家庭に入らず」でよいのか

この仕組みのなかで、大人が被害をこうむるのは嫌だから、「法は家庭に入らず」で、法律は家庭の中にまで入っていけないのです。昔は、法律が入らなくても近所の目がありました。ご近所の人が、子どもを折かしてしまう親がいたら、その親の気持ちを聞いたり、必要な注意を与えたりしていました。つまり法律は家庭に入らなかったけれど、近所の目が入っていたわけです。ところが、今の日本社会は効率優先とともに、地域のつながりと助け合いが失われ、近所の目が入らない社会になりました。そして急速に、日本の社会は大人が被害をこうむるのがいやだから、子どもが死んでも仕方がないという社会になってきたのです。これを変えなければなりません。大人が多少被害をこうむることがあっても、子どものいのちが救われるならばよい

という視点です。そういう社会に変えていけるかが、これからの課題です。

つまり児童福祉施設員や市町村の職員に部屋まで入ってもらい、子どもの寝顔を見てもらうことができるかどうかです。あるいは子どもを起こして玄関に連れてくる。これができるか否かが、わたしたちの社会の変わり目になります。

子どもを産まない、育てない社会に

たとえばわたしが住んでいる千葉県の調査では、虐待通告の約3分の1が、本当の虐待ではなかったのです。子どもが激しく泣いていても、それは熱を出して泣いていた、ということだった。つまり3分の1の人たちは、通告され、職員に事情を聞かれ、被害をこうむり、頭にもくるわけです。しかし3分の2は虐待でした。だとするならば、3分の1の人は、我慢をするという社会になるか否かが問われているのです。

今、日本の社会は大人が社会を変える権限を持っています。

大人社会で、子どもがどのような状況に置かれているのか、わたしは二つのことをお話ししたいと思います。

一つは、子どもを産まない、育てない社会が進んでいることです。新しく生まれてくる赤ちゃんの子ども数が、第二次ベビーブームのピーク時の半分になっています。それにもかかわらず、保育所に入所する子どもが統計史上、最高を更新し続けています。そして、虐待が統計史上最高です。なかでも子どもを育てない虐待、ネグレクトが増えています。

二つ目は、子どもを囲い込む社会です。保育所に入所する子どもが増えています。放課後には児童クラブ、学童保育に入所する子どもが、統計史上最高です。そして学校でも子どもたちは囲い込まれています。子どもたちの放課後の生活保障まで学校が引き受け、「放課後子どもプラン」という計画が検討されています。つまり地域は危ない、子どもを

置いていくわけにはいかない。だから子どもを保育所・幼稚園・学校・学童保育のような施設に囲い込んで、柵の中で子どもを育ててもらうという社会が急速に進展しています。

人と人とのつながりが大切

こうした状況のなかでどうやって子どもを育てていくかが問題です。かつて地域社会が担っていた子育て・子育ての機能を社会の仕組みとして組み入れ、地域における人と人とのつながりを新しい形で再生していくことが必要です。ご近所の方が、親に折かんされている子どもの泣き声を聞いたら、朝になって声をかける。昔はこれができました。しかし、今できないのであれば、社会の仕組みとして行う。そのためにボランティアの人を国家が任命する。これが主任児童委員という制度で、1994年にできました。

このように制度として子育て支援システムをつくることです。昔は子どもを育てるのに煮詰まり、イライラしてしまった場合には、近所の方が子どもを預かってくれました。わたしの子どもも小さいときは、近所で預け合う関係がありましたので、わたしも預かってもらいました。「二人みるのも、三人みるのも同じだから、気晴らしにでも行ってらっしゃい」とか、「晩御飯まで食べさせてあげるから、遅くなってもよいから迎えにおいで」というふうに預かってもらったりしたように思います。しかし、今はこれがなかなか難しい状況です。預け合う関係を社会の中でもう一度つくろうということです。

一時間500円で子どもの世話

一つの例を挙げれば、「ファミリー・サポート・センター」事業が、国の政策としてつくられています。ファミリー・サポート・センターに事務所を構えます。ここに子どもを預けたい人、子どもを預かってよい人が、それぞれ会員として登録します。子どもを預けたい会員が電話をすると、ファミリー・サ

ポート・センターが、近くに住む預かる会員を紹介する。そして、この方なら大丈夫となったら、一時間500円程度で子どもの世話をするシステムです。子どもがけがをしたとき、何かあったときの保険料もファミリー・サポート・センターが補助します。このシステムがさらに発展して、時には子どもを預けている会員が、余裕が出てきたときには預かる会員になれば、地域に知り合いができて、預け・預かり合う関係ができてくることになると思います。

「在宅福祉三本柱」の子育て版

2003年、政府は児童福祉法を改正して、地域での子育て支援事業を法定化しました。これは「在宅福祉三本柱」の子育て版です。

子どもを育てている家庭のためのデイサービス、ショートステイ、ホームヘルプサービスを法定化して、子ども・子育て応援プランという計画の中で広げています。新たな仕組みを取り入れていくなかで、人と人とのつながりをつくっていく必要があると思います。子どもは大勢の人の中で育てられることが大切です。それを実現するために、こうした仕組みをつくっていくことが必要だと思います。

もう一つの点は、親子の絆の糸が絡まり合って、身動きが取れなくなってしまった場合には、第三者が上手に間に入っていかなければなりません。虐待を行政に通告することは、援助のルートに乗せるためのきっかけづくりです。決して、悪い親を告発することではありません。自分の力でほどけなくなってしまっている糸を、最初は強制的にでもほどいていかないと、その後の紡ぎ直しをすることができません。ほどけなかった場合に、子どものいのちが失われるわけです。次に、いのちを失った子どもたちの事例から学んでいきたいと思っています。

82件の死亡事例から学ぶ

国に虐待の実態検証義務

児童虐待防止法が2004年に改正され、2005年4月から虐待で子どもがいのちを失った場合に、国や地方公共団体は、その実態を検証する義務を課せられました。これを受けて厚生労働省はじめ各自治体・東京都・千葉県などが検証を行っています。これまでに国の検証については2005年4月の第一次報告書と、2006年3月の第二次報告書が出されています。わたし自身、この検証に部会長代理としてかわり、千葉県や他の自治体の死亡事例の検証にも参加する機会を得ました。そんななかで感じたことをお話しします。

二つの調査は、いずれも厚生労働省が把握している2003年7月1日から2004年12月31日までの児童虐待による死亡事例計82件（児童83人が死亡）について、現場からの報告書进行分析すると同時に、現地で担当者に直接会って話を聞いてまとめました。

児童相談所の対応も不十分

親子の絆がもつれて、子どもと親が離れられないケースは、都道府県の児童相談所が担当します。児童相談所は、子どもを強制的に一時保護する権限を持っています。

わたしたちの調査では、この児童相談所における組織的な対応や進行管理が不十分だというケースがかなりの数あったのです。つまり援助関係が担当者と利用者との関係に限定されてしまい、担当者もスーパービジョンが得られないまま、事態が進行してしまっているのです。また援助者と親子との間に「これだけやってきたのだから」という一種の同盟関係が生まれ、それが親子分離の判断を鈍らせていた可能性も出てきました。

親子分離の判断を鈍らせるもの

担当者が相談を受けている方に対して心血

を注げば注ぐほど、その相手と一種の仲間関係のようなものができてきます。「これだけ一生懸命やったし、あの人も一生懸命親子の関係を立ち直らせようと努力しているのだから、もう少し様子を見てもよいのではないか」「もう少し、在宅でかわりを持ってよいのではないか」といった気持ちが出てくるわけです。そうすると冷静な判断ができなくなってしまいます。そこに組織的な対応が必要になるわけです。つまり児童相談所の担当者が三ヶ月たったら、その状態をケースカンファレンス（事例検討会議）に出してもらおう。そして、のめり込み過ぎではないかとか、この点を見落としていないかといった外からの意見をもらうことが鉄則になっています。

ところが、それがなかなか守られない。その結果、担当者と利用者との間に、同盟関係ができてしまって親子分離の判断を鈍らせることになり、結果的にいのちを失ってしまうことが起きています。

岸和田市で起きた虐待事件

次にアセスメント（援助対象者についての情報収集と評価）と援助計画が不十分なために虐待問題が背景にあることを見過ごしたり、援助が拒否されたり、情報が不足したまま事態が展開してしまったケースもありました。DV（ドメスティック・バイオレンス）の心理規制や親の精神的病理に気付いていないため、虐待問題が背景にあることを見過ごしてしまうのです。

数年前に大阪の岸和田市で起こった事件がまさにそうです。中学三年生の男子が、体重20数キロの状態、大便たれ流しのまま閉じ込められ、意識を失った状態で救出されました。人間の生命力は、すごいと思います。その子はまだ入院していますが、元気になってきたようです。

その子は、中学一年生の時から学校に来ていないので、学校の先生が何度も家庭訪問をしていました。子どもの状態を親に聞いても、

親は「体調が悪く寝ています」と言い続けてきたのです。閉じ込められる前、外に出ていたときに親は「買い物に行っています。学校には行けなくて申し訳ありませんが、家では元気にやっていますので、もうしばらく説得してみます」と、先生をだましていたのです。

先生はその子が不登校だという認識はありましたが、虐待が背景にあることを知りませんでした。そのため「不登校」で、何らかの心理的援助、カウンセリングが必要だと、児童相談所に通告していました。児童相談所はそれを受けて、不登校という視点でかわりを持とうとしていました。不登校の場合、強力な登校刺激を与えると、子どもをさらに追い込んでしまうという認識で、会えるまでしばらく待とうと、直接は会わなかった。玄関で「今、寝ています」と親に言われると、「では、元気で頑張るようにお伝え下さい」と、帰ってしまった。結局、子どもを見なかったのが、虐待につながってしまったわけです。

家に入って子どもの安全確認を

援助が拒否されることがあります。拒否はしないが、親は上手に子どもに会わせないよう断ります。子ども、あるいは親に会おうとして面会の約束をしても、その時間に出かけて留守にしてしまう。このような場合も、性急な手立てが必要です。その手立ては、法律的に用意されている立ち入り調査です。調査票を持って、場合によっては警察の援助を受け、子どもに会わせてもらう。拒むと罰則が課せられますので、親を告発することも可能です。

1948年に児童福祉法ができたときから立ち入り調査制度はあったのですが、これまで日本ではこうした制度を使わなかった。わたしも十年間児童相談所におりましたが、一回も調査票を使ったことはありません。ところが今の社会はそれを許しません。しっかり家の中に入って子どもの確認をしなくてはならな

いのです。

切れないドアチェーン

そこで今は調査が年間約200件、二日に一回はどこかで行われています。援助が拒否されて、子どもに会えなかった場合、安全かどうかを確認するために調査は必ず必要です。ただし調査もドアチェーンを切って中に入ることはできません。中で切迫した状態にあるときには切ることも可能ですが、切迫した状況かどうか分からない場合は、ドアチェーンを切ることができないのです。この権限は警察にあります。2007年の児童虐待防止法改正のときに、これをどうしたらよいのか議論されました。そもそも警察が調査をしたらよいのではないかという意見もあります。

末端まで届かない情報伝達

さらに問題は連携、情報伝達の不十分さです。今は児童相談所だけがかかわるのではなく、市町村虐待防止ネットワークができています。そこにいろいろな関係者が入り、役割分担をして虐待防止にかかわることが多くなっています。ネットワーク会議が行われた後、情報伝達が組織の末端まで伝達されなかったために、虐待を見逃すケースがありました。ネットワーク会議に警察が参加し情報共有をしたのですが、それが派出所・交番まで伝わっていなかったために、派出所のお巡りさんは「また夫婦げんかだろう」と思って帰ってしまい、虐待が進行してしまったのです。

つまりネットワーク会議には、警察署の生活安全課の職員が来て、情報をしっかりと聞いているのですが、その情報が警察署の中で止まっていて、末端の交番の派出所のお巡りさんには伝わっていなかったのです。生活安全課の方から末端の交番のお巡りさんまで伝わっていれば、そのお巡りさんはそこで対処できなくても、生活安全課に連絡を取って指示を仰ぐことができたわけです。しかし情報が伝わっていなかったために、子どもがいの

ちを失ってしまったのです。

親子は一緒に、という援助観も問題

援助担当者の基本的な援助観にかかわる問題があります。わたしたちのころの中には、親子の絆は親子が一緒になって、共に生活しながら紡ぎ直していくことが大事だ、だから親子の関係を最大限大切にしなければならぬという思いがあります。児童相談所の職員のなかにもあります。すると親子が互いに離れたくないと思っているのに、間に割って入って、無理やり離すことは、なかなかできません。

さらに問題なのは、親子を引き離した後は、紡ぎ直す作業を誰かがしなければなりません。これを無理やり引き離す役割と、糸を紡ぎ直す役割をとともに児童相談所がやっているのです。これでは無理が生じるのは当然で、役割を分けようという議論がされています。これは制度上の課題として変えていこうということです。

不十分な関係機関の連携

児童福祉施設入所の事例にも問題があります。最近、秋田の虐待事件で亡くなったお子さんは母子生活支援施設に一時入所したケースでした。施設に入所すると、地域の人たちや担当者はホッとしてしまい、その後どうなったかはフォロー・アップしなくなってしまう。子どもが母子生活支援施設に入所した後、祖父母のところに行きました。親も施設に入所していましたが、すぐに退所して子どものところに行き、虐待してしまったのです。

病院や学校と福祉施設がうまくつながらない問題があります。医療機関・教育機関が虐待事例にもっと積極的にかかわり、関係機関との連携を強化する必要があります。

医療機関は妊娠した女性が診察を受けたり、子どもがけがをして運び込まれるなど、虐待されているかどうかをチェックしやすい状況にあります。特に問題なのは精神疾患の親が

受療している場合、医療機関と福祉機関が対立することがあります。親の立場からすれば、子どもの存在はとても大切です。しかし子どもがこのまま親の下にいる場合は、子どもの福祉にかなわない場合があります。つまり親が子どもを学校に行かせないで家に置いておくことは、子どもにとっては教育権が侵害されるわけです。親にとっては子どもといることがいのちの絆になっている。その場合、病院と児童相談所の意見が対立してしまうわけですが、患者の利益と子どもの利益を両立させるためにどうしたらよいか、十分な協議が必要となります。

必要な子育て応援サービス

子どもの場合は、在宅福祉サービスがまだまだ十分に整備されていません。高齢者や障害者の場合は、ショートステイ・デイサービス・ホームヘルプサービスなどが整備されて、介護は社会が行うものという一定のコンセンサスが得られています。

しかし、子どもの場合、子育ては親が行うものだという視点が強いので、子育てを応援するためのサービスが広がっておりません。ところが虐待せざるを得ない親たちは、さまざまな生活課題を抱えています。子どもを家庭から切り離して施設で育てる場合はそれによいのですが、親子の生活をやり直そうとする場合は、家庭基盤が非常にもろいので、ショートステイ、あるいは親子で通えるデイサービスのような場所、ヘルパーに来てもらうという在宅サービスが欠かせません。今は家庭が崩壊しない限りは、家で子どもを育てるのが当たり前という視点が根強いのです。このため在宅福祉サービスがそろっていない状況にあります。また子どもが一度施設に入所してしまうと、家庭復帰が難しい状態を生み出すことにつながっています。したがって在宅福祉サービスを広げていくことも大切になると思います。虐待で死亡したケースには、在宅支援サービスをはじめ施設、さらには里

親制度の質量両面の不足など、社会的養護体制の不備が原因であるというケースもありました。

児童養護施設の実態

増え続ける施設入所の子どもたち

虐待で家庭から切り離された子どもたちが暮らす場所としては、里親と施設があります。年齢の低い、特に乳児については乳児院があります。また2歳から18歳くらいまでは、児童養護施設で暮らすことになります。乳児院は全国に約120カ所、そして、児童養護施設は約560カ所設置されています。里親に委託されている子どもが三千人、児童養護施設と乳児院に入所している児童が約三万五千人と、両方合わせると約四万人弱になります。

このように、施設に入所している子どもの数は最近増え続けています。生まれてくる赤ちゃんの数は減り続けていて30年前に比べると半分になってしまいました。しかし施設、里親に委託される子どもは増えています。

問題多い大舎制の集団生活

このような子どもたちは、どんな生活をしているのでしょうか。児童養護施設の七割が大舎制です。大舎制とは、大部屋での集団生活です。年齢で分けたりする所が多く、幼児なら30人位が四、五部屋に分けられます。

わたしは千葉県の児童養護施設の在り方を検討する審議会にかかわっていますが、高校生が八人部屋で生活している施設もあります。もちろん男女は別ですが、八人部屋で高校生が集団生活をしている状況を想像してみてください。プライバシーがない。ベッドにカーテンはついていますが、二段ベッドが四隅にあって、そこで八人が暮らしています。虐待でここに傷を負った子どもが入所してくるなかで、彼らの生活は、いわば雑居房のようになっていると言われています。

ある児童養護の施設長は、児童養護福祉施設は野戦病院のようだと言っています。つまり、十分な薬と部屋がないのに、虐待でここを傷つけられた子どもがどんどん入所してくる。その子どものケアをする仕組みはお粗末で、薬、部屋も援助者もないのが現実です。

こうした状況を改めて、子どもたちの社会的養護の仕組みを変えていこうと、やっと歩み始めたのが現状です。大舎施設をできるだけ、ユニットケアにしていく。施設の中で五、六人の子どもたちを家庭に近い環境で暮らせるようにしていく。あるいは地域の中で一軒家を借りて、五、六人の子どもたちが職員と一緒にグループホームとして生活できるようにいこうと、ここ数年切り替える方向にあります。

深刻な一時保護所の待機児童問題

また里親に委託されている子どもたちは社会的養護を必要としている子どもたちの8%です。この割合を倍の15%にしようというのが国の計画です。しかし里親は、ほとんど増えていません。戦後、一時期は里親に委託されている子どもたちは、一万人近くいました。しかし日本が高度経済成長で豊かになるにつれて、里親が減るという矛盾した状況になっています。そして里親に委託されている子どもは五年前に二千人にまで減りました。今は、少し増えました。

なぜ増えたのか。それは児童養護施設が満員で、子どもが入ることができない状態です。今、保育所の待機児童問題が社会で注目されています。しかし、もっと深刻なのが、児童養護施設の待機児童問題です。表には出ませんので、新聞には取り上げられません。施設が満杯だからといって、子どもたちを家庭には帰せませんので、その子どもたちは一時保護所で長く生活することになります。今、千葉県では百人を超える児童が一時保護所で生活しています。児童は、自分はいったいどう

なるのかと、ころがすことができます。

社会的養護の貧困

児童相談所の職員は、施設に入所させたら、その子がどんな扱いを受けるかを一番よく分かっています。施設で生活するより、家庭で生活させたほうがまだましではないかと判断してしまう。これが判断を誤らせるわけです。また引き取りたいという親が出てきた場合、その子どもを返せば、待機している子どもを施設に入れられると思い、リスクを甘く見てしまいがちになります。そして多少のリスクがあっても子どもを家庭に帰してしまい、結果として再び虐待を受けていのちが失われてしまう。このような事態が現実起きています。これは、まさに日本の社会的養護の貧困が原因となっていると思います。

児童虐待への警告と援助

顔に傷があったら要注意

調査結果から学ぶことは、死亡事例ではいのちを失う子どもは乳幼児が多いことです。特に顔面や頭部の外傷には要注意です。これは、けがをさせた親が衝動をコントロールできなかった可能性を示しているからです。頭や顔など見えるところを殴り、傷を負わせるのは、自分の衝動をコントロールできない証拠です。冷静になれば、顔を殴れば翌日に保育園でばれてしまうわけで、それを危ないと思えば、見えない太ももや二の腕をつねります。衝動をコントロールできないために、虐待が二度、三度と繰り返されることになる。ですから顔に傷を見つけたら虐待が繰り返されていると判断しなければなりません。

乳児虐待が多い原因は何か

生後間もなくの乳児の死亡が多いのは、赤ちゃんが生まれるという喜びの反面、危機的な状況にも陥りやすい。つまり、家族、夫

婦のなかに異物が入り込む。わたしたちの身体もそうですが、異物が入り込もうとすると、なんとか排除しようとする。手術の後に、拒否反応が起こるのもそうだと思います。これまでのストレスへの対処法では対応できず、新たな対処方法を獲得していかなければならないわけです。そういう意味では、赤ちゃんが生まれて生後数ヶ月は、一番リスクが高い時期です。

子どもが泣きやまないのも、虐待の直接のきっかけになります。もちろん泣きやまない子どもがすべて虐待されるわけではありません。たまたまいろいろな条件が重なり、そこに泣きやまないという最後のパズルの一片が入ったとき、虐待という図柄ができるのです。この最後のパズルの一片は、泣きやまないことが多いのです。子どもがよく泣いて、親が激しくしかっている状況は、極めてハイリスクと言えると思います。

虐待の可能性示す兆候

虐待の危険性の高まりを示唆する兆候についてお話します。家庭訪問をして、子どもがそれほどやせてはいないから大丈夫、と帰る場合があります。保健センターの記録でチェックした半年前の体重が、増えていなかったり、逆に減っていたらリスクです。保健師が家庭訪問したときに、現在の状態だけを見て、虐待されていると思わなかったと帰ってきて、虐待死してしまう事例もありました。時系列できちんとチェックすることが大切です。

もう一つの例は、3歳の子どもが親に殴られたりしているという通告があり、保健師さんが家庭訪問をしたケースです。その親はきげんがよく、子どもが親にベタベタとなついていたので、大丈夫と思って帰ってきました。一般に虐待されている子どもは、虐待が実際に行われているときは「凍りついた凝視」という表現に象徴されるように、親に対して無反応、殴られても蹴られても泣きもしないで、

それが親の怒りをかき立てます。その反動から親が機嫌がよい場合、普通の親子関係以上に子どものべたつきが起きるわけです。このべたつきだけを見て、この親子関係は良いと帰ってしまうのは危険です。

切り離す権限持つ児童相談所

児童相談所など各機関は、その機関しか持てない権限があります。この権限を行使しないで親子の関係を大事にする役割をとり続けると、虐待に発展してしまうケースもあります。親子の関係を大事にする役割は市町村でもよいわけです。切り離す権限は児童相談所しか持っていないので、その必要があれば切り離すべきです。役割分担に徹する必要があります。

最近、京都、秋田であったように、いのちを失う子どもは後を絶ちません。構造的な問題もあり、社会の在りようをはじめ制度を変えていく必要があります。もちろん市民の意識も変わらなければなりません。そうしたなかで、わたしたち一人ひとりは何ができるかを考えていくことが大切です。

一振りで変える万華鏡援助論

最後に、実践に求められる基本姿勢についてお話ししたいと思います。わたしは、万華鏡援助論という言い方をしています。虐待問題に対応するとき、大きく二つのかかわり方、変え方があると思います。万華鏡の中にきれいな図柄があります。この図柄を虐待とします。この図柄を変えるためには、どうすればよいか。一つは因果論に基づく形の変え方です。

原因があって結果がある。だから原因となるものを取り除けば、結果が変わるはずと考える。そこで中に手を突っ込んで、右にあるガラス片を左に、左のものを右にもっていく。あるいはガラス片を足したり、取り出したりして、形を変えるやり方です。

お腹が痛い場合に、原因があるはずだとさ

まざまな検査をし、十二指腸に潰瘍を見つけ、この潰瘍が痛みを引き起こしています。この痛みには効く薬を差し上げます。この薬を飲んだら痛みが治りました。これが因果論に基づく形の変え方です。

もう一つの形の変え方は、万華鏡を一振りすることです。中の物は何もいじらない。でも一振りすれば形が変わります。これは、仏教で言えば、縁起という考え方です。物事は、縁によって起こっている。何一つ実体のあるものではなく、たまたまいろいろな要因が重なって今の現象が起こっていると考えます。だから変えるために原因を探るのではなく、形を変えるにはどうすればよいか、変えやすいアプローチを探すことが大切になるわけです。

赤ちゃんを窒息死させた父親

たとえば虐待でこんな例がありました。父親がリストラされて、再就職がなかなかできない。夏の暑い日に面接に行ったが、良い結果が出せなく、意気消沈して家に帰ってきた。台所で水仕事をしていた妻が、「結果はどうだった？」と聞く。父親は「たぶんダメだと思う」と答えると、妻は「また、ダメだったの」と返したので、父親は「うるさい！」と怒鳴った。たまたま、1歳、3歳、5歳の三人の子どもがいて、一番下の赤ちゃんが泣いていた。すると父親は、赤ちゃんが寝ている横に積んであった布団の間に赤ちゃんを押し込んで二階に上がっていった。そのため赤ちゃんが窒息死してしまったのです。

この虐待に、どう対応すればよいか。父親の再就職先を探す。あるいは夏の暑いイライラする日に、ヘルパーを呼んで子どもの世話をしてもらうことも必要でしょう。役割を担ったさまざまな人がネットワーク会議に集まって、どうすればよいかを話し合う。就職したら形が変わるかもしれないので、職安の方にも会議に入っていただく。悪者探しをするのではなく、今の形を変えるにはどうすればよいかを考えるわけです。

虐待が起きる原因は一つではないと思います。さまざまな要因が重なり、子どもが泣きやまない、そして妻から罵倒（ばとう）されて、虐待という形が完成する。そう考えると赤ちゃんが泣きやまないのが悪い、妻に優しさがなければ原因探しをしても仕方がない。つまり形を変えるにはどうすればよいかを考える。これがわたしの万華鏡援助論です。

子育ては次世代をつくる営み

最後に協働の必要性が求められていることを強調したいと思います。このためには、さまざまな人たちが手をつなぎ合っていくことが必要です。「地域わくわく子育てフォーラム」を全国社会福祉協議会が企画しました。今、さまざまな子育て団体がありますが、必ずしも連携がうまくいきません。つぶし合いが起こる場合もあります。そうではなく、ゆるやかに連携し、つながっていこうという

ことです。それぞれ、メリットやデメリットがありますが、自分のメリットやデメリットを確認し、助けてもらうというメッセージを出すことが大切です。

「子はいかすがいい」と言われています。「子どもは、おとなが次の時代に贈る生きたメッセージである」と言った人がいます。また、子育ては次世代をつくる営みです。子どもは人と人をつなぎます。また、時代と時代をつなぐかすがいの役割も果たしています。この子育てを応援していくことで、虐待の被害に遭う子どもたちが、今は一週間に一人ですが、これが一ヶ月に一人になり、さらにはゼロにする。虐待はゼロにはならないと、わたしは思います。しかし、虐待死はゼロにすることはできます。これには大人たちの英知が必要と思っています。ご清聴ありがとうございます。

柏女 霊峰（かしわめ・れいほう 淑徳大学総合福祉学部・同大学院教授）

臨床心理士。東京大学教育学部教育心理学科を卒業後、千葉県市川、柏児童相談所で心理判定員、厚生省児童家庭局企画課児童福祉専門官を経て、教育の道に転じ、1994年に淑徳大学へ。日本子ども家庭総合研究所子ども家庭政策研究担当部長。厚生労働省社会保障審議会児童部会委員。大学在学中に真宗大谷派教師資格を取得。児童虐待防止法、改正児童福祉法の立案や児童虐待死亡事例の検証にも参画するなど、児童虐待問題のエキスパート。著書に『現代児童福祉論』（誠真書房刊）『児童虐待とソーシャルワーク実践』（編著、ミネルヴァ書房刊）『子ども家庭福祉・保育のあたらしい世界』（生活書院）『子ども家庭福祉サービス供給体制』（中央法規）など多数。日本子ども家庭総合研究所のウェブサイトは <http://www.aiiku.or.jp>

第2部

子どもや女性にとって 暴力を受けるとはどういうことか

暴力を生き延びたわたしたちにとってのこころのケア

中島幸子（NPO 法人レジリエンス代表）

なぜ、わたしが仲間と「レジリエンス」の活動をしているかという、わたしを含めて何人かがDV（ドメスティック・バイオレンス）の被害体験を持っているからです。今、暴力のある所から離れることができたからこそ、できる活動だと思います。でも暴力の渦中にいたときや逃げ出してしばらくの間は、とてもつらい時期が続いていました。そういう体験を今もされている方のために何かできないかと思い、スタートさせた活動団体がレジリエンスです。これからお話するのはDVという重いテーマです。家に帰られた後もこころが重く感じられるかもしれません。そういうときは、ご自分に優しくしていただければと願っています。

複雑で、目に見えないこころの傷

人が人を傷つけるという行為

わたしたちの活動は、トラウマを抱えた女性のこころの健康を取り戻し、維持していくためのサポートで、DVに焦点を当てています。でも人から人への加害行為は、世の中にたくさんありDVだけではありません。虐待も、今、テレビで盛んに取り上げられているいじめの問題もそうです。どれも人が人を傷つけるという要素が見えてきます。これらの問題はすべて共通点があり、今日の話はDV以外の場面にも当てはまります。

DVであろうと、虐待であろうと、いじめであろうと、他人事（ひとごと）ではありません。でも一般的には「わたしには直接関係

ない」と思いがちです。そうではないのです。たとえば今の社会を見ると、引きこもりやニートと呼ばれる人の数がどれだけ多いことか。何十万人という統計が出ています。たぶん、実際はもっともっと多いでしょう。何十万人の人たちが、今の社会に出にくい、家から出るのが嫌だ、職場に行くのが危険だと思っています。なぜ、これだけたくさんの人たちが社会に出るのを拒んでいるのか、わたしたちが暮らしている社会は、どういう社会なのか、真剣に考えないといけないと思います。

他人事ではない暴力・虐待

日本の自殺。わたしたちは、自殺のことを自死と呼んでいます。毎年、三万人以上の人々が亡くなっています。2005年の統計は三万二千人以上です。こうした統計がニュースで取

り上げられたときに「そうなのか」で済ませるのではなく、三万二千人を365日で割ると、毎日90人近くの人が亡くなっている、その社会はどういう状態にあるのか。単に三万何千人が亡くなるだけでなく、置いていかれたと感じる方々（家族・親類・友達・職場の同僚など）も傷つきます。その数を合わせると、膨大な数になります。いじめ・虐待・DVの被害に遭った人、そして今傷ついて家から出られない人たち、この世を去って行く人たち、去った人の後に悲しんでいる人たちの数を足してみてください。これらの問題を「わたしには関係ない」と無視しないで、とても大きな社会問題であり、変えていくには、一人ひとりが自分の生活の中で、何ができるのかを意識しなければ、変化は起きないのだと受け止めてください。

被害に遭った人を尊重する

暴力を無くしていくためには、いろいろな方法があります。日常生活に取り入れられる一つの方法として、お互いに尊重し合う関係を築いていくことです。尊重については後でお話しますが、一つの要素として自分と相手が違ってよいと思えることです。「この人はおかしい」とか「普通でない」と思うのではなく、「単なる違いだ」と受け止めるようになったら、もっと楽な社会になると思います。

たとえば「被害者」と「被害者でない人」について、尊重を込めた考え方をすると、違いは単に暴力に遭った人、遭っていない人の差だけです。「暴力に遭った人＝かわいそうな人」と見るのは、尊重を欠いた行為になります。「かわいそうな人」と思うことは、わたしと関係ないけれど、かわいそうだから何かをしてあげなければという発想につながります。

この発想自体は、悪くはありません。でも「してあげる」のではなく「する」という感覚をもつことです。言葉の小さな違いですが、

大きな差を表しています。「してあげる」は、上から下へという発想です。被害に遭った人は下にいる人たちではないのです。逆にたくさんの方の力を持った人たちです。

加害者は「Bさん」と呼ぶことに

生き延びてきた人、逆境に耐えてこられた人。つまり被害体験は、虐待やDVやいじめだけでなく、交通事故や震災の被害も同じです。どの被害も、自ら被害に遭いたいと思って遭う人はいません。そう考えたときに、被害に遭った人に「被害者」というレッテルを張る必要はないと思います。

レジリエンスでは、加害者・被害者という言葉で、できるだけ使わないようにしています。加害者は、人を傷つける、暴力を振るう人という意味のバタラー（＝英語 batterer）のBをとって、「Bさん」と呼んでいます。

被害者は「☆（ほし）さん」に

被害者は「☆（ほし）さん」と呼んでいます。夜空の星、自分らしさの輝きを持っている人たちという意味です。被害というマイナス部分ではなく、プラスのところに焦点を当てるのが大切です。被害体験を乗り越えてきた人たち、今暴力を受けながらも毎日強く生きている人たち、自分らしさを見失わないように日々努力している人たちかもしれません。いろいろな輝きを持っていることを忘れないでください。

被害者にとって被害者であることがすべてではありません。わたしの話を聞かれた皆さんは、わたしを「DVの被害に遭った人」と思われるでしょう。しかしわたしは、被害者という自分のアイデンティティーもありながら、他のアイデンティティーも持っています。確かに被害体験のために弱くなった部分があります。でも強くなった部分もあります。

身体に傷跡がないところの傷

DVのこのころの傷つきという点に焦点を当

ててお話したいと思います。報道では、「DV＝暴力」というイメージが強く打ち出されます。このイメージではDVは身体に傷跡がつく暴力と思われがちです。しかしすべての傷が身体の外につくわけではありません。たとえばわたしは被害者に見えないかもしれません。それは外側に傷跡がないからです。

医者に骨折した理由を言わなくても、骨折したところを見せることで治療ができます。こころの傷はもっと複雑です。有名な精神科医でも、こころの傷を見通すのは簡単ではありません。自分のこころはどこにありますか。「ここにいます」と、指を差せる人はいないはず。場所がない得体の知れないものがこころなのです。でもそこが傷つくと人は苦しみ、つらい思いをします。つまり傷跡は見えないところにあるのです。見えないものを信じる力は教会の教えのなかにもあると思います。その力を忘れないでください。

こころの傷を自覚することが大切

☆さん自身がこころの傷を自覚することも大切です。当事者自身が見えなければ大したことはないと思ってしまいがちです。でも「わたしにとって大したことなんだ」と気付いたときには、傷ついたこころのケアへつなげてください。こころがひどく傷ついていても、外見は何も問題がないように見えると、周りの人から理解されないこともよくあります。

周りの世界は、時計やカレンダーなど時間の世界で動いていますから、物事を時間で測ります。トラウマとなった出来事が昔であれば、周りの人たちは「それって何年も前の話でしょう」という言い方をします。「もっと前向きに生きれば」と言うかもしれません。

何十年も溶けないこころの傷

こころの傷は時間とは無関係で、身体の高とは癒え方がまったく違います。身体の高は、時間がたてば、身体が少しずつ癒してい

く力を持っています。こころの傷は、傷ついたところが凍り付いて、溶けないまま何十年も残っている場合もあります。☆さんが「まだきつい」と言っているときには「身体は動けるでしょう。仕事に出たら」「そろそろ友達と出かけたらどうなの」という言い方ではなく、その人が今きついと言っていることを尊重しましょう。「わたしには分からないし、見えないけど、そうなのだ」と思える力を、一人ひとりが身につければ、もっと住みやすい世界になると思います。

18年も昔のことなのに

わたし自身の体験は昔のことです。20歳から24、5歳までの四年半の体験です。そのなかで身体的暴力・性的暴力・精神的暴力・経済的暴力を体験しています。逃げ出したのが1988年だから、もう18年もたっています。今でも思い出すときつくなることがたくさんあります。今は年に二、三回ですが、当時起きたことの悪夢を見ると、五日間も身体がおかしくなってしまうのです。一般的には「18年も前のことでしょう。今は安全な場所にいるのに、なぜいつまでも」と思われがちです。でも、そうではないのです。こころの傷つきはすごく複雑な問題です。それをお互いに分かろうとする力、分からなくても分かろうとする努力が大切だと思います。

パワーとコントロール

上下関係に潜む危険性

DVは暴力と思われがちです。しかし暴力以外にも、パワーとコントロールが含まれます。これはDVだけでなく、虐待やいじめにも同じことが言えます。

「パワー」は言い換えれば権力、力です。健全なパートナーシップの関係ではお互いが対等で、同じ目線で尊重し合うことが前提です。対等でなくて、一方が上に立ち、他方が

下に置かれる構造は、下に置かれた人が非常にきつい思いをします。上にいる人は、多くの権利や権威を身につけていますが、下に置かれる人は、権利などを持ってはいけないうち場になります。つまり対等な関係ではなくなるのです。上下関係自体が悪いものではありません。しかし上下関係に危険性が潜んでいます。上にいる人が自分の持っている権威を悪用したとき、下にいる人は傷つきます。このような構造は、いじめや虐待や会社でのパワハラにも当てはまります。皆さん自身の身近な関係に当てはめてみてください。家族・教会・職場の中で起きていることかもしれません。どこでも起き得ると考えたときに、他人ごとではないと思えてくるはずですよ。

上から下へ仕掛けてくるコントロール

上に立つ人が、下にいる人に仕掛けてくるのが「コントロール」です。コントロールを言い換えると、制限・強制・支配になります。上にいる人の考えが正しいとされ、下の人が違う意見を持つと否定されたり、却下されたり、無視されたり、「なんてバカなことを言っているわけ」と批判されたりします。つまり上にいる人の思い通りにならなくてはならない構造です。このコントロールを効かせるために暴力が使われたときに、DVやいじめや虐待が発生します。

Bさんのコントロールの仕方

ではこのBさんが、世の中すべてに加害行動をとるかということ、そうではありません。たとえば、Bさんが自分にとって何らかのメリットがあると思っている人たちには、「とても良い人」である可能性が高いです。上司からしてみれば、よく働き自分から積極的に動く部下だったり、近所の評判はとても良い人だったりします。Bさんにとって、メリットがある人たちへは「良い人」という面を出します。Bさんがそれ以下と考える人たちに対しては、傷つけてもよいという感覚を持っ

ているので、この使い分けが見えてきます。

暴力は意図的な行為

自分の目の前にいる人が誰であるかによって、自分がどう出るかを変えるということは、暴力は意図的な行為だということを示しています。自分がどう出るかを自分で決めているからです。つまり暴力を振るう人に100%責任があるのです。どういう問題であろうと暴力を使わない解決方法は必ずあります。そうであるにもかかわらず、暴力を用いることは、その決断をした人に100%責任があるのだと考えてください。

相手によって態度を変えるBさん

この構造の中で、☆さんが「今、わたしはひどい目に遭っていて、すごく苦しんでいます」と訴えたときに、なかなか理解されることが多いのです。というのはBさんが良い面しか見せていない人たちにとっては、Bさんはひどいことをする人には思えないからです。そうすると訴えた☆さんに「あなたがおかしいのではないの」と、逆に問い詰めてしまいがちです。確かにBさんは良い人でいられるときもあるけれど、悪い人のときもある。Bさんは相手によって態度を変える可能性があることを忘れないでください。いじめであろうと同じです。学校でいじめている子や、家では良い子にしている可能性もあります。家ではいじめている子に見えないからといって、他の面がないわけではありません。

DVは海面下に沈む冰山

パワーとコントロールは、色も形もありません。しかし影響力が強いのです。冰山にたとえると、パワーとコントロールは海水の下に隠れている部分なので、外からは非常に見えにくく、気づきにくいのです。

レジリエンスで活動するときは、スタッフのさつきさんと一緒に講演することが多いです。彼女の場合、結婚していたときに、夫

から精神的暴力を受けた体験があります。たとえば年賀状をつくるため、夫は幸せそうな家族の写真を百何十枚も撮るのです。寒いなか、赤ちゃんを連れて公園に行き、百何十枚も撮るのは大変なことです。対等なパートナーシップであれば「そんなにたくさん撮ってどうするの」とか、「十枚で十分ではないの」という話し合いが可能です。対等でなければ、上にいる夫の言った通りにしなければ危ないことになります。夫が「百何十枚撮る」と言ったら、何時間でも、赤ちゃんが泣いても頑張って立っていなくてはならないのです。送られてきた年賀状を見ても、その事実は見えません。事実とは逆の幸せそうな家族が写っているだけです。このようにパワーとコントロールは氷山のように大部分が海面下に沈んでいて、見えにくいのです。

自分の感覚を押し付けない

家族のなかで危険なことが起き始めたとき、周りが気付くことは少ないのです。気付いても、本当かなと疑ってしまう場合も多くあります。わたしたちが互いをサポートするためには「つらいです」と訴える人の「つらい」という感情に対して何ができるかを考えることが必要です。出来事の原因を探って、判断するよりもまず、つらいという感情を受け止めてください。人の感じ方はそれぞれ違います。世界中にこれだけ多くの人がいて、わたしとまったく同じ人はいません。だから一人ひとりが感じることは違ってきます。

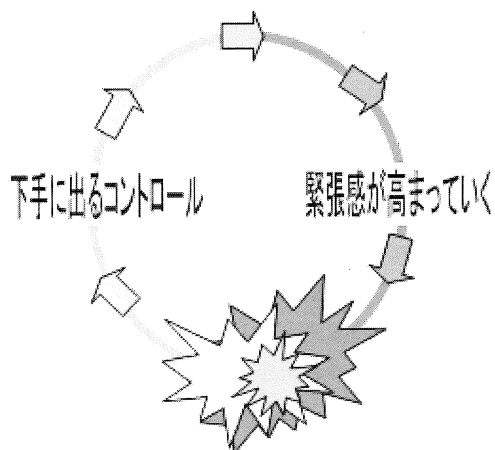
同じ出来事を体験した人が二人いたとします。「大したことはない」と感じた人が「傷ついた」と思った人に「あんなこと大したことないじゃない」と言うのは簡単です。しかし、これは尊重に欠けています。自分にとって大したことではないからといって、それを相手に押し付ける必要はありません。自分にとって大したことではないけれど、相手にとって大したことだったなら「つらかったのね」という受け止め方をしたとき、初めて二人の間で

尊重し合う関係が成り立ちます。自分の感覚を人に押し付けない。人が話したことを否定するのではなく、まず「そうだったの」と受け止めることは、こころがけしだい誰にでもできることではないかと思います。

DVのメカニズムを解明する

緊張感が高まりハラハラ

DVのサイクルは、30年ほど前にレノア・ウォーカーさんが考えついたものです。



右側は緊張感が高まって、☆さんがハラハラする時期です。このハラハラ感がとてもきついです。怖い映画を観たとき、ドアの向こうに怖いものがいると分かっている、そこに近づいていくシーンは、ハラハラ緊張します。映画だと理解していても、人間はそういう反応をします。実際生活のなかで、この状態が何日も続くときのストレスは大変なものです。緊張感を高めることは、コントロールの一種です。そして暴力が発生するとします。暴力自体もコントロールの一種です。暴力を振るうことにより、相手が自分の言いなりになればコントロールの手段になります。左側は、もともとハネムーン期と言われ、わたしたちは下手（したて）に出るコントロールと呼んでいます。左のところでは、Bさんが「もう二度としない」と謝ってきたり、プレ

ゼントやお土産を買って帰って来たり、今まで話そうとしなかった日常生活の会話をして愛想よくするからです。

優しさもコントロールのため

左側だけ見ると、とても良い人に見えるかもしれません。しかし本当の優しさではありません。本当の優しさであれば、右の部分や爆発はありません。期間限定の左側の優しさは偽りの優しさで、コントロールを表しています。ある目的のために優しくしているだけだからです。自分の罪悪感を弱めるためだったり、相手に出て行って欲しくなかったり、離婚されたら困ると思うからかもしれません。人によって違いますが目的のために左側の部分があるとすれば、右側の部分も左側の部分もすべてコントロールのために起きていることを表しています。コントロールの種類が違うだけでDVは、Bさんとなる人と☆さんとなる人が毎回同じ、それがグルグル回っているという構造です。二人の間では常に同じことが起こり続けます。密室、親密な関係、外から見えない風通しの悪さなどの要素が大きくなってくると、コントロールがかけやすくなります。

これが危険な兆候

このサイクルが小さくなって暴力の頻度が上がってきたら、危険度が高まってきたと思ってください。爆発の仕方がエスカレートしてきているのも危険性が上がってきた証拠です。たとえば身体的暴力で、最初は平手打ちだったのが、首を締められるようになったら、死ぬ可能性が高くなっています。これが精神的暴力であれば長期間続くため、こころに傷が入り大変傷つきます。こころに傷が入ると人は弱くなります。弱くなったら、うつ状態になる可能性が高まります。自傷行為にはしるか、アルコール依存症になるか、自死を考えるかもしれません。危険性はたくさん潜んでいます。

生きる力を弱める言葉の暴力

暴力を四種類に分けるとすれば、身体的・性的・経済的・精神的暴力に分けられます。精神的暴力の中に言葉の暴力も含まれます。言葉の暴力は二種類あります。「死ね」とか「バカ」などの直接的な言葉の暴力と、もう一つは脅しです。脅しは他の種類の暴力を再現することができます。たとえば「ああいう目にまた遭いたいのか」と脅すだけで、殴られた出来事や痛みやつらさを再現する力を持っています。言葉の暴力は一般社会では軽視されがちです。「言葉の暴力で死ぬ人はいない」と思われがちですが、死ぬ人はいると思います。いじめでたくさん子どもたちが亡くなっているのはなぜでしょうか。言葉の暴力で傷つけられ続けると、こころがなえて生きる力が弱まっていきます。見えないところに入る傷つきを軽視してはいけません。子どもたちに「人を傷つける言葉を吐いてはいけません」と、大人がきちんと伝える必要があります。

指一本触れないでも身体的暴力

身体的暴力は、具体的な例が示しやすい暴力です。殴る、蹴る、やけどを負わせる、髪の毛を引っ張るなどたくさんあります。でも相手に指一本触れずに身体的暴力を与えることもできます。たとえば相手が傷ついているのに、病院に連れていかない、治療を受けさせない。そのために亡くなった人もたくさんいます。弱っている人に、食べ物や飲み物を与えないケースもたくさんあります。

妊娠でDVはエスカレート

DVは、Bさんが男性で、☆さんが女性であるパターンが一般的です。その逆にBさんが女性で、☆さんが男性であるケースもあります。Bさんも☆さんも男性同士、または女性同士のパターンもあります。どんなパートナーシップでも起こり得ることです。ただ圧倒的に多いパターンは、Bさんが男性で☆さ

んが女性です。統計にも表れていて、日本だけでなく他の国の統計でも同じです。女性である☆さんが妊娠した場合、暴力がスタートするか、悪化する可能性が非常に高いというデータがあります。たとえば避妊に協力しないのも大きな暴力です。避妊に協力しなければ女性は妊娠します。妊娠したらDVや暴力がエスカレートする可能性が高くなり、早産・流産・死産につながったり、中絶しなければいけなかったりします。望んでいない子どもをたくさん産むことになるかもしれません。

どこかにグレイゾーンがある

一般社会や教会では、結婚に対する思いが強くあります。しかし良い結婚もあれば悪い結婚もあるのです。暴力が起きている結婚は良いとは言えません。互いに離れることが、正解であることもあります。一般に親子関係は良いものとされていますが、子どもが傷つけられる場合もあります。そんなときは、子どもが親から離れることが子どものためになることもあります。すべてを100%良いもの、悪いものと分けてしまうのではなく、白と黒の中間にグレイゾーンがあることを忘れないでください。人間は余裕がなくなると白黒で考え始めます。良いもの、悪いものと分けて考えたほうが楽だからです。

良いところもあれば悪いところもあると考えるには、力が必要です。たとえば一人の人間を「良い人」か「悪い人」かと考えた方が簡単です。しかし人それぞれ悪いところもあれば良いところもある、と考えた方が健全な付き合いが出来ます。グレイゾーンがどこにあるかを考えられればよいのです。たとえば子どもがたくさんいる家族は、一般社会では夫婦の仲がよい証拠と思われがちです。もちろん、そういう場合も多くあります。でも二人のうちの一人が性的決定権のない関係にあれば、望んでいない子どもがたくさん生まれることになります。そのような可能性があることを見失わないようにすることも大切です。

お金で自由を奪う経済的暴力

経済的暴力は、お金を使って自由を奪ったりすることを含みます。たとえばBさんが働きたいと言うのに「だめだ」と拒否する場合もあれば、「今はきつから仕事を辞めたい」と訴えても「だめだ」という場合もあります。Bさんにしか収入がない場合に、お金を渡さないことや足りない程度にしか渡さない、あるいは必要な場合は土下座しないと渡さないこともあります。

範囲が広い精神的暴力

これらすべてを含むのが精神的暴力です。精神的暴力の枠が一番、広いのはなぜかというと、こころが傷つくことだからです。殴られて、蹴られて傷つくのは身体だけでなく、こころも傷つきます。性的決定権が無い関係でも、こころは傷つきます。お金のことで苦しい思いをずっとしていたら、こころも傷つきます。つまり精神的暴力はすべての暴力につきものです。でも、ここからここまでが精神的暴力ですと定義づけることはできません。行為では分けられないのです。一人の人は何とも思わない出来事でも、別の人はすごく傷つくかもしれません。何が暴力になるのか傷つきになるのかという基準は、一人ひとりにあってよいと思います。共通の定義をつける必要はありません。これだけ多くの人がいて、さまざまな感じ方があるのですから、自分がどう思っているかで決めてよいと思います。

なぜDVから逃げられなかったか

暴力を受けていたことを認める勇気

暴力にあっていたことを認めるには、大きな力があることを忘れないでください。わたしは人前で暴力について一年間に百何十回も話していますから、このように話が出来ます。でも最初は、すごくつらく感じました。身近な人に話そうとしたときは、言葉が出て

くるまで二時間以上かかりました。暴力を受けた人に責任はありません。しかし残念なことに大きな恥を感じてしまいます。本当は恥を感じるのは、Bさんだけでよいはずですが、被害に遭った人が感じてしまいます。惨めに思ったり人に話したらどう思われるかと考えたり、どうしてこんな恥ずかしいことになったのだろうと悩んでしまう。これが暴力の恐ろしい影響なのです。ですから暴力の相談を受けたときには、「話してくださってありがとうございます。とても大変だったでしょう」と伝えるのも、尊重の一つだと思います。

離れられないと思わせる効力

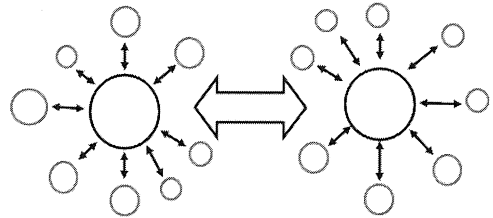
わたしがDVにあった四年半、相手と一緒に暮らしてもいませんでしたし、結婚もしていませんでした。子どももいませんでした。そんな状態で、なぜ四年半も離れられなかったのかと考えたときに、さまざまな理由が自分の中で見えてきます。暴力は被害に遭う☆さんが結婚している、していないに関係ありません。暴力は☆さんに大きな影響を与えるだけでなく、離れられないと思わせてしまう効力があります。

わたし自身が逃げ出した後、なぜ逃げられなかったのか分かりませんでした。それで二年近くカウンセリングに通い、大学院でも勉強し、その間、自分に焦点を当てる作業をしなければならませんでした。今年に入って、またカウンセリングに通い始めています。なぜかと言うと今年に入って思い出せたこと、初めて見えてきたことがたくさんあるからです。こころの傷つきは恐ろしいとつくづく感じています。確かに時間は20年もたっています。でも、まだこれだけ大きな影響を及ぼしていると感じますし、いまだに自分がつらい思いをすることがあります。だからこそわたしがわたしのために何ができるのか、あるいはわたしがわたしをどうすれば大切にできるかを考える必要があると思います。

暴力発生までのメカニズム

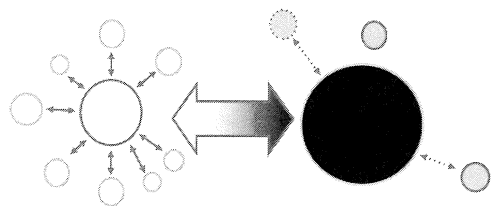
これはわたしが体験したことを整理して作った図です。

A 図



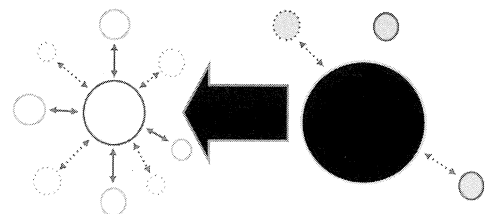
ある女性が精神的に良い状態でいたとして、真ん中の○になる部分がその人だとすれば、そこに自分らしさの色が入ります。色は何色でも結構です。周りにサポートし合う人たちが大勢います。多くいればいるほど健全になります。同じように健全な状態にいる人が健全な人と付き合ったとします。それがA図になります。真ん中の矢印が両方に向いているのは、対等な関係で、尊重し合っていることを表しています。この図と対照的なのは暴力が発生する状況です。

B 図



B図は殴られなかった最初の十日間を表しています。十日間は「偽りの優しさ」「期間限定の優しさ」のため、一見、尊重しているように見えます。でも本当の優しさでないことを黒がかった矢で表しています。

C 図



暴力が発生すると、C図になります。わた

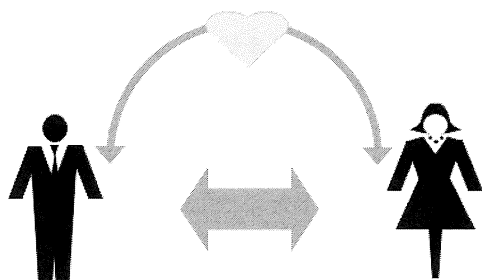
しの周りからサポートし合う人たちの影が薄くなるのは、暴力の影響があるからです。たとえば友達によく会っていた人が暴力に遭ったときに、みんなと同じように、にこやかに過ごせるかという難しくなります。みんな、楽しそうにしているのに、深く傷ついた自分がニコニコするにはエネルギーがいります。沈んだ顔をしていれば友人が心配し「どうしたの」と聞いてくるかもしれません。それに対応するのは大変ですから、出かけないでおこうと思うようになるかもしれません。引きこもりの理由にも、これと似たところがあります。

相手の孤立化を求めるBさん

Bさんは、☆さんが孤立することを望んでいます。なぜなら孤立すればBさんのコントロールをよりきつくかけることが可能になるからです。DVではほとんどの場合、☆さんは孤立しています。孤立すると人に相談する機会は減ります。風通しも悪くなります。暴力を人に打ち明けにくいと思うと、周りにサポートし合う人たちがいても話せません。トラブルに巻き込みたくないと思うのです。Bさんが☆さんの周りにいるサポートし合う人たちに対する悪口や、「お前の実家の家族は、バカだ」と言い始めたら、実家に行くことに罪悪感を覚えたり、危険を感じてしまうかもしれません。実家に帰ればBさんの機嫌が悪くなり、機嫌が悪くなると暴力が出てくるとすれば、行かなくなります。そして☆さんが孤立していくのです。

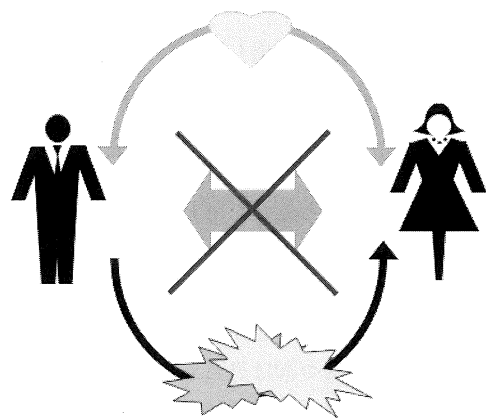
親密な関係での暴力

暴力は混乱をもたらします。一つの例をお話します。ここに二人の人がいるとして、尊重し合う関係であったら、真ん中のような矢印が成り立ちます。



二人が親密な関係になると上のような矢印ができます。この二つの組み合わせは理想的です。問題は、親密な関係のなかで暴力が発生した場合です（下の矢印）。

相手を尊重していながら、相手に暴力を振るうことはあり得ません。暴力と尊重は両立出来ないため、真ん中の尊重の矢印が消えます。親密な関係と暴力の関係という正反対の内容が残ります。たとえば殴る蹴るの後に、「ごめん。君のことを本当に心配しているから、ついカッとなってしまうんだ」と、Bさんが謝ったとします。その言葉は上のルート of 親密な関係で入ってきたように感じがちです。しかし、やっていることは下のルートの暴力の関係で入ってきます。



一人の人間から同時に正反対の二つのメッセージが入ってくると、人は混乱し何を信じてよいか分からなくなります。

交互に繰り返す虐待と優しさ

これは虐待も同じです。親の気分によって子どもをかわいがったり、虐待したりするの

を繰り返したら子どもは混乱します。自分が愛情を受けるためには、自分が傷つかなくてはならないと学ぶ可能性が出てきてしまいます。戦争でも同じことが起きています。捕虜に対して暴行を加え優しくすることを繰り返します。なぜそうするかと言えば、人間が心理的に混乱し弱まることが分かっているからです。親密な間柄、家族、パートナーシップという関係性のなかでもいじめということが起きています。

暴力で消える自分らしさ

暴力が起き続ければ、Bさんの影響力はどんどん強まります。☆さんの周りの人たちはいなくなり、☆さんの色が消え、Bさんの色に染まっていくのです。ずっと続けば、精神的な意味で一体化してしまいます。Bさんにとって☆さんは自分の所有物です。「自分のものだから何をしても構わない」という考えの表れかもしれません。精神的な意味で一体化すれば☆さんは自分の目ではなく、Bさんの目を通して「これだったら大丈夫かな。この程度なら暴力を振るわれないかな。こうしたら怒鳴られないだろうか」と判断し行動していきます。そうすると自分らしさが深いところに隠れてしまって、Bさんの色が自分の中に入ってきてしまいます。

見方によって異なる受け止め方

30年ほど前に、ある実験が行われました。犬を鉄の檻に入れ強い電流を流すと、犬は電流が一番弱いところを見つけ、そこでうずくまり動かなくなります。それが何回も繰り返されると、電流を止めてドアを開けても犬は外に出ようとしません。何も知らない第三者が犬を見ると、「何でこの犬はドアが開いているのに外に出ないわけ」と不思議に思うでしょう。忘れてならないのは一つの事実も立場が異なれば、とらえ方も違ってくるということです。はたから見たら開いているドアは出口にしか見えなくても、内側にいるもの

にとってドアは痛くて、つらい所、出口には見えないのかもしれないのです。出口に見えない人に「それは出口でしょう」と言っても通じません。通じないどころか中にいる人は、「この人も自分を理解していないし尊重していない」と受け止めるかもしれません。自分から見えるものは、すべて他の人も同じだという感覚ではなく、もしかしたら、あの人の立場からは、まったく違うものが見えるかもしれない。それを実際想像できないかもしれませんが、違うかもしれないと思うことが尊重ではないかと思います。

逃げ出した体験から

わたしの体験ですが、暴力から逃げ出した後四ヶ月間は、まったく別な街で隠れていなければならなかったのです。四年半の体験のなかには髪の毛をつかまれて引きずられ、コンクリートの壁に頭をガンガン打ちつけられ、悲鳴を上げても止めてもらえなかったこともあります。この程度の虐待は日常茶飯事でした。よく頑張って生き延びたと思う日もあります。自分のことを最小化したい気持ちが強いときは、大したことではなかったと思ってしまう日もあります。性的暴力について勉強しているうちに☆さんが妊娠すると暴力がエスカレートする可能性が高いことを知って、わたしも同じだったと気付きました。自分の性的決定権が奪われてしまい、その結果、妊娠してしまったのです。そのとき、わたしは、「彼は人を殺せる人だと感じたから、子どもを産んではいけない」と思い中絶しました。なぜ人を殺す力があると思ったかという、妊娠したと思ったとたんに呼び出され、わたしが全然知らない土地に連れていかれ半殺しにされ、「誰の子だ」と追及され、そのまま置いていかれたのです。後になって彼は動物を何匹も殺していたことが分かり、やはりいのちを奪うことに対し何も感じないのだと確信できました。だからわたしのなかでの選択は自分が生き延びる、自分の将来の子ど

もの身を守るという意志が働いたのだと思います。

何を信じてよいのか混乱

経済的暴力については、一緒に暮らしていなくても発生する場合があります。彼はわたしの名前でローンをどんどん組んだりして、借金を背負ったのはわたしです。また精神的暴力では、彼と買い物に行った先で彼が急に機嫌が悪くなり、わたしを置いていこうとするから「ちょっと、待って」と言った瞬間、彼は警備員を呼び「すいません。この女性、頭がおかしい。ストーカーと思うので連れ去って下さい」と言い、わたしは警備員に連れ去られたことがあります。こういうことが起きると自分のなかで何を信じてよいのが分からなくなり、すごく混乱しました。それまで信じてきたものが正しいことかどうか分からなくなってしまいます。

生死が分からぬ不思議な感覚

逃げ出して知らない街で隠れ住んでいる間、最初の数週間は、自分が起きているときと寝ているときの差は分かりましたが、起きている間に、自分が生きているのか死んでいるのかは分からなくなってしまいました。すごく不思議な感覚です。今のわたしのなかにはない感覚です。でもそのときはすごく必死で、生きているかが分からなくなってしまうので起きている間に食べ続けました。食べ続けて胃が下がる感覚があると、わたしはまだ生きていると思える数週間がありました。何週間かで十何キロも体重が増えたので、ものすごく食べたのだと思います。わたしの場合は過食症でした。何もノドを通らなくなる人、睡眠障害で寝られなくなる人、寝たら起きられなくなる人、身体が痛くなったり熱が出て医者に行っても原因が分からない人といった具合に、人によってさまざまな症状が出てきます。そんなときは、もしかしたら原因が身体にあるのではなく、こころにあるのかもしれ

ないと気づいてあげて下さい。こころの状態は、直接外部に表れないからです。

こころの傷つきからの回復

自分を変える作業は一生かかる

DVの場合、何回も何回も逃げ出そうとしないとダメな場合があります。☆さんにとって逃げ出すことが必ずしも正解ではありません。しかし結果的にBさんから離れる☆さんが多いのは、Bさんが変わらないからです。人間が変わるためには、自分が変わろうとする意志を持たねばなりません。何事であろうとそうです。「自分がやっていることが間違っている。人を傷つけてはいけない。だから変えなくては」。どうやって変えられるかを学び、それを維持していくためには数えきれないほどたくさんのステップを踏まないといけません。一生かけて取り組む覚悟がなければ、自分を変えることにつながらないのです。

☆さんの場合も同じです。「自分が変わらなくては。生き延びなくては」と思うから、必死になって頑張る。それが一生の課題になるかもしれません。逃げ出した後、数年でクリアできたらどれだけよいだろうと思うのですが、わたしの場合はそううまくはいきませんでした。だから一生かかると思っていたほうが、早目に切り上げられる日がきたときによかったなと思えるのではないかと思います。

カトリックであることと暴力

わたしはカトリックで育っています。ですから今日お話ししていることはわたしにとって意味があり、また複雑なことでもあるのです。わたしは生まれてすぐ洗礼を受けていますから、最初の26年間は、ほとんど毎週ミサに出ていました。すごく教会が好きでした。そのなかで、どうしても自分が教えに従えない出来事が起きてきたときの苦しさを経験しました。ですから教会が、すべての人たちに

とって居心地のよい場所と思えたらよいの
にという思いが強くなります。正直に言うと、
わたしの中では神様に怒っている部分があり
ます。なぜかと言うと最初の数十年間すごく
良い生き方をしようと頑張ってきたのに、自
分の思い通りにならない出来事がたくさん起
きてしまったとき、結果として自分を守ろう
とした生き方ができなくなり、それにより感
じることがいろいろと出てきたからだと思い
ます。たとえば、「どうしてわたしを守って
もらえなかったのだろう。これだけお祈りし
たのに」と思う自分がいます。

わたしに一番効いた脅し

「カトリックであるということと暴力」に
ついて、今日お話す予定ではありませんで
した。でも昨日の懇親パーティでお話させ
ていただいて、いろいろ考える機会をいただき
ました。わたしが四年半逃げ出せなかった理
由は、わたしにとってカトリックという宗教
がどれだけ大切だったかを相手は知っていた
ので、その点を脅しに使われたからです。も
し別れようとすればカトリックの教えに背い
たことを「バラしてやる」と脅されました。
これはわたしに一番効いた脅しです。だから
「頑張って隠し続けないと大変なことになる」
と思ってしまいました。これは後々考えて、
すごくつらいことだったと思うのです。神様
を信じる気持ちは良いことのはずですが、場
合によっては大きなつらさやプレッシャーに
つながってしまうことを忘れないでほしいと
思います。

こころの傷つきに罪意識が重なって

被害体験だけでも、本当にこころはたくさ
ん傷ついたと思います。でもこころの傷つき
のうえに、さらに罪の意識が重なると、とて
もしんどいのです。暴力は自分が希望したわ
けではありません。でも結果的に暴力で傷
ついた人が傷ついたことで、さらに罪意識や
罪悪感を抱いてしまう。そのため重いものが、

さらにどんどん重くなってしまうのです。こ
ういう現実をどうしたら変えていけるかを教
会の課題にしてほしいと望んでいます。わた
しのような人間が一人でも減ることにつなが
ればという願いがあります。

わたしにとっての今後の課題

わたしの育ち方を振り返ると、暴力を体験
したことで、わたしは「失敗してしまった」
とか「教えを守らなかった」とか「罪深い人
間になってしまった」「地獄に行かなくては
いけない」さらには「価値のない人間だ」と
思ってしまったのです。教会の教えは、本当
はそうではないと思います。でも不思議と、
このような言葉が自分のなかに残るのはなぜ
なのか。それを今後も考え続けていきたいと
思います。そうしないと「これから先、頑
張って生きてもどうせ地獄に落ちてしまうの
だ」と、後ろ向きの生き方しかできなくなっ
てしまいます。そうしたら前向きに生きよう
と思う気持ちにつながらなくなってしまうか
もしれないからです。そうではなく、どうし
たら信じるということや自分のカトリックと
してのアイデンティティーなどを受け入れて
いけるのがわたしの課題だと思います。

教会にいとつらくなる

教会のなかにいるとわたしが大変つらくな
ることが分かってきて、ミサに通わなくなっ
て15年ほどたちます。26歳ごろからは年に一
、二回しか行っていません。それでも年に一
、二回行くのは、やはり教会が好きなのだと思
います。けれども、それ以上行くと「もしか
したら、そこにいるのがふさわしい人間では
ないのかもしれない」と思ってしまうのです。
これは複雑な気持ちです。でも、どんなこと
があっても教会にいられるように、そして安
全で楽な気持ちで、苦しまなくてすむような
居場所に教会がなったらどんなにすばらしい
かなと思います。そのためにどうしたらよい
かと言うと、風通しをよくすることです。風

通しの悪さは家族だけの問題ではないのです。教会で、このようなことが話せるようになれば、教会の風通しはよくなると思います。そういう意味で、今回のセミナーの企画は、とても大きな意味があると思います。

秘密にしなくてもよい環境を

話し合うなかで秘密にしないでもよい環境づくりに努めたいと思います。秘密は重いものです。世の中には、良い秘密もあります。良い秘密は期間限定です。ずっと抱えていなくてもすむ類（たぐい）のものです。たとえば「来週は〇〇ちゃんのお誕生日だから、みんなでびっくりさせようね」というのは来週までのことで、負担にならない秘密です。でも残念ながら、秘密は負担になる重いものが多いのです。だから秘密にしなくてもよい環境は、すべての人にとって楽で、安心できる環境だと思います。

こころの回復について

こころの回復について二つだけお話しします。わたしが自分のこころの傷つきを整理しようとしていたとき、自分を一軒家にたとえたことがあります。一軒家を四つの部分に分けます。一つ目は土台の部分で「自分らしさ」です。これは誰も奪うことができません。二番目は自分が思い出したくない過去の入った部屋です。思い出すと、きつい思いをする部屋です。この部屋に入っていくのはつらいです。入れば前に経験したことがよみがえるかもしれないからです。でも少しでも受け入れる努力をすれば、自分のすべてを受け入れることにつながると思います。自分を大切にするためには、自分のすべてを受け入れることも大切なのです。消去したかったり、外したかったり、ということがいっぱいある過去だったとしても、過去は変えられません。しかし過去を今の自分がどうとらえるかは変えられます。そのためには過去の部屋を整理することが必要ですし、カウンセリングやサポ

ートグループなどで相談することが有効になってきます。

日常の小さなことからスタート

三番目と四番目の部屋は似ています。両方とも傷つきで壊され、なくなってしまった部分です。大きな差は三番目の部屋はある程度建て直しができます。しかし四番目は、いくら頑張っても建て直しが効かず弱いままの状態です。だから大雨が降ると雨漏りしてしまいます。雨漏りの場合、バケツを置いて被害が大きくなるようにするのと同じで、人によって大雨やバケツが何を意味するのかは違います。その人にしか分からないことです。

わたしは、DVの被害に遭う前は、新幹線や飛行機に乗ったとき、窓際に座るのが好きでした。今、一人で窓際に座るのはすごくしんどいです。なぜなら知らない人が隣の二つの席に座ってしまったら、逃げられないという感覚がよみがえってしまうからです。これはわたしにしか分からない感覚です。でも、それがわたしの雨漏りだと気づくことができれば、雨漏りのバケツを用意することが可能です。わたしにとってのバケツは、必ず通路側の指定席を予約することです。それは小さいことかもしれませんが、でも、わたしがわたしを大切にするために、日常生活の本当に小さいと思われるようなことからスタートしなければならないのです。

指の力を一本ずつ抜く作業

人それぞれ、人生はこうなるはずだ、たとえば大きくなったら、こういう仕事に就く、こういう人間になるという夢を持っています。誰も虐待の被害者になるなんて思っていません。でも人生では予期しないことが起きます。わたしは五人きょうだいで、親はすごく仲がよい大家族のなかで楽しく育ってきました。だからわたしも大きくなったら大家族の一員になろうと思っていました。これが、行くはずだった第一の道沿いにあった夢です。予想

もしていないDVの被害に遭ったことで、わたしの人生の道はものすごく大きく方向転換せざるを得ませんでした。

行くはずだった道が消え、第二の道になる人もいれば、さらに第三、いや第四の道になる人もいます。わたしの大家族で行くはずだった道はなくなったのです。今のわたしは三番目の道だとして、子どもがいるかというといません。わたしの人生の道が大きく変わった分岐点まで戻って、何が起きたかを振り返ってみたとき、そこで起きた身体的暴力と性的暴力は、わたしが一番よく知っています。わたしの身体がどう変わったかも、わたしがよく知っています。だから今は三番目の道を歩いているのだと分かります。

一番目の道にこだわっていたら、自分を大切にすることが難しくなります。一番の道を見ながら、三番の道を歩くことはできないからです。つまずきやすくなってしまう。だから一番の道がどれほど失いたくなかった道であっても、離れていくものを留めようとする指の力を一本ずつ抜いていく作業、つまり失いたくなかったものを少しずつ手放していく作業をしてみてください。そうした力をつけることによって、歩いている道に焦点を当てられるようになり、わたしがわたしをどうやってケアすれば生きやすくなるかが見えてくると思います。これがグリーンワークというものです。100%手離す必要はないので

す。あれが欲しかったと思う日もあるでしょう。それはそれでOKです。ポイントは、今歩いているところに焦点を置くということです。

心的外傷から成長したわたし

この第三の道は、傷つき系に見えます。傷つきから発生しているから、そう見えると思います。自分が弱くなった部分は目立ちやすいです。忘れてはいけないのは、ここで自分がより良くなった、あの体験を乗り越えたからこそ今の自分がいると思えるなら、それはPTSD（注1）系、あるいは傷つき系のことではなくて、PTG（注2）です。Gというのは、成長 growth を表しています。学ぶこともできますし、成長する部分を育てていくこともできます。だからといって人生を巻き戻せるなら、あそこに入っていくかと言えば、そういうことではないです。けれども過去を変えられないのであれば、それをどうとらえるかを変えることはできます。そこで学んだこと、得たものもあると感じ取ることができます。

今日はどうもありがとうございました。

- 1) PTSD = Post Traumatic Stress Disorder（心的外傷後ストレス障害）
PTG = Post Traumatic Growth（心的外傷後成長）

中島 幸子（なかじま・さちこ NPO 法人レジリエンス代表）

DVコンサルタント、ソーシャルワーカー。大学生時代にDV被害にあったのをきっかけに米国のルイス・アンド・クラーク大学院で法学博士号を、またポートランド州立大学院でソーシャルワーカーの修士号を取得。1997年からDV被害の体験やDVの構造的問題、支援の在り方について講演を始め、現在も全国各地のNPO団体や高校、専門学校、大学、大学院などで講演活動が続けている。2003年に「レジリエンス」を結成。DVや虐待、モラハラ、いじめ、パワハラ、その他さまざまな原因による心の傷つきやトラウマに焦点を当て、情報を広げたり、トラウマを抱えた女性のこころの健康を取り戻し、維持していくためのサポート活動を展開している。東京の表参道、目黒、横浜の三ヶ所毎年、12回の連続「こころのcare講座」を開催している。レジリエンスのウェブサイトは <http://resilience.exblog.jp/>

子どもの愛し方が分からない母親たち

カズ工（社会福祉士）

こんにちは。何からお話しようかと考えています。何ヶ月も前に講演依頼のお話があったときは、すごくうれしいなと思いました。信仰をベースに福祉分野で働いておられる皆さんの前でお話できると張り切っていたのです。ところが数ヶ月の間に大切な友人が自殺したり、わたしの子ども時代に受けた性的虐待のフラッシュバックでうつになり、そういう状態がいまだに続いていてあまり元気ではありません。「子どもの愛し方が分からない母親たち」というテーマです。子どもを虐待してしまう母親の立場でお話をしようと思います。

クリスチ안의家庭に生まれて

落ち込みながら相談員の仕事を

子どもを虐待してしまう行為をやめたつもりでいますが、子どもと一緒に暮らしているので、毎日、毎日の子育てが自分にとってしんどいなあという状態です。これはアルコール依存症の人がアルコールを飲みながら回復しているようなもので、まさに虐待をしているところの気持ちに戻ることが常にあるし、子どもの振る舞いを見ながら、これはわたしが子どもを虐待してしまった影響だろうかと考えて落ち込んだりもします。今も自分が一番つらかったときから離れていない感じです。

わたしの仕事は区の福祉事務所で非常勤の相談員です。暴力被害に遭った女性や住む家のない女性、DV、性暴力、虐待の問題、そして子ども時代に虐待を受けた人が大人になって、人との人間関係がうまくつくれず仕事も住まいも失っている、そんな状況に毎日接しています。行政機関として提供できるサービスはごくごく限られているので、いろいろな関係機関に電話をしたりするのが主な仕事です。相談に来られる方のニーズにお応えできないと、またそこで自分が昔、被害に遭っていたときに、だれも助けてくれなかったという思いがフラッシュバックして日々落ち込みながら生きています。

トラウマ脱出のために火渡りも

だいたい秋口に調子が悪くなります。日照時間が少なくなったり気温が低くなったりするのは、生き物としてつらいのです。また子どものころの性暴力の時期がちょうど秋ごろだったので、思い出してしまうのかもしれないのです。10歳で被害に遭ったときからずっとそのことにこだわり続けて30年、もうすぐ40歳になるのです。その間、カウンセリング、心理療法、お祈りに行ったりとか、キリスト教の家に生まれ育ったのですが、修験道の山伏さんたちに混じって一緒にお祈りに行ったり、滝を浴びたり、火渡りをしたり、あらゆることをしてトラウマから離れようとしてしました。良い母親になろうと努力もしました。でも努力によって、そんなに解決できるものでもなくて、いまだにウツウツとしています。

教会をわが家のように

わたしは教会を離れて15年になります。母のお腹のなかにいたときから教会に毎週、毎週通っていました。両親はプロテスタントで、カトリックと違うところもありますが、もしかしたら同じ課題があるかもしれませんので、その辺を聞いていただけたらと思います。

両親がクリスチャンで、教会をわが家のようにして育ちました。母が日曜日には教会に行ってしまうので、わたしと兄弟も一緒に行って、教会の幼児クラス、小学校のクラス、中学校のクラスに行っていました。高校生

のときから親とは別の教会に行ったのですが、高校生くらいになると、自分の意志で日曜日以外も牧師館に入り浸って、ご飯を食べ牧師先生の秘書のようなことをして、とても居心地はよかったです。

母が語るのは聖書の言葉

わが家はクリスチャン・ホームで、毎日が祈りで始まり祈りで終わる。朝、ご飯を食べるときに母が祈り、昼間、小学校に行き、夕飯になると家族で食卓を囲んで聖書を開いて、だれかが聖書、365日読めるテキストを読み、その後、六人家族のなかの誰かがお祈りをして食前の賛美歌を歌って食事をいただくという、まるで映画のような家族でした。

母の語る言葉は、ほとんど「イエス様はこう言っている。聖書にはこう書いてある」という話でした。子どもたちをしつけるときもそういう話で、わたしは母自身の言葉をあまり聞いたことがないような気がしています。トイレにも聖句が張ってありました。365日の日めくりです。こういうように聖書に書いてあるというのをいくつも暗記していました。聖書が共同訳になってからほとんど開いてないので分からないのですが、たとえば「自分のいのちを捨てること。それより尊い愛はない」みたいな聖書の言葉に基づいた教育を受けました。そして「愛は、すべてを忍び、すべてを耐え」と書いてあるように、そういう雰囲気家族の中にありました。母と結婚してクリスチャンになった自衛官の父は、自衛官でありながらクリスチャンであるのは、かなり厳しいことでした。マイノリティのための会もありましたが、父もそれに所属しているだけでほとんど行かず、教会でも肩身の狭い思いをしていたのではないのでしょうか。

自衛官の父はアルコール依存症

わたしは教会をわが家のように思って、両親の友人たちである年配の信者の方たちを親のように思って教会に入り浸っていたのです。

もしかしたら家の居心地が悪かったのかもしれませんが。わたしにとって父も母もとても優しいときと、とても冷たいときと、暴力的に感じられるときと、愛情深く感じられるときと、いろんな面がありました。アルコール依存症の人は、すごくまじめで純粋で、でも昼間からアルコールを飲んで、飲んでしまうと暴力を振るう人が多いのです。父もアルコール依存症で暴力を振るう人でした。飲むことによって時々起こる暴力はいつ起こるか分かりませんので、年齢が上がるにつれいつも身構えるようになりました。家で身構えているので、教会で賛美歌を歌い、おじさんやおばさんにかわいがられるのが心地よかったのかもしれません。

父の飲酒は秘密

でもわが家で起こっている父の飲酒による暴力は、絶対に言えないことでした。クリスチャン・ホームとして、優等生の枠から外れてしまうからです。わたしはすごく優等生にならなくてはと思っていたし、家族のメンツを守らないといけないと思っていました。優等生であることが天に宝を積むことだと思っていました。

アルコール依存症者のいる家庭ということは、近所にも教会にも世間にも誰にも言えない秘密でした。秘密を抱えているということは、本当の家族の状況や自分の気持ちを知っている人が誰もいないという、すごく孤立した感じなのです。教会のおじさんおばさんは、とてもかわいがってくれるけれど、本当のことを知ったら嫌われるのではないかと、教会に来るなどと言われるのではないかと、いろいろなことを考えていました。

空に向かって話す子に

同年代の友達には、逆に教会に行っていることで特別視されていました。クラスメイトが日曜日にテレビを見たり、遊んだりしている時間に毎週教会に行く。宗教、特にキリス

ト教は、日本に土着していないため異質な感じがするのかもしれないし、自衛隊の官舎に住んでいたからますます孤立していたのかもしれない。とにかく友達からも孤立していました。そして友達や教会にも自分の居場所がなく、話し相手はいない。そんな感じを持ちながら、わたしはいつも空に向かって話す子どもになっていました。空に向かって話すとき、それをイエス様と思って話をするのですけれども、その習慣は今でも変わりません。

十歳のときに性的暴力

自分は無力で、男のおもちゃ

そのような居場所があるような、ないような生活のなかで、わたしは十歳のときに性的な暴力の被害に遭いました。これが決定的にわたしを打ちのめしました。家の中に居場所が無いだけでなく家の外も危険だと思いました。十歳のときに、女というのは男のおもちゃになるものだと思い知ってしまいました。家の中にアルコール依存症という病気のために暴力を振るう人がいましたから、それだけでなく男の人は、わたしにとっては脅威、権威、パワーであり、自分は無力で逆らえないと思っていたのです。そんなわたしが十歳のときに男に従うもの、自分は無力、自分は男のおもちゃということを確信したのです。そういう構造の中で生きていくしかないと思いました。わたしは、ますます空に向かって話すようになりました。同時に家でも学校でも話ができなくなっていきました。そのころから薬を乱用するようになり、少なくとも一日一回は、「生きていてもしょうがない。何で生きているのかな。もう死んじゃおうかな」と妄想するようになりました。解決できない問題にぶち当たったときに、「これはもう自分では解決できない」と思って、生きていることから逃げようとする癖がついてしまいました。

言ったら母が壊れてしまう

今は「誰でもよいから話そうよ。必ず信じてくれる人がいるから、聞いてくれる人がいるから」というパンフレットや虐待防止ホットラインやチャイルドラインのような電話番号を配ったりできる心境ですが、被害に遭った当時のわたしは自分の身に起こったことがまったく分からなくて、これを言ったら母が壊れてしまうと思いました。母は愛情深い人で、それが本当の愛情かどうかは分かりませんが、すべてを耐え忍んで結婚生活を続けていました。とにかく母の語る言葉は聖書の中に書いてある、とてもきれいな力強い正しいことだったので、わたしの身に起こったことを聞いたら、聖母マリアのような母がおかしくなってしまうに違いないと子どもながらに思いました。それにわが家の中では性的な話はタブーでした。それも教会の影響なのか、母個人のものなのかは分かりませんが、教会というのが大きいと思います。

ポルノ雑誌で傷ついて

社会には性の情報が氾濫しています。でも教会では語られない。それでわたしは何も情報がないので、十歳の自分なりにわが家の本棚にあった虐待問題の本とか、『家庭の医学』に書いてある生殖に関するページだとか、夫婦生活についての解説書だとか、もう少ししてから、兄たちがポルノ雑誌を家に持ち込むようになったので、それを探してこっそり見ながら、わたしの身に起こったことは何なのだろうと理解しようと思いました。性がタブーでしたので、わたしが得た知識がほとんどポルノ雑誌や、その手の本からの知識なので、雑誌を見ながら傷つき、もう一度「自分はおもちゃだ」と確認してしまうことになりました。わたしは男性が怖いとか、自分が無力だとか、おもちゃだと思いつつも、どうにかしたいと思っていたのだと思います。

短大生活に耐え切れず家出

19歳のころに家出をしました。そのころミッションスクールの短大に行っていたのです。短大で聖歌隊に入りキリスト教研究会に入り、クリスチャンでない学生たちから、「ああ、あの人はクリスチャンだ」と見られるのが耐えられなくなりました。クリスチャンだから正しい行いをしなくてはいけないとか、他の学生の見本にならなくてはいけないとか、歩く広告塔のように、学校に行くと、つま先からってっぺんまで緊張して、そのうち脂汗（あぶらあせ）まで出るようになりました。自意識過剰というのでしょうか。そこは教会の牧師の推薦で入ったので、牧師の顔をつぶしてはいけないと思いました。そんな学校生活に耐えられなくなった一番のきっかけは実習でした。幼稚園の教員免許を取るコースで、教会附属の幼稚園で実習していました。子どもたちが寄ってくる、遊ぼうとしてくることになぜか耐えられなかったのです。それである日、突然、家を出て「学校を辞めさせて」と行方不明になって農家に住み込んだのです。

失業、大学で福祉を専攻

農家に住み込んで何がしかのお金は得たけれども、雇われた期間が終わってしまうと何もできない。やはり親の保護の下で身分証明書がないと就職もできない。今、家のない方たちの話を聞いていると、ホームレスでも一生懸命、就職先を探すのですが、身分証明書がないし、就職が決まったという連絡をもらうにも電話がない。どんどん悪い状況に追い込まれていってしまうのです。わたしも、そのような感じでした。19歳のわたしは結局、家に戻るしかないと思い家に帰りました。その後ここだったら親が応援してくれるに違いないと思って今度はキリスト教系の大学に入って福祉を勉強しました。家から通えなかったのですが、家にいるのがとても息詰まるので無理やり家を出て、下宿先からその大学に通わせてもらいました。

妊娠、出産、そして虐待へ

同じにおいに仲間が気付く

大学に行って学校の仲間から「あなたは子どものときに性的な被害を受けたでしょう」と、わたしの抱えている問題を初めて見つけてもらいました。そして仲間から「この本を読みなさい」と言われて、性被害に関してのまともな情報を得たのです。そして性被害を受けた人がどのように回復していくのかを知るきっかけをもらいました。本当に不思議ですが同じにおいのする仲間は分るようです。その大学の社会福祉学科には女子学生が30人いましたが、そのうち五人が性暴力の被害者だったのです。

男を支配する気分に浸る

わたしたちは互いにカミング・アウトし、本を貸し合いながらサバイバルしました。わたしは、こころの傷をわたしなりに何とかしたかったのです。「男の人が怖い」「自分は無力だ」という思いを何とかしたかった。わたしなりに採った方法は、仲間にも多いのですが、不特定多数の男の人と性的関係を結んでいくことでした。そして男の人を支配しているような気分に浸る。自分がこころの傷を克服している気分になる。次々に男の人と出会ううちに妊娠しました。

浴びるように酒飲み、妊娠

当時わたしはひたすら酔っ払っていて、十代のころはお酒がなかったので、薬とか父のたばこで自分のこころの痛みや空しさをごまかしていて、身体もだいたい悪かったです。小学生ながらに神経性の胃炎持ちで、いつも頭痛がして高校卒業するころにお酒を飲み始めました。父の晩酌にも付き合いました。浴びるように飲んで訳が分からなくなって、いつの間にか男性と親しくなっているということの繰り返しでした。当時付き合っていたパー

トナーは、山谷でボランティアをしている人たちの合宿で、夜の10時から飲み始めて朝7時までずっと一緒に飲み続けた男性で、「この人はわたしに付いてきてくれる」と思いました。デートといえば居酒屋で、いつの間にか一緒に住むようになって妊娠しました。彼も「産むな」とは言わなかったのも、産んで一緒に育てるという方向でやってきたのですが、それでも、それが途中でうまくいかなかったりしました。

医者を信頼できず自宅で出産

わたしは「誰も信じることができない」という信念のなかで生きてきたので、お産のときも人を頼ることができなかったのです。お産は初めての体験で、とても自分が弱い立場に感じられました。医者は専門的な知識があって、パワーがあって、「わたしをだまそうと思えばだませる」と勝手に思っていました。パワーのある人に委ねることができませんでした。信頼することができなかったのも、お産を産院でするのを拒否して、わたしがたった一人だけ信頼している、そのつもりになっていた男性とわたしが住んでいた家で産むことにしました。

産むときは助産師さんが手伝ってくれましたが、産んだ日からわたしと生まれたばかりの赤ん坊と男性の三人きりの生活でした。

出産三日目に赤ちゃんを殴る

パートナーは具合が悪く、白血病に間違えられるような症状で、常に微熱があつて、みるみるうちにやせていきました。そんな状況の中で子どもを産みました。産まれたときから三人きりですべてができるわけではないのに、オープンになるよりも安全だと思っていました。三日目にわたしは赤ちゃんを殴りました。今は12歳になった長女です。産んだばかりから精神的にも肉体的にも疲れていて不安定です。わたしは子どもの泣き声を聞く度にストレスを感じていました。

誰も助けられなかった感覚が

子どもがここに傷を負って将来に影響が出てしまうのではないかとこの強迫観念に捕われていました。オムツを替えておっぱいをあげて、暑いでもなく、寒いでもなく、ただ泣くのは、わたしが親としていたらないからだと思っていて、このままにしていたら、ここに傷を負って将来おかしくなってしまうかもしれないから、とにかく泣かしてはいけないと思って焦りました。それでも泣きやまないと、それは「ダメな親だ、ダメな親だ」と言われているように聞こえるし、わたしが子どものときに助けを求めても、だれも応えてくれなかったという感情もよみがえりました。

赤ちゃんの性器が性暴力の再体験に

新生児だから一日20回くらいオムツを替えると、目の前に女の子の性器が見え、わたしには性暴力体験の再体験に感じました。自分も体験しているような気がするし、娘も将来は被害に遭うという妄想も膨らみました。本当に緊張し続ける子育てでした。生後三日目に娘が泣いたときは、夜中にパートナーと二人で娘を交代で抱っこして、まだ足腰がぐらぐらするのに立たせて「よし、よし、よし」とやっていました。夜の9時から朝の3時までの六時間、元気な娘は泣き続けました。放っておけば、そのうち泣きやんだと今なら思うのです。でも当時のわたしは、そのうち泣きやむことを知らなかったものですから脅迫的に「よし、よし、よし」とやっていました。脅迫的に抱っこされたら娘も具合悪いと思うのですが、六時間抱き続けて疲れ果てたわたしは娘の泣き声が拷問のように聞こえて、気がついたらパチンとたたいていました。

子育ての責任が重くのしかかり

そんな感じで人に助けを求めることができないまま、三人で孤立し、陸の孤島、世の中は敵という信念の下に生活をしていたのです。

疲れ果てた末に、まだ数ヶ月の娘をたたくのを繰り返すようになりました。パートナーが仕事に行ってしまうと、わたしは新生児と向き合い常に泣き声を聞きながら、わたしが非難されている気がして二人きりの時間がとてもつらく感じました。歩きながら「あら、かわいいわね」とか、買い物をしたときに「いらっしやいませ。ありがとうございました」と、おばちゃんに言われるのが、それだけですごくうれしかったのです。

それだけがただひとつ人と会話しているという感じでした。後は密室で訳の分からない宇宙人のような子と、いつもおびえながら暮らしていて、二人でいる時間が本当にきつかったですね。わたしの産んだ子どもなのですが、わたしにとっては子どもを育てる責任の大きさとか、わたしがやる事が子どもを傷つけて、何らかの影響を与えてしまうのではないかという間違っただけの思い込みがあったのです。

自助グループで救われた

閉塞感と孤独感と疲労感と

母親というのは、いつも子どもと一緒にいなくてはいけなくて、面倒をみなくてはいけなくて、愛情をいっぱい注がなくてはいけなくて、泣き言を言っていてはいけなくて、頑張らなくてはいけなくて思い続けていました。時々、頑張りがなくなってパチンとやる事があって、そんな日々のなかで、わたしはまた仕事をできるようになり、仕事の疲れと育児の疲れで夜もほとんど眠れませんでした。

何ヶ月後かに三時間おきになりましたけど、最初の三ヶ月くらいは一時間おきに泣く子どもでした。一時間おきに泣くというのは、おっぱいを飲ませて横になれると思ったら、また次が来る感じです。トイレに行く時間も、ご飯を食べる暇もなく、それでもやらなくてはいけなくて思っていました。閉塞感

と孤独感と疲労感と、頑張らなくてはいけないという思いで、今思えば随分狂っていたなと思います。当時は、それが分かりませんでした。そんななかでパートナーがある日突然、仕事を辞めてきたのは娘が1歳半のときでした。パートナーも疲れていたのです。夜勤の二人体制のなかで50人、70人のお年寄り相手に食事の世話をしなくてはいけないという過酷な職場でした。

不安と怒りが赤ちゃんに

彼が辞める理由は分かるのでわたしは何も言えない。何か言って殴られるのが怖いから言えない。でもわたしの中にはものすごく不安と怒りが渦巻いていました。そのわたしの怒りが家庭で一番小さな娘に向かいました。それまでは数ヶ月に一回パーンと殴れば「ああ、どうしよう。ひどいことをしてしまった」と、われに返るのに暴力が止まらなくなりました。われに返るのに時間がかかるのです。「こんなひどい母親は生きていてはいけない」とまで考えるのですが、また次の日に繰り返すのです。何かストレスがかかったときに、家の中で一番小さい娘に被害がおよんで、「あっ、いけない」と思いながらまた繰り返す。それが続くようになったので精神科のクリニックを尋ねて、そこで虐待ママの自助グループの仲間たちに出会って、そこから回復が始まりました。

精神科から自助グループに

そのクリニックにあった自助グループですが今はNPOになり、わたしが代表ということで11年活動が続けています。子どもを愛したいとか親子だから仲良くやりたい、育児を楽しみたいし、「愛している」と表現したいけどできない人たちが集まって「言っぱなし、聞きっぱなし」と言って、誰かが淡々と話すのを周りは黙って聞き、批判もしないし質問もしないし、アドバイスもしない。なぜアドバイスをしないかという、アドバイス

をするというのは相手が望まなければ精神的な暴力、相手にとっては痛く感じられるときがあるからです。かえってストレスがたまり、家に帰って子どもたちをボコボコにすることがあるので、アドバイスをしない。本人が望んでいないアドバイスは暴力であるとわたしたちは言っています。

秘密にしてきたことが話せた

話されたことは、そこだけの話にして決しうわさ話にはしない。自助グループはアルコール依存症、薬物依存症の人たちのグループのやり方に倣っているのだと思います。そういうグループに行って、子どものころからずっと秘密にしてきた家族の秘密、性被害の秘密を話すようになりました。そのグループにつながったことで暴力がエスカレートしなくなりました。グループに参加した日は、家に帰ると子どもがかわいく思える。そして当時はグループの開催は一週間に一回で、一週間後にグループに行くまでに緊張感が高まるのですが、グループに行くとりラックスできて、子どもだけでなく自分にも優しくできる。グループに行くのは自分に優しくする一つの方法だと思いました。

「わたしも同じだよ」と仲間がハグ

仲間に出会ってよかったのは、わたしが一人ではないと思えることでした。目の前でわたしと同じような話をしている人に出会えば、いつまでも「わたしは一人」だとか「孤独」だと言っていられなくなります。わたしは、そこで人とつながる、人を信じるということを学びました。最初にグループに行ったとき、司会をしていた仲間が「同じだよ」と言って、わたしをハグしてくれたのです。ハグというのは、すごい癒しの力があるのだなと思います。わたしは人肌（ひとはだ）というと、殴られるか暴力的な扱いを受けるか、自分や相手を物のように扱うセックスしか知らないの、仲間としてハグし合うハートの温かさは

初めての体験で、今、わたしは「ハグ魔」になっています。

どうして抱きしめてくれないの

大学を卒業するときチャペルでメッセージを述べるのですが、わたしが語ったことは「教会やクリスチャンは神様の愛は語るけれども、どうして抱きしめてくれないのですか」ということでした。母はスキンシップが苦手だったので母に抱っこされた記憶がなく、親類の知的なハンディキャップを持つおばさんに抱っこされて育ったようです。子どもは触らないと大きくならないと娘を見て思います。自助グループの仲間に出会ってハグを覚えて、今も薬物依存症や虐待ママの仲間たちとハグをしているのです。「あなたは大事よ」と伝えるのに、なんてよい方法なのだろうと思います。でも性暴力被害のサバイバーのミーティングでは、それができません。ある程度回復してきた人にとってはよいですが、肌の温度や感触でフラッシュバックしてしまう仲間も多いのです。ハグは「あなたに会えてうれしい。大好きだよ」というメッセージでも、性暴力の被害者には「侵入」・「暴力」と感じられてしまいます。

言いつばなし、聞きつばなし

ただひたすら話を聞いて、話す人はひたすら話す。一人15分だったり5分だったり、人数によります。決して批判されないし中傷されないし、噂話もされないし、アドバイスもされないことを繰り返し、人への信頼感とか自分は生きていてよいという感情を育ててきました。仲間たちが医者や地域の保健師や保育士、援助職の人とうまくかわっていく様子を見て、わたしもうまくかわっていきけるようになりました。

仲間の半数は児童期に性的虐待

グループの仲間たちの半数は児童期の性的虐待の被害者です。二人に一人というのはと

ても多いと思いませんか。児童期の性的虐待の記憶を持ちながら子育てをするのは、とても大変なことなのです。わたしのように女の子のオムツを外すとフラッシュバックすることもあるし。男の子の場合はもっと大変なのです。

典型的な例ですが、母子生活支援施設（昔の母子寮）の六畳一間の小さな部屋で息子と暮らしているわたしの仲間は、自分の父親から被害を受けている人が多いのです。自分が生んだかわいい子どものはずの息子は、加害者である自分の父親と同じ男のにおいを持ち、似たような骨格、似たような顔立ちです。その息子と狭い部屋で二人きりで暮らしている。中学生になれば男の子ですからトイレでマスターベーションをしたりすることもあります。そこで、また男のにおいを感じて、わたしの仲間は自分が被害に遭った父親との関係を思い出すのです。ストレスが高じて、母親にとって息子が予定外の行動を起こしたときパニックを起こして殴ったり、ご飯を作るのが嫌になってしまったりする。それは自然なことのように思います。そうならないように、自分の母親などから虐待されている子どもたちが、こころの傷を回復する手がかりを見つけられればよいと思います。

援助職として心掛けていること

SOS を出せる関係に

今、わたしはNPOのグループでの活動や、カウンセリング、保健所での母親たちのグループや福祉施設での相談事業で援助職として働いています。これはなんて難しい仕事なのだろうと思っています。わたしにとって自分の問題と切り離せない事態が時々起るので、つらいこともあります。毎日、暴力や虐待の話聞くのは、本当にこころが痛み、ストレスを抱えるのです。こころが休まる暇がなく次から次へと仕事がくるうえ、一人の人にか

かりきりになれないから、ある程度、急場がしのげると「次は何かあったら言ってね」と終わらせてしまうことがあります。でもわたしが一番問題を抱えていたときに「また何かあったら言ってね」という関係では何も言えなかったのです。何かあったときは、もう言えませんでした。虐待をし、たたいてしまったというのは一番言いたくないことです。から。「何かあったら言ってね」という関係でなく、日ごろからSOSを出せる関係をいかにつくっておくのが大切だと思います。

批判しない、否定しない関係を

特に問題を抱えながら生活している人が初めて自分のことを話すときは本当に大変です。たとえば保育園の保育士さんたちに「虐待しています」と言ったら、何て思われるだろうと考えてしまいます。ひどい親だと思われるかもしれないし、その後のかわり方が変わるだろうと思うとますます言えません。知らない人なら言える気楽さもあって、自助グループは、お互いの本名も明かさずに言いっぱなし、聞きっぱなしだから、機能していけるのだと思います。

「何かあったら言ってね」ではなく、日頃の関係のなかで変化があってもなくても言える関係があって、「こんなこと他人にはとても言えない」ということが起こっても、「あ、この人なら分かってくれるかもしれない。批判せずに聞いてくれるかもしれない」という関係をいかにつくれるかだと思います。基本は自助グループのように批判しない否定しない、相手を尊重し、大切だと思う関係で聴くことだと思います。援助職としては、ついアドバイスをすることが仕事だと思ってしまうのですが、場合によってはアドバイスしないルールを使える場面があってもよいと思います。

「やり直しはできる」と思って

「何かあったら言ってね」と援助者の方か

ら迫っていくと、侵入的だと思われて、ブロックされたり、相手に離れていかれることもあります。この点を講演で話すとよく質問されますが、失敗はあってよいと思います。決定的な失敗は、あまりありません。相手とけんかになっても、やり直しがきくと思います。わたしはアドバイスが好きで、侵入的でうるさくて、わたしの母を連想させてしまうような一生懸命さを持った保健師とけんかを繰り返していたのですが、後にそれなりの信頼を寄せることができました。「やり直しはできる」と思っにかかわった方がよいと思います。相手は虐待の加害者であったり、かつての被害者であったりで難しい人かもしれないけれど、最初から「難しい」「無理」「苦手」と思って、関係はつくっていけないです。やはり「この人とは分かり合いたい、この人には分かり合える力がある」と、その人のネガティブでない面をいかに見てかかわっていくか。その人の持っている力を駄目もとで信じてみるところから関係は始まっていくのだと思います。

問題を解決するのは本人

わたしは仕事で失敗したと思うのが心配だから、あとで「また来てね」と留守番電話を入れたりします。そうすると、また来てくれたりもします。自分が援助者として全部解決しなくてよいと思うことも大事だと思います。自分が相手とうまくいなくても別の人ならうまくいくこともあるし、機会を別にしたらうまくいくかもしれないです。問題を解決するのはやはり本人なのです。

これも講演でよく話すのですが、子どもが保育園に通っていて毎日、連絡帳を交換していたときに「暴力の問題をどうにかしなくちゃ。誰かに聞いて欲しい」と思い、「子どもをたたいてしまいました」と書いたことがあります。それを見た保育士は、「子育て中には、よくありますよね」と言い、そこで会話が終わってしまいました。相手を慰める思い

で、そう言ったのかもしれないけれど、本当はもっとわたしは話をしたかったのです。すごく苦しんでいて、子どもと心中してしまおうかと思うほど悩み苦しんでいるというのを「たたいてしまうのです」という一言に託したのです。「そういうことは、よくありますよね」は、保育士の礼儀かもしれませんが、そこで解決して終わらせてはいけません。解決するのは本人だから「大したこと」か、「気にすること」か、どうかを決めるのは本人なのです。本人の代わりに解決してはいけないと思います。

教会はやはり敷居が高い

最後にお話したいのは教会の敷居の高さです。わたしはこの講演のお話をいただいて、15年ぶりに教会に行ってみました。教会の皆さんに話すのだから今時の教会を知らなくてとは思って。たまたま家の近所の教会で、暴力や性の問題を聖書がどう扱っているかを勉強できそうな教会がありました。そして、しばらく通っていたのですが、また行けなくなりました。やはり自分のような者が行っにはいけないと思ってしまうのです。

それは何なのだろうと思いますか。教会の人たちが立派に見えるのです。そして「わたしは立派でない」と思ってしまうのです。わたしの育った家にもあった閉塞性や「こうあるべき」というのは、イエス様は言っていないのに教会にはあるように思います。極端な言い方をすれば、それが暴力の温床であると思います。わたしのところに相談に来られた患者さんは、カトリックの信者さんでした。夫から暴力を受けていて、カトリックの教会でやっているカウンセリングにずっと通っていました。しかしそこでは、「離婚しましょう」「逃げましょう」という選択肢はまったく語られなかったそうです。それで結局その人はそのカウンセリングに行くのをやめて、わたしのところに来たので「逃げましょう」とアドバイスしました。その人は、夫か

ら逃げて離婚をしました。その後は、やはり教会に行けないそうです。離婚をしたという選択肢は教会のなかでは語ってはいけないと思っていたそうですし、離婚してしまった現

在は、教会のなかに自分がいてよいとは思えないそうです。今の教会がどう教えているのかは、わたしは知りません。教会はそういう場所ではないと思いたいです。

カズエ（社会福祉士）

クリスチ안의家庭に生まれ、毎日曜日に通う教会をわが家のように思いながらも「誰にも言えない秘密」を抱えたまま育つ。大学で社会福祉学科を専攻したが、生まれて三日目のわが子に暴力を振るってしまう。それがきっかけで治療につながり、その流れのなかで虐待や育児困難の問題を抱える母親たちの自助グループ（LMG）の運営に携わって13年。今も回復の途上にありながら、自らの体験をまだ苦しんでいる仲間たちに役立てたいと願って活動している。LMGが所属するNPO法人のカウンセラー、「精神科・心療内科」クリニックのソーシャルワーカーを経て、現在は保健所の母親グループの講師、都内の福祉事務所で女性相談員として活躍している。

アルコール・薬物依存症になってわたしは救われた

上岡陽江（ダルク女性ハウス代表）

わたし自身、アルコール・薬物依存症と摂食障害からの回復者です。今はアルコール・薬物依存症の女性が回復し、社会復帰するための施設「ダルク女性ハウス」を、当事者の仲間と一緒に18年間運営しています。

今日のテーマである「アルコール・薬物依存症になってわたしは救われた」について、まずわたし自身が23年前にアルコールでどうにもならなくなった時の話から始めて、次にダルク女性ハウスを運営してどんな事と出合ってきたか。依存症を抱える女性たち、その周りにいたDVの人たち、あるいは依存症の家庭に育って虐待を受けた子どもたちを見続けてきたので、そのお話をしようと思っています。ダルクでは日本各地の刑務所に「薬物依存症リハビリテーションプログラム」を届けるようになったので、最後に刑務所の中での話もしたいと思っています。

寂しかった幼少時代

暗闇にいるような感じ

わたしの話にはマニュアルがありません。いつも当日、みんなさんと出会ってから何をお話するかを決めています。抜けていることが多いと思うので、どうぞ質問して下さい。わたしは49歳ですが、26歳のときにアルコールと薬物でどうにもならなくなりました。その当時、女性の方がアルコール依存症になりやすい身体だとは誰も知りませんでした。その二年くらい前に『妻たちの思秋期』（斎藤茂男編著、1982年刊）という本で、「キッチンドリinker」という言葉が一部で言われるようになっていました。でもわたしはもちろん家族も友達も周りにいる人たちもみんな、女性がアルコール・薬物依存症になるなんて知らなかった時代です。20年、30年飲み続けないと、たかが八年飲んだだけでアルコール依存症になるわけがないと思っていました。自分の身に何が起きているのかまったく分かりませんでした。23年前はまさに暗闇にいるような感じでした。

女性はアルコール依存になりやすい

いまは女性と男性では、アルコール依存症になるまでの年数がまったく違うことが医学的に分かってきました。女性は男性より肝臓が小さいのです。たとえば男性と一緒にビールを一杯飲んだとすると、そのときの女性の血中アルコール濃度は男性より高くなるのです。女性の方がアルコールが多く残ってしまうわけです。というのはエストロゲンという女性ホルモンがアルコールの分解を遅くするからです。生理の前後、エストロゲンが増える時期に飲むと分解しにくいのです。そのために女性は、たった八年でアルコール依存症になる可能性があるのです。

実はわたしは薬物依存症

わたしは実は薬物依存症でもあるんです。薬物とは何かというと安定剤、睡眠剤、それからマリファナとか痛み止めとか、そんなに派手でない薬です。薬物依存は覚せい剤とかシンナーだけじゃない。生理のときの痛み止めや、更年期障害の治療で普通に処方される睡眠剤でも依存症になります。それから整形外科で出してくれる筋肉弛緩剤やハルシオンもヤク中には危険な薬です。ヤク中には精神科では出してもらえないような“いいお薬”を整

形外科でがっばりもらってきます。

問題になるような薬物は、法に触れるもの以外にもたくさんあるのです。つい三年前までは毎年、日本で製造される睡眠薬の量は、毎年、前年度比倍、前年度比倍、前年度比倍で製造されていました。信じられないでしょう。アメリカでは「ヴァリウム」という有名な精神安定剤があります。その中毒になった人たちは、「ヴァリウム中毒の会」をつくっているほどたくさんいます。このように薬物依存に陥る薬物は、実は多岐にわたるのです。

大家族のなかで過保護に

わたしは18歳から26歳まで、アルコールを飲みながらいろいろな薬物を使いました。今日の話は暴力と依存症の関係がテーマですが、わたしの育った家族には暴力はなかったのです。にもかかわらず依存症になってしまった。「なぜだったのだろう」と長い間不思議に思っていました。家族構成は、父と母と祖父母、弟がいました。商売をしていたので、周りには働いている人や親類もいてというふうに、わたしは大家族の中に生まれた初孫でした。

わたしは病弱で、今でも重度のぜんそくで、小さいころから入退院を繰り返していました。学校にも行けなくて友達ともうまく付き合えない子どもだったので、本当に過保護に育てられました。そのせいで社会に出にくかった面はありますが、そのかわり過保護なくらいに守られて育っていますから人に対しての信頼感があります。人を信じられるのです。だから依存症ながらも、こういう仕事をやっていけるのだと今はすごく感謝しています。

両親はアダルトチルドレン

わたしの両親は両方ともアダルトチルドレンで、特に母はアルコール依存症の家系で、叔父は今でもアルコール依存症です。アルコール依存症は遺伝子が見つかっていて、いくつかの因子があると発症しやすいのです。そういう母の子どもなので、弟もわたしと同じ

ように一回、依存症になりかけました。そのとき彼はストレスの激しい仕事をきっぱり辞めて、生き方の方向転換をしたのです。彼は今わたしたちが使っている薬物・アルコール依存症の回復プログラムを知り、それを英語に翻訳をする仕事をして、もう一度人生を見つめ直す契機にしました。今はエコロジストになって環境の仕事をしています。弟が辞めた会社は一流企業でしたから、父たちは「どうして会社を辞めるのだ」と大騒ぎしました。でも義理の妹（弟の妻）は今でも「あのとき辞めていなかったら膨大なお金はもらえたけれど、お姉さんと同じアル中になっていた」と言っています。わたしも弟が会社を辞めたことはよかったと思っています。このようにアルコール依存症の因子を持っていても、すべての人が発症するわけではないし、周りに何があるかによって変わります。弟は一回発症しかけたけれど、危うくなったときにもう一回自分を取り戻し、信頼関係を築き直すことができました。

四年間、ぜんそくで小児病棟に

わたしは小学校から中学校卒業までの四年間、病院の小児病棟で過ごしました。昔、わたしは人前で自分の体験談を話すときに、「小児病棟での生活は素晴らしかった、早く大人になったすごく良い四年間だった」と言っていました。実はそうではなかったのです。今振り返ると小児病棟での四年間はきつかったのです。

14年前からわたしのスーパーバイズをしているカウンセラーと話しているときに、「なんか陽江さんの話はおかしい気がする」と言われたのです。「四年間の入院生活は楽しかったと語っているけれど、どうなのだろうか。話のつじつまが合わない。楽しかったのなら、なぜ薬物依存やアルコール依存になったのだろうか」と。

薬物をやめ始めて十数年、わたしの回復前半のストーリーでは、「すべてが良く、素晴

らしい母や家族に恵まれてヤク中になったわたしです。だから悪いのはわたしです」という話をしてきました。自分で分からなかったのですね。

面会は二週間に一回

母は超過保護で、自分の範囲の中に娘を入れておきたい人です。わたしが結婚して子どもを産んでもまだ、自分とへその緒がつながっていると思っていた。わたしが子どもを産む直前、35歳のときに電話をしてきて、「陽江は自分がケアできない所に行ってしまう夢を見た」と、電話の向こうで泣いた人です。

わたしは母に、「つらい」という言葉を一度も言ったことがありません。母は当時のことを「お前は楽しそうだった」と今でも言います。母のために早く大人になって母を守ってきたつもりでいたわたしは、「つらい」とは言えなかったのです。

そこは昔の結核病棟、サナトリウムのような学校でした。長期の腎臓病・ネフローゼ・ぜんそくや結核の子どもたちが55人くらい集められました。四つか五つの結核病棟と一般病棟があって、小さな学校が付属しているところでした。わたしはぜんそくがひどくて普通の学校に行けませんでしたから、初めてきちんと学校に行けるようになってうれしかったです。

両親は遠くにいましたが、面会は二週間に一回、土日だけでした。今だったら自由にさせていると思いますが、昔は「すべての子は一緒」という考え方だったのです。外泊も年に十日だけで、家が遠い子も近い子もいたのですが、例外は認めないので、良く言えば平等に扱ってもらえたとも言えるし、ちょっとつらいところもありました。

少年院と同じだった病院生活

わたしは今、少年院の子と話をする機会があるのですが、わたしにはとてもよく話が分かるのです。病院生活は少年院の生活とまる

で同じなのです。現金を持っていけなかったし面会も少なかったし、病棟の先生がトップで看護師さんがその次で、子どもは一番下というピラミッド構造は少年院となんら変わりなかったのです。小児病棟と少年院が同じって変ですね。でも昔は子どもの気持ちに気配りされなかったように思います。ただ今のように文書化されシステム化されていなくても、掃除のおばさんや看護助手さんが優しくしてくれました。

ヤク中やアル中の人に治療を受けて何が良かったかを聞いてみたら、「熱が出たときにおかゆを作ってくれた」「氷枕をしてくれたのが良かった」と言います。みんなから見放されたひどい状態で治療にたどり着いて、そんな心配りや思いやりを受けると、こころに残ります。良くしてくれたと感謝されるのは、看護師や先生ではないのです。

焼き場の煙を見ながら

わたしは薬物・アルコール使用をやめて十年たった38歳くらいのときから、激しいパニック発作を起こすようになりました。そのとき思い起こされたのが、その病院での出来事だったのです。今思うと本当にひどい病院で、わたしたちのいる病棟の隣に焼き場があって、霊安室もありました。だからわたしたちは、よく肝試しで霊安室に行くことをしていたのです。ご飯を食べたりドッジボールをしながら焼き場の煙を見て、みんなで「死んだんだね」って。そんな生活をしていました。

ものすごく死に近い所で暮らしていたのに、子どもには「死」って一体何なのか分からないのです。そのうえ先生や看護師さんは説明してくれません。みんなを集めて「〇〇君が亡くなった」とは言いません。だから子ども同士の間で「〇〇ちゃん死んだみたい」という話になります。ちゃんと説明してもらえないし、じわじわと、まるでホワーンと入ってくる話です。そうやって亡くなる友達を見てきました。でも死を語ることはでき

ませんでした。

言葉にならない「死」を実感

その後、普通高校に行って社会に出るわけですが、当時はぜんそくの薬が悪かったので、いつまた入院生活に戻ってしまうか分かりませんでした。わたしが高校の一番大変だった時期に、一緒に勉強していた何人かの友達が亡くなりました。怖かったです。友達のように自分がいつ死んでしまうのかと考えていました。だから生き急ぎました。自分は20歳くらいで死んでしまうと本当に思っていました。すべてのことを経験しておきたかったのです。良いことも悪いこともしました。高校一年のころ、周りにボランティアをしている人は少なかったのですが、ボランティア活動にまい進しつつお酒を飲んで薬を使い、男の子と遊んでいたのです。

二年前くらい前に、わたしは母に友達が亡くなった話をしたことがあるか聞いてみました。「一度も聞いたことがない」と。「死」は言葉にならないのです。小さい子どもや十代の人たちは死というものに出合ったとき、言語化できないのです。薬物やアルコール依存症の人の中には、家族に自殺者がいたり、兄弟が病死されたり、両親を早くに亡くされたりと、早いうちに家族の死を体験し、言葉にならない「死」を抱えた人がたくさんいます。

誰にも明かすことができなかった

ぜんそくの薬を子どものころから

わたしは身近に迫る「死」をたくさん引き出しにしまったまま、ひどいぜんそくのためにあせって社会に出てしまいました。気分の変わりやすいぜんそくの薬を子どものころからたくさん飲んでいたうえに、アルコールを飲み、さらに他の薬物を使うようになってどうにもならなくなりました。でも困っている状況を親に一切言えませんでした。格好つ

けたいとか心配かけてはいけないとかだけでなく、早く大人になったという誇らしい気持ちもあって、「もう大人なのだから相談しなくてもよい」と思っていました。今思えば大人になってやっと言葉で話せるようになったのだから、相談してもよかったんですね。子どものころには周りの人が気にかけてあげないと、子どもからは相談できないのです。

依存症の親は子どもを不安に

ダルク女性ハウスには、入寮施設のナイト・ケアと入寮・通所者が昼間通うデイ・ケアの二つがあります。いまナイト・ケアには五人住んでいて、デイ・ケアには15人通って来ています。その人たちの子ども、つまり依存症の親を持った子どもがたくさんいます。ダルク女性ハウスに入寮・通所する人たちには、合計35人の子どもがいて、その子どもたちをケアし、母子ともにケアしていくためのプログラムを行っています。

依存症の親を持つと何が起こってくるのでしょうか。

子どもたちの母親や父親がまだアルコールを飲んでいて、家で暴れているとします。そうした場合、次の日に学校で言えないのです。「昨日の夜、うちの父ちゃん、酒飲んで暴れてさ」なんて友達に言えません。「母さんが押さえようとしたら、こんなタンコブになっちゃって」って、大人の仲間同士ではそんな話は常にあります。

けれど子どものころは話せなかった。次の日の朝起きると、すべての窓ガラスにテープが張られ、壊れたテレビが庭に落ちていて、お父さんとお母さんはシーンと朝ご飯を食べている。すると子どもは何があったか分かっているのに、家でも学校でも誰にも語れないのです。それどころか子どもは怖くて学校に行けなくなってしまう。あるいは学校に行っても、お父さんが帰って来たらまたやるのではないか、お母さんが逃げてしまうのではないかと常に不安でいっぱいになるのです。

疎外され、放置されている子どもたち

ダルク女性ハウスのプログラムに来る子どもたちに、何が欲しかったかを聞くと、「お父さんやお母さんがアル中だとか、いろいろなことを友達に安心して話したい」と言うのです。カウンセラーや大人に優しく聞いてもらうのも良いですが、子どもたちは自分の経験を話してもばかにされたり卑下されたりしない友達が欲しい。子どもは自分の父親や母親がどんな父親や母親であっても、ものすごく大好きなのです。子どもは親を愛さないと守ってもらえないから、親を愛することをインプットされています。もうやめなさいというくらい子どもは親が大好きです。だからお父さんが本当は暴れていることを他の人と言えないのです。

社会で一番疎外され存在を忘れられ、放置されスボイルされているのは子どもです。核家族化していますし、秋田の虐待事件もそうですが、コミュニティが崩壊しています。わたしの生まれた栃木もコミュニティが崩壊しつつあるうえに、市民活動で勉強しているところもあまりないのです。だから問題にふたをしてきました。

子どもの性教育は「寝た子を起こすな」という体制のため、今栃木県はHIV感染者数と十代の妊娠中絶が東京を除いて日本一です。性教育をやっていなくて、コンドームを使うことを教えてこなかったのです。あせった栃木県の高校の先生たちは、「みんなで変えていかなければいけない」と、きちんと子どもたちに話をするように変わってきています。

「摂食障害」の言葉がなかった時代に

わたしが26歳のときには女性の薬物依存アルコール依存症は存在しない、日本には虐待がない、DVもないと言われていました。そのような状況の中でわたし自身の回復は始まったので、最初は女性の仲間と出会うことが大変でした。

わたしには摂食障害もありましたが、当時、

「摂食障害」という言葉がありませんでした。拒食と過食を繰り返し、食べ吐きをするようになって、自分に何が起きているか分からない。アルコールを飲んで倒れ、薬物を飲んで倒れて、たくさん食べて吐いて体重が増えたり減ったりしても、すべてが何だか分からなかった。こんなことをしているのは宇宙の中で自分一人だと本当に思っていました。

女性の仲間に出会って号泣

初めて女性の仲間と出会ったとき、わたしは持っていたバスタオルで「ウオーン」と泣きました。それ以来「普通はハンカチで泣くけど陽江は豪快だ」と言われています。仲間と会って、「わたしは独りではない」と初めて呼吸ができる気がしました。

でも仲間だと思うためには、自分がその当事者であることを認めなければならない。暴力を受けているとか暴力を振るっている、アル中・ヤク中であるということを、自分で認めなければならない。これらを認めるときは本当に孤独なのです。「周りに悪いな」と思ってしまう。「もし自分がこんなことを言ったら、父や母や叔父や叔母はどう思うだろうか」「自分がDVの加害者であると言ったら周りはどう見るだろうか」あるいは、「自分がDVの被害を受けていると言ったら周りに迷惑をかけるのではないか」などと思う。それはとてもつらいのです。それでわたしも泣きました。こんなことを認めてよいのかということですね。

「美人でも痔は医者に見せるよ」

ご自身もアルコール依存症で、「みのわマック」の創設にかかわっていた大阪教区の田中道雄神父という面白い方がいました。わたしが「認められない」と泣くと、「陽江さん、痔という病気があるでしょう。どんなに美人でも痔になったらお医者さんに行ってお尻を見せるのですよ」と言ったのです。本当によく分かるたとえだったので、やっと話すこと

ができました。そうしてわたしはアルコールと薬物依存が病気だと知り、自分がその病気であることを認めて治療を始めたのです。認めたら、そこからはい上がっている仲間たちの姿が見えたのです。

地獄の底で人と会った感じ

自分がやめられるとは思いませんでした。でも「やめている人たちのそばにいたい。やめられなくてもよいから、せめてこの人たちと一緒にいたい」と思ったのです。やめている人たちに毎日会いに行きました。わたしはやめられる自信はまったくありませんでした。みんなはやめられるけれど、わたしはやめられないに違いないと思っていました。恥ずかしくて言いたくない話を信頼できる人たちのなかで話してみよう。それを言ってもばかにしない同じ経験のある人たちのなかで話そうと思いました。これが始まったのは今から23年前です。本当につらくて、どん底ですべてをなくして、どうにもならない地獄の底で人と会った感じでした。

自分だけではなかった

そのときわたしは26歳でした。当時の26歳の女性は半数は結婚、三割は仕事をしていました。残りも家事手伝いとか、すべての人に何かしらの居場所があったのです。でもわたしには、はまる場所がなかった。仕事もないし結婚もしていない。アル中でヤク中で摂食障害でボロボロでした。男もたくさんいて、自分で長い間ふしだらな女だと思っていました。「なんで、こんなに男が必要なの」と自分が許せませんでした。

でも同じ生き延びた仲間たちと出会う、仲間たちとミーティングに行きながら、「自分の経験が仲間の経験になるかもしれない」と思いました。こんなことはわたしだけだと思っていたけれど、仲間たちがみんな経験してきたことでもあると分かったのです。仲間の話を聞いているだけで、わたしは何も話さ

なくても分かち合えたと思えるくらい、みんなわたしと同じでした。わたしだけの経験だと思っていたことが、わたしの手を離れみんなで共有できる。自分だけの苦しみからやっと自由になったと思いました。

そして自分の経験をこのような場所で話すこと、仲間と待ち合わせすること、仲間とミーティングに行くこと、大変な仲間をみんなの手助けすること、何回も薬物・アルコールを再使用する人を受け入れること。それらがわたしにとって、初めての居場所になりました。

役に立たない人こそ大切な人

「陽江さんはこころの支えだった」

「何回も再使用する人を受け入れる」って、どういうことか分かりますか。

薬物やアルコール依存は、やめにくい病気です。再発します。再使用します。でも仲間とは不思議なもので、少しやめるとみんなが尊敬してくれます。薬物を使わないなんて当たり前のことのようにですが、「依存症者にとってそれは奇跡だ、すごいことだ」と仲間には分かるのです。

やめないことで有名な仲間がいます。わたしは彼にすごく感謝をしています。

彼が二年前に手紙をくれました。彼は薬をやめないで、とうとう仲間たちから「やめると余計危ないから、二、三日使うほうがよいのではないか」などと言われています。わたしも彼が薬をやめたら死んでしまうような気がして、「お願いだから、やめないでくれ」と言っているのです。その彼がわたしにくれた手紙で、「陽江さんはこの20年間、僕にずっと同じ態度でいてくれた。いつ会ってもこころの支えだった」と書いてくれました。でも実は「あまりわたしのそばには来ないでね」と、わたしは思っていたのです。だからわたしは道で彼を見た瞬間に、はしごの陰に

隠れるとか、近所でヨレている状態を見たときに遠回りして帰るとか、でも彼に会ったときは「元気。身体に気をつけてね」と、ずっと言っていました。

薬やめない人もわたしの力に

でも手紙をもらって本当にうれしかったのです。そして彼が手紙をくれたことで、わたしが一番大変な人と付き合い続ける力になったのです。やめている人だけがわたしの力になっているのではないのです。

こういうことを口で言うのは簡単ですが、実際に向こうから薬を使っている人が来たら逃げますよね。酔っ払って「陽江」なんて抱きつかれたりしたら、「あっち行ってよ」って言ってしまいますけど。会話ができるときにきちんと話をし、除外しないようにしていくことが大切かなと思っています。

分娩室にダルクの男が侵入

23年間、仲間と一緒に生きてきたなかで、そんなことが本当にたくさんありました。

わたしはよく交通事故に遭っていました。あるとき事故で病院に運ばれて最初に来てくれたのは気のいい人ですが、妄想症状がひどくてみんなに迷惑をかけていることで有名な仲間でした。わたしの夫に連絡してもつかまらず、彼が救急治療室にやってきたのです。腰の骨が折れて血だらけで寝かされているときに「陽江さん、どうしたの」って笑うのです。彼はびっくりして思わず笑ってしまったらしいのです。

わたしが早産して、八ヶ月で子どもを産んだときにも、夫はバチカンに行っていていなかったのです。ダルクは、たくさんの神父さんに助けて頂いて、そのとき夫はアルゼンチンのアルフレッド・パウリー神父とともにイタリアとスペインの施設を見に行き留守でした。そのときも、なぜか分娩室にダルクの男のメンバーが入って来て、わたしがうなっているときに、「陽江さん、ダルクのあの本

はどこにあるのですか」って聞いてくる。彼は病院スタッフに夫だと勘違いされて、入って来ちゃったらしいの。

怖い顔した男の手にバラの花

出産した次の日にも、わたしが寝ていたら、これもまたメチャクチャに迷惑な仲間が入ってきたのです。この人もすごい人で、わたしも道で会ったら隠れてしまうような人ですが、わたしの子が一番初めに会った仲間は、よりによってその人なのです。危ないくせに気だけは良い人で、わたしが病気になったとか入院したとかいうと、すぐに来るのですね。

母親が六人と赤ちゃんがいるところに、すごくでかくて、すごく怖い顔をした男が、バラの花一本持って「陽江さん、おめでとう」って入ってきたから、みんな「ヒーッ」って。わたしは困ってしまって、普通は「ありがとう」と言うのですが、「何で来たの」って言っちゃいました。でも彼はその後を受けた電気ショック療法のせいで、そのことを忘れていて覚えていないのです。

疎外しない、何でも受け入れる

わたしの子どもは、そのような人たちの中で育っているので、そういう男たちを怖いと思わないちょっと変わった子どもに育っています。彼らは時々、精神病院の保護室から電話をくれるのですが、わが子は五歳くらいから電話に出て話していました。だからダルクのメンバーたちの家庭事情をよく知っているのです。「あのお兄ちゃんの家には、子どもが二人いるんだよ。お母さん知ってた」とか言います。「どこでその情報を手に入れてきたの」と聞くと、「ダルクで留守番をしているときに、お兄ちゃんが自分の子どもの話をずっとしてくれた」なんて言います。小さいころからそのような感じで育ったので、「お父さん、今日どこに行くの」と聞かれると、「刑務所」って答えるので困ったことがあります。「事務所でしょう」って教えるのです

が。ダルクも自助グループも大変なことが多いですが、とにかく「疎外しない、何でもかかわる、何でも受け入れる」というのは、教会と同じだと思います。出会っていくことが、大切だと思うのです。

仲間意識がわたしを助けてくれた

そして今思えば、そんなヤク中ならではの仲間意識が、わたしを助けてくれたのです。わたしたちにとってアルコールや薬物をやめて良くなっていくだけが、実は回復ではないのです。やめた人もやめない人も一緒に暮らしていくことが大切だと思っています。仲間でない人たちには、やめない人のありがたさが分からないかもしれません。でも仲間には分かるのです。2006年1月に亡くなられたメリノール会のロイ神父さんがいつも言っていました。「やめられない、そして一番大変な人たちが、わたしたちの一番の力だし、大切な仲間だ」と。わたしも長くやめている人が偉いとか、大学を出ている人が偉いとか、良い仕事をしている人が偉いとかではなく、社会で役に立たない人たちが、実はすごく大切なのではないかとと思っています。いつもこういう「ひどい人」が周りにいたことに、わたしはありがたいと思っています。自助グループではよく「自分が依存症になって良かった」という話をする仲間がいます。実はわたしもそう思っているのです。アル中でヤク中で、摂食障害でよかったなって。もう一回アルコールや薬物を使ったら、また同じことになるし、疲れるからやめている今が一番よいのですが。

性虐待の被害者に何が起きているか

「ないこと」にしてはならない

薬物依存症の自助グループ活動で、女性の仲間とかかわるうちに、女性のための安全な居場所とプログラムが必要であると痛感

し、18年前にダルク女性ハウスを開設しました。そのなかで性暴力を受けた人にたくさん出会ってきました。自助グループでは20年前から、女性たちは性虐待の話をしてきました。でも外側では、それはないことになっていたのです。

アメリカの仲間から「陽江、日本では性虐待をいたずらって呼んでいるけど、“いたずら”っていう言い方はやめた方がいいよね。なぜ性虐待とか性暴力と言わないの」と質問されたことがあります。彼女は日本で性虐待に遭っていたのです。だからわたしは17、8年前から、講演では性虐待の話をしてきました。暴力、DV、そして性虐待も仲間の間では互いに話し合っているのに、一歩外に出ると何もないことになっている。「ないこと」にしてはいけないと思い、今日ここにおられる Saya-Saya の松本さんとか、AKK（アディクション問題を考える会）の方たちと一緒に、いろいろなところで話してきました。

手つかずの男性被害者の治療

性虐待の加害者は、ほとんどが父親、いとこ、叔父さん、兄弟などの近い人です。実は子どものころの性虐待被害者は、男女比が50%・50%という調査の結果も出ています。女性が多いように思われていますが、薬物依存症の男性で、自分は性虐待の被害者だという話をする人はたくさんいます。でも女性の性虐待被害者の治療は始まっていますが、男性は手つかずです。触れられないのです。日本には治療できる人がいません。そのため彼らは治療の機会もないまま加害者に転じ、暴力加害者やDV加害者になり、もう一回性暴力を繰り返すことにもなります。精神鑑定で誘拐犯の人たちが何を言うかで、性虐待を受けたかどうかはすぐ分かります。世間で異常殺人犯・多重殺人犯といわれる人でも、裁判の最後に精神鑑定で出てくるのは性虐待の問題です。

女性受刑者の多くが性虐待の被害者

ダルク女性ハウスでは今、刑務所に話をしに行っています。こんな報告が女性の刑務所にあります。2005年1月11日の監獄人権センターのニュースレターに、「女性受刑者の73%は、幼少期に性的虐待」という見出しで、こんなことが書いてありました。厚生労働省の研究班による女性受刑者を対象とした国内初の性的虐待調査で、覚せい剤使用などで有罪判決を受け、1998年2月から2000年10月にかけて入所した20代、30代の受刑者82人うち、約73%に当たる62人が18歳になる前の幼少期や思春期に性的虐待を受けていることが分かったということです。

実は1998年に全国の一般女性約1300人を対象に行った調査では29%なのです。それでも29%もあるのです。レイプは大人が受けるものではありません。性暴力被害が一番多いのは14歳から16歳、思春期のころなのです。

アルコールや薬物で被害の痛み消す

暴力を受けた人がなぜ依存症になりやすいかという、アルコールや薬物を使うと身体が痛いのを忘れることができるからです。こころが痛いのも止まる。近しい人から暴力を受けているから、人のことが怖くてたまらないのです。しかしアルコールや薬物を使うことで、やっと誰かと付き合えるようになります。そういう人は初めての所に行っても知らない人に会ったりすると、何が起きるか分からなくてたまに怖いのです。小さいころに重度の虐待を受けていると、何がどうしたから怖いとか怖くないというのではなく、身体が自動的に「怖い」と反応してしまうのです。

20人のうち五人が多重人格だった

それがひどくなると多重人格になるケースもあります。スイッチを切り替えるように人格が変わるのです。あるミーティングに集まった20人のうち五人が多重人格だったことがあります。最初はどうかなるのかと思いまし

たが、会いに来るときの人格は決まっていて、人格が崩壊してしまうことはありません。人格交代という症状を含めてすべてがサバイバル、つまり生き延びるために使っている方法だから、そのまますべて使えばよいのだという付き合い方をしていると、だんだん良くなってきます。ただ時間がかかります。最初に人と信頼関係が築けるようになるまでに15年もかかってしまいます。

父親から性虐待を受けていた女性は

父親からの性虐待から逃げて20代前半でダルク女性ハウスに来た仲間が、薬を再使用し刑務所に行っていました。わたしの目の前で再犯してしまうのです。そのような女性たちと付き合っていくには距離感をとるのが大変で、難しいです。身内から暴力を受けていることが多いので、自分に近い人ほど危険だとインプットされている。そのため信頼関係ができたときほど怖くなってしまいます。だからやっと仲良くなったと思うと消えてしまうことがよくあります。信頼感を持つとわたしたちの前から消えて、もう一回信頼関係をつくりあげるのに十何年かかるのです。十代後半から20代前半で出会った仲間たちが、30代になってようやく「やっぱり言えなかった。言葉にできなかった。自分がこんな話をしたらみんなが驚くし、それに迷惑をかける。でも刑務所の中だったら、まだ話ができる」などと話してくれるのです。

回復への長い道のり

性虐待を受けていると、治療が始まって五年から十年くらいまでは自殺未遂を繰り返す状態が続きます。その時期は周りのサポートがしっかりしたところととにかく生き延びてもらう。その後、近くにいる人が怖くなるわけですから、何回か姿を消したりもします。そうしながら生き延びてもらう。生活が安定してくるとフラッシュバックが起きようになり、そのフラッシュバックの内容が変化し、

何とか対応できるようになり落ち着いてくるという経過は、本当に長いです。

わたしは、そんな人たちが生き延びてくるのをずっと見てきました。だからみんなに力があることはよく分かるし信じています。そんな仲間たちにとって、周りの理解がない、暴力なんて存在しないという扱いを受けることが一番つらいのです。

暴力がない社会はないとわたしは思っています。人が集まったら、必ず暴力を振るう人がいるのです。悲しいことだけれど世界から戦争がなくなることはないし、人間って必ずどこかで何かあるわけです。何%かの人は必ず暴力に遭ってしまうのです。

怒りのコントロールは危険

だから今日は皆さんにお願いします。暴力を「ないこと」にしないでいただきたいのです。暴力を排除するのではなく、「暴力を防止しながら」「暴力に遭ったときにどうサポートしていくのか」の二つを考えて欲しいのです。

暴力を排除することはできません。暴力加害者に対するプログラムに「怒りをコントロールする」という考え方がありますが、それは危険だと思います。怒りを止めようとするのは非常に危ない。怒りは何らかの形で出さないとだめなのです。その出し方が暴力になったり、言葉の暴力や精神的支配になることを防ぐために、「立ち去る」（その状況から少し離れる時間をつくる）「小出しにする」ということを練習する。そして「自分はつらい」と言えるようになることが必要です。

怒りを発散するためにスポーツをすればよいなどと言いますが、スポーツ選手でも暴力加害者はたくさんいます。今やオリンピック選手もヤク中だというのだから、どうやらスポーツでは発散できません。わたしの仲間には、（競技の）タイムを極めていくうちにヤク中になってしまったという人もいます。

二重、三重に人を脅かす暴力

本当に暴力のトラウマ治療をしようと思ったら半端ではないです。

暴力の問題はとても深くて、暴力を直接受けている人だけでなく、それを聞いた人、またその話を聞いた人、というように、二重、三重に脅かされるのです。その人だけではなく、その人のケアをする人まで含めて傷つき、「暴力はない」とされる状況のなかで孤立し、社会から切り離されてしまうのです。

実は、こういう場で暴力の話をするとうすぐ疲れるのです。性暴力の話も実はしたくないのです。自分が疲れるから。なぜなら話をするとみんなが退（ひ）くのです。なかったことにしたいですから。でも現実にあるのです。生き抜いてきたわたしの仲間たちが「その話をして欲しい。それが陽江の役目だ」と言うのです。

性虐待を受けた人がどこかに相談に行く。その相談を受けた人がまた、スーパーバイザーに相談に行く。そうやって六番目くらいにわたしのところに話が来ます。六番目のわたしでさえ、その話を聞くのはつらくて耐え難いと思うことがあります。この話を聞いてしまったみなさんは帰ったらお風呂に入らないといけいねいですね。ほかにコーヒーを飲むとか、自分をケアすることをせすにはいられないと思います。

虐待のケアで燃え尽きる人も

都内にあるホームレスの一時宿泊所の女性施設には、DVから逃れて来ている人たちがたくさんいます。その人たちは自殺未遂をし、リストカットもし、大量服薬をし、男性の問題もあって想像を絶するようなことが起きてきます。スタッフたちは、そういうことはよく起こると分かっていますが、本当に大変な仕事なのです。スタッフは自分が神経症になりながら、他に行き場も支えもない入所者たちのケアをしています。そしてバーンアウト、燃え尽きてしまうのです。

これが現実です。この国でこういうことが毎日起きている事実をなかったことにしてはだめなのです。必ずあるのです。そして、こういうことが起きているのは決して日本が悪くなったからではないです。

昔からあった性虐待

わたしは子どものケアをする所でも話をしています。そのスタッフから「性虐待は増えているか」と聞かれます。わたしは増えたとは思いません。なぜならわたしは昔から性虐待の相談をたくさん受けてきました。だから最近になって増えたとは思いません。ただ分かるようになってきたのです。性虐待という言葉が知られるようになり、子どもたちが話すようになり、周りの人も「何かおかしい、性虐待かも」と疑うことができるようになったから、ようやく問題が表面化しただけだと思っています。そう言う「それを聞いただけでも落ち着く」と言うのです。「もし増えているのなら、止めなければいけない気がする。でも何もできない。そして自分が無力感到陥る」と。

わたしは「そんなことはない」と言います。その問題があることを社会化しながら、今、自分の目の前にいる子どもたちと全力で付き合っていけばよいのだ、そして、その子どもたちに、いろいろな出会いが大切だと教えてほしい、いろいろな出会いをつくってほしいと言っています。つながり・出会いの機会をつくっていくのが、暴力被害者のケアという仕事の本質であり、責任なのだとわたしは思っています。

ゆるやかなつながりが大切

施設の人たちは本当に消耗しています。暴力被害とそこから派生する問題をスタッフ個人で、ひとつの施設で抱え込んで引き受けてしまうことはできません。暴力を受けた人も、かわった人も、社会とのつながりを失ってしまう。入所者個人の問題、スタッフ個人や

施設の力量の問題に還元してしまうと、スタッフはバーンアウトして、社会の一番下を支えてくれている人たちの話までもが、なかったことになってしまう。社会全体でこの問題がなかったことになってしまう。暴力は閉じられていくシステムです。だから社会化すること、ネットワーキングすることが非常に大切なのです。

この話を聞いた皆さんにお願いします。こういうことを、なかったことにしないでほしいのです。そして被害を多くしないための防止の活動と、遭ったときにどうするかという二つが必要なのです。

おそらく皆さんの中に自分もそうかもしれないと思われる方もおられるでしょう。生き延びられるから大丈夫です。活動をしているグループは各地にあります。そこに連絡して聞いてみて下さい。相談に乗ってくれるところはあります。多くの人が乗り越えて生きていますから大丈夫。横のつながりをゆるやかに持って、一人でいないで、つながって生きていけば大丈夫です。ゆるやかなつながりがすごく大切だと思います。

人間の尊厳を自覚し、成長し合う

苦労を自分の手に取り戻す

最近、「会わなくてもゆるやかにつながるキャンペーン」をしています。わたしが15年ほど付き合っている暴力が激しいなかで生き延びてきた仲間たちが、最近、引きこもって外に出たがらないのです。そこで直接会わなくても仲間とつながりを持ち続ける方法がないかと考えたのです。会わないけれど、互いに何月何日の何時と決めて祈り合うとか、年に何回かニュースレターを発行したりしています。スボイルされてしまうのはつらいので、どんな形でもよいからつながっていけたらと思っているのです。

そして祈りはみんなに教えています。とて

も大切ですから。

北海道の浦河にある精神障害を持った人たちの自助グループ「べてるの家」では、問題を抱えた当事者たちが自分の抱える問題を仲間とともに語り合いながら、苦労のパターンやプロセス、反復の仕組みなどを解明していく当事者研究をしています。その当事者研究をわたしのところでも試してみたら、何とか生き延び、ボーイフレンドができたり、問題が変化してきて、みんな少し人間っぽくなりました。それこそ「べてるの家」のソーシャルワーカーの向谷地生良（むかいやち・いくよし）さんが言うところの「苦労を自分の手に取り戻す」ということでしょうか。引きこもりつつ人間関係が始まりました。当事者研究はすごいです。

依存症者にとっての回復とは

わたしはダルク女性ハウスで、虐待や暴力から生き延びてたどり着いたメンバーたちが、その後どう回復していくのかを18年間見続けてきました。

それで分かってきた女性の依存症者にとっての回復とは、①自分の言葉で語ること②自分の都合も優先できるようになること③変化する自分の身体に付き合えるようになることの三つです。薬物・アルコールをやめた後の、「その後の不自由」を抱えながら、それでも薬やアルコールをやめ続けて、普通の市民として心身ともに健康な生活を送っていけるようになる、それが大切だと思っています。

生理を使って生き延びる方法

このうち③について少しお話しようと思います。十代に生理が始まって、生理が月に一回あって、だんだん女性ホルモンが増えて、妊娠して出産してというように、女性にとって身体はすごく変化していくものです。トラウマの問題を持っている人たちは、この身体に付き合っていくのが難しいのです。身体の変調についていけなくて、パニックになって

薬物を使ったり、手首を切ったりすることがあるのです。

これについてわたしたちダルク女性ハウスのメンバーが当事者研究をし、発表しました。テーマは「生理を使って生き延びる方法」です。生理前症候群とうまく付き合えるようになることで、自分の健康的な生活を取り戻すことができる。不快で消してしまいたいと思っていた身体の変化を、自分の健康と幸せのために必要不可欠な、かけがえのないものとしてとらえ直したという画期的な研究です。ダルク女性ハウスでこの研究ができるようになったことが、暴力被害者とそれにかかわる人たちへの希望のメッセージとなることを願っています。

罰するだけでは解決しない

最後に刑務所のお話をしようと思います。

A 医療刑務所は本当に素晴らしい所です。そこの所長さんが素晴らしい方なのです。

いま女性刑務所の受刑者の60%は薬物使用者です。最近、犯罪が増えていると報道されていますが、それは実は覚せい剤使用者が増えているからです。60%が覚せい剤使用で捕まっています。その人たちをどうするかについて刑務官の方たちと協力して、刑務所内のプログラムでいろいろなことをしています。

先日、A 医療刑務所の所長とお話をして考えました。

最近、声の大きい人の話ばかりが目立ちます。「厳しく罰しろ」と刑の厳罰化が叫ばれています。でも本当に大切なのは何ですか。刑務所にいる人たちを「罰すれば解決するのですか」と問われたら「ノー」です。加害者がきちんと反省して、刑罰を受けることも大切です。でも刑務所から出たとき、いかに罪を犯さないようにするかがもっと大切なのです。もともと罰するという形でしか付き合ってもらえなかった人たちですから、本当は「成長」ということがすごく大切なのです。

再発防止で効果ある「アミティ」

アメリカに効果的な再犯防止プログラムを実践していることで有名な「アミティ」(AMITY)という治療共同体があります。薬物・アルコール依存症の自助グループで使われているプログラムと同じように、アミティのプログラムも、「成長」を目的にしています。

日本の文化は「犯罪者が成長する」という考え方を受け入れられないと、ある社会学者が話していました。健康的な生活をしながら尊重され、自分が人間であることを自覚して互いに尊敬し合えば、人はもう一度成長していくのです。自助グループやアミティで回復していく仲間たちを見て、わたしにはそれが信じられます。A医療刑務所では「もう少し刑務所にいてくれたら、もっと成長させて社会に出せるのに」と思うそうです。犯した罪に対して刑罰を受けさせながら、もう一度成長させて社会に返していくことを常に考えているそうです。

医療刑務所に流れるバロック音楽

A医療刑務所には、柔道六段の刑務官がいますが、みんなが仲良くやっているの、そんなにかつい刑務官もニコニコしています。その刑務官がバロック音楽をかけると、受刑者たちのところが安らいでいくのだそうです。所長さんが「陽江さん、どうして分か分かる。初期バロックは救済がテーマになっているからだよ」と言うのです。わたしもその通りだと思いました。成長、そして祈りが大切なのです。

日本の社会では「存在しないこと」になっている人たち、A医療刑務所や一時宿泊所にいる人たちのことや、そこで起こっていることは表には出てこないです。知的障害があ

ったり身体に問題があったり、とても大変な問題を抱えながら罪を犯してしまう人たちのいる医療刑務所、ホームレスの人たちのいる一時宿泊所で、表には出ることなく黙って活動されている方たちがいて、そのような施設にカトリックの神父さんや、シスターの方が面会に来て下さったりします。

教会を安心できる居場所に

日本で初期のころから、薬物やアルコール問題での当事者活動への手助けをしていたのは、救世軍とカトリック教会です。今も薬物やアルコール依存の自助グループは、各地のカトリック教会を借りて生き直すことをしています。この場をお借りしてお礼申し上げます。社会で一番下にいる薬物やアルコール依存症者、ホームレスの人たちなど恵まれない人たちが何とか教会に行こうとする。そして教会の中で集まりを持てる。わたしは本当に感謝しています。これからもよろしくお願いします。

きっと被害を受けた人が、これから先どんな教会に駆け込んでくると思います。わたしの仲間たちにも、そうやって教会に行った人がたくさんいます。カトリック教会に行く人も、プロテスタント教会に行く人も、暴力を受けて家族を失って寄り添えない人たちなのです。安心できる自分の居場所を探して教会にたどり着くのです。

そんなとき、きょうの話を思い出していたきたいのです。どうか「ないこと」にしないでいただきたいのです。皆さんにもこれからいろいろな出会いがあると思いますが、ちょっと聞く耳を持ち、横のつながりを持ちながら付き合って下さったらうれしいかなと思います。

上岡 陽江（かみおか・はるえ ダルク女性ハウス代表）

精神保健福祉士。高校時代から摂食障害、社会人となってからは薬物・アルコール依存症に陥り、鎮痛剤などをウイスキーで飲み意識を失ったり、景色や人間がすべて灰色のプラスチックに見えるという離人症体験をするなど、「どん底」まで落ちる。そして「マック女性ハウス」につながり、回復への道を歩み始める。1990年に薬物・アルコール依存症者の自助グループ「ダルク女性ハウス」を設立、回復プログラムの実践を続けている。薬物依存症の女性の多くは、子ども時代にさまざまな形の虐待や暴力被害を受けていて、そのトラウマの痛みを薬物などで緩和する「自己治療」である場合が珍しくないというのが持論。その虐待からの回復には①自分の言葉で語る②自分の都合を優先する③変化していく自分の身体につき合えるようになるの三つだと訴えている。上岡陽江、信田さよ子、シャナ・キャンベル共著『虐待という迷宮』（春秋社刊）は、虐待問題の必読書。

医療現場から見た女性の健康と女性への暴力

佐々木 静子（医療法人向日葵会まつしま病院院長）

今日はこのような場で女性の健康と暴力についてお話するチャンスを頂きありがとうございます。わたしは東京の江戸川で「まつしま病院」を運営しています。ベッド数40の小さな病院ですが、他の産婦人科病院とは違った治療をしていると自負しています。昨日から重たい話が続っていますが、このような場でこのようなことを真剣に論議されることは大事だと思います。この場をつくってくださっている皆様に敬意を表します。

わたしは宗教には関係のない立場で生きてきましたが、たまたま前に勤めていた病院がキリスト教系の病院でした。ただ宗教色が強くなかったので、あまり宗教のことを考えずにいました。わたしは産婦人科医療の場において何となく違和感を覚えていたことがあります。それが「富士見産婦人科病院事件」の支援につながったわけです。そして女性が受ける暴力を産婦人科のなかでどのように支援していくかを考え実践するようになりました。

富士見事件から学んだこと

目玉は超音波診断装置

「富士見産婦人科病院事件」は、1980年に埼玉県所沢市で起きた事件です。

45歳以上の方でないとい記憶にないかもしれませんが。所沢は東京から新しい人口が流出してくる所でしたが、そこに新しい病院が建ちました。その病院の目玉商品は超音波断層装置、エコー検査の機械だったのです。エコー検査は今でこそ当たり前ですが、そのころは大学病院や研究室にしかないような機械でした。その病院はいち早くその機械を導入して医療に悪用したわけです。お腹が透けて見える超音波装置を使って微細な診断ができることを売りにしたのです。

必要ない手術をして金儲け

この機械を操作したのは、白衣は着ていましたが医師免許証もない理事長と称する男で、「あなたは子宮筋腫がある。卵巣が腐っている」とか、妊娠している人には「あなたの赤ちゃんは奇形である」などと言って必要ない手術をしたのです。若いのに子宮と卵巣の両方を取る乱暴な手術でした。子宮だけ取れ

ば妊娠はしなくなり、月経はなくなりますが、卵巣が残っていれば女性ホルモンが分泌されますから、女性の健康はそれほどダメージを受けないのです。ところが両方の卵巣がなくなると、ホルモンが活発に働いている年代ですと卵巣欠落症になります。いわば人工的な更年期状態になり女性の健康に大きな被害を及ぼすわけです。このような手術をしたのです。

被害女性が1138人

この事件が発覚したときに、自分が被害に遭ったかもしれないと保健所に駆け込んだ女性は、なんと1138人もいたのです。医療被害史上これほど大規模な被害は初めてであるとわたしは思います。この事件は裁判で争われてきました。日本の裁判制度は非常に時間がかかります。わたしは医師の立場から、このような被害を繰り返さないために何を学び、実践すべきかを考えてきました。20数年前の医療は今では通用していないこともたくさんありますから、長引く裁判は弊害があると思っています。結局、その事件は最高裁までいって被害に遭った人たちは勝ち、「乱診治療」が認められました。その間に病院は計画倒産をして、賠償金が支払えない状態が現実とし

て残りました。しかし事件から学んだことはたくさんあります。女性医療や本当の良い医療を考える際に役立つことがあります。

医者言うままに、が良い患者だった

富士見産婦人科病院は、たくさんの人に不必要な手術を営利のためにやったのですが、いくつかの問題が浮き彫りされました。女性が医者言うままに手術台にあがってしまうのは、浅はかではないかという批判も確かにあります。しかし当時は患者サイドからすると、医者言うままに素直に治療を受けるのが良い患者というイメージがありました。ですから多少の問題があっても仕方がなかったと思います。それにしてもわたしの立場から言えば、女性は自分の身体、特に性については何も知りません。むしろ知らないほうがよいと考えていたふしもあります。

ノー・チェックの閉鎖的な病院

もう一つは、そのような医療をだれがチェックしていたかです。確かにノー・チェックです。つまり病院という閉鎖的な所で、手術が適正であったかはだれもチェックをしない。保健所の立ち入り検査は、免許を持った医師がやっているか、きちんと消毒をしているかがメインで、医療の質までも問うチェックはだれもしていない。野放し、やりたい放題の医療がまかり通っていたのです。そして医師免許を持たない人が超音波検査をしていたことは保健所もうすうす察知していたらしいのですが、病院側にその情報が入ると、超音波ができない医師をそばに立たせて、形としては医師が検査していたことにして乗り切っていました。

26年間も続いた民事訴訟

この裁判は、最初が刑事的な問題、つまり必要ないのに医師がお腹を切る行為は手術ではなく傷害行為ではないかと、傷害罪で起訴することになりました。ところが日本の悪い

ところで、刑事告訴をした場合、医療サイドが「本当にそうだ」と言って支援する制度がなかった。結局、裁判を維持できないという理由で「限りなく黒に近いグレー」という言葉を残して、刑事告訴は取り上げられませんでした。それで民事が26年間も延々と続いたわけです。非常に難航しました。弁護士はたくさんいましたけれども支援する医師がいません。わたしを含め三人の医師が支援活動を続けてきたのです。

子宮の大きさはニワトリの卵

わたしはどうしてこのような事件が起きたかに興味を持ち、聞き取り調査に参加しました。驚いたことに非常に小さな子宮が摘出の対象になっていたのです。手術記録から気がつきましたが、統計をとってみると本当に小さいのです。みなさん、正常な子宮の重さを知っていますか。手術をした後に家族の方に「摘出した子宮を見せて欲しい」と言われてお見せすることが多いのです。取った子宮にガーゼがかかっている大きさが分からないときに、「正常な子宮の大きさってお分かりですか」と聞くと、「えーっ」と言われるのですが、みなさんはお分かりですか。正常な大きさはニワトリの卵の大きさです。重さは6、70グラムくらいです。富士見病院で取った子宮の平均重量は113グラムだったのです。わたしが当時、手術をしていた病院では平均が280グラム、もう一つ協力してくれた病院では500グラムでした。つまり富士見病院はほぼ正常に近い子宮を取っていたことが分かりました。

子宮を取られて卵巣欠落症に

子宮を取った人は、子宮を写した写真を持って聞き取り調査に来られます。そのときに、「どこに筋腫のコブがあると思いますか」と聞くと、「これです」と指す部分があるのです。子宮を取るときに、子宮鉗子で子宮を前後ではさみ引っ張って摘出するのです。その

ときに丸い痕跡がついて盛り上がる。そこが直径四、五センチのコブ状に見えるわけです。わたしたちはそれが圧痕（あっこん）だとすぐに分かるので、筋腫でないものを筋腫と言われて納得していたことが分かりました。

若くても卵巣を取られるわけですから卵巣欠落症になります。そのため病院では月に一回ホルモン注射をしに通わせていました。これが収入の一環になっていたと思われます。何の症状もなく手術をしたわけですから、手術はしたものの健康状態が非常に悪化して、みなさん、悩まれ、被害者の一人は鉄道自殺をなさったという悲しい出来事もありました。更年期障害症状で健康を損なった方がいたことは事実です。

医療被害の奥にあるもの

医療被害にかかわるうちに、自分のなかで何となく変だと思っていたことがだんだん理解できるようになりました。当時、わたしは手術の助手を勤める立場でしたが、一緒に手術をしていた先生が手術をしながら「あ、こっちの卵巣はもらっておこう」と言うのです。見かけは正常です。その言葉の意味が分からなかったのですが、たぶん年齢からいって「もうすぐ閉経だから卵巣は両方なくてもよいだろう。卵巣がんになるよりはましだから取ってやろう」という配慮であったと今は思います。そのように非常にアバウトな対応で、子宮や卵巣が手術されていたことも事実であったと思います。

男性の価値観に支配された医療

産婦人科医療の根元的な問題

どうして、そんなことが許されるのか、わたしは分からなかったのです。このことをきっかけに女性運動をしている人たちと話をするうちに、産婦人科医療にかかわる根源的な問題が分かってきたのです。産婦人科医療は

対象となる人は女性ですが、女性の立場ではなくて男性の価値観に支配されてつくられてきた医療であることが分かりました。今までわたしのなかに雲のように垂れこめていたものがパーッと取れて、「なるほど。これもこうだったのか。あれもああったのか」と非常にクリアになりました。それはわたしにとって非常に驚きでした。

安易にとられる子宮

なぜ子宮が安易に取られ、だれも非難しなかったかと言うと、子どもを産めない質の悪い子宮、病気になった子宮、子どもを産み終わった子宮は無用の長物である。そういう考え方は男性にとっては「あり」なのです。いらないものは取ってもよいという考えが根本にあり、だから安易に取ることが許されていた。これは女性の象徴的臓器である子宮に対する男性の価値観だとわたしは思いました。

夫の意向で手術を断念した妻

たとえば子宮筋腫で手術が必要な場合に夫と話をすることがあります。本人は出血も多いし、お腹も痛いし、貧血も続いているので手術がしたいと言います。でも夫は「うん」と言ってくれない。夫はわたしに「でもね、先生。女ってさ、子宮を取るとドライフラワーみたいなるでしょう」と。わたしは怒りで殴りかかりそうになりましたが、殴るわけにはいけないので「卵巣を残しておけば、ホルモンは出ます。セックスもちゃんとできるし、しわも出ないし、更年期のようになることはありません」と説明したのです。結局、その人は手術を受けませんでした。手術をしたら女として相手にされないだろうという悲劇を味わう。それを天秤（てんびん）にかけたのだと思います。子宮や女性に対する偏った男性の価値観が支配的にあることがよく分かります。

ホルモン補充療法は男の発想

産婦人科医療では更年期の治療にホルモン補充療法があります。ホルモンを補う考え方は正しいといえは正しいのです。なくなるものを補充するわけですから、当然と言えば当然ですが、別の見方をすれば、いずれ、すべての女性は更年期になるわけで、更年期になればすべての人は卵巣から女性ホルモンが出なくなります。

日本人の平均閉経年齢は50から52歳くらいです。日本人の寿命が世界で一番長く、85か、86歳くらいですが、閉経後はホルモンのない人生を生きることになります。その人生をどう生きるかというときに、男は「ホルモンをずっと出し続けて生きろよ」と言う。これがHRP療法です。ホルモンを出した方が良く、と学者はこぞって言います。肌はつやつや、シワはなく、白髪も少なく、いつも若々しく、セックスにはいつでも応じられるような潤いをもった膣だ。本当にそうでしょうか。

永遠に枯れない花？

女性のなかにも、そのような価値観に左右されている人もいます。アマラント協会といって、ホルモン治療を推進する集まりがあります。アラマントって何かと思ったら「永遠に枯れない花」だそうです。女は枯れてはいけないというのが大名目です。では男はどうか。女性はいつまでも艶やかで、白髪にならず、オッパイも大きいのに、隣にいる男性がよれよれで、白髪で、腰も曲がっているのならバランスが取れないのです。女だけがいつも若々しくあって欲しいという考えがまかり通っている。しかもホルモン補充療法をずっと一生続ける価値観、それが医療という名を借りて行われているのです。

医療にはびこる封建制

中止となったホルモン補充療法

しかし最近、衝撃的な事件が起きたのです。アメリカでHRP療法のための大規模調査が突然中止になりました。なぜかというHRP療法を受けている人は乳がん・卵巣がん・高血圧・狭心症を発病する確率が高いことが統計学的に明らかになったのです。日本も揺れました。でも学者のなかには「いいや。日本人とアメリカ人は違う」とか「身体の違いが違うし、向こうの肥満者は日本人の太り方と違う」などと言っています。しかし当事者である女性が、がんになる心配を抱えつつ肌をとるかと言えば、やはり自分の健康を選んでるので、男が反省する時期に入ったのではないかと思います。

日本で普及しない低用量ピル

みなさん、ピルをご存知ですね。今は低用量ピルの時代になりました。以前、日本では中用量ピルという用量の多いピルを避妊として使っていたことがありました。中用量ピルはホルモン剤も多く、副作用も強いから早く低用量ピルに切り替えるべきだ、低用量ピルなら副作用も少ないし、良いと言われました。それで低用量ピルが解禁されたとき、ピルを導入した人たちは日本もピル先進国になったと喜びました。解禁になりましたが、どういうわけか日本の女性たちはピルを選ばなかったのです。そのためピルは売れず、使用量が少ない状況が続いています。だから躍起になって「ピルは避妊の目的だけでなく、副効用があるからよい」と宣伝しています。

女性だけが責任負うピル

副効用とは何かと言えば生理不順、月経困難症、それから子宮外妊娠や卵巣がんの予防になる。だから使った方がよいと勧める人がいます。しかしわたしは、そこに、男性本位

の考えがあることが否めないと思います。なぜなら避妊を考えたとき、つまり子どもを生まないセックスをするときに、ピルは女性だけが責任を負うという選択肢です。本当に良いことなのかを考えてしまうのです。オランダなどではピルが当たり前になっているらしく、男性が避妊の方法をすっかり忘れているという話も聞きます。つまり方法だけでなく責任も忘れていて。セックスが対等なものであるならば、やはり避妊も対等に責任を負うべきだとわたしは思うのです。これを女性にだけ身体が負担になるピルを使わせ、男は何もしなくてよいと考えるのは一方的です。力ある者が力の弱い者をコントロールして、平気であることが許されていると思います。

ピルの副作用は血栓症

ピルの副作用で一番怖いのは血栓症です。外国では血栓症で死亡する人の数がきちんと報告されています。しかし日本ではピルを飲んで病院に運ばれても救急か外科に運ばれて亡くなるため、ピルを飲んでいたかの調査がされておらず数が明確になっていません。しかしこのことの怖さも知っておくべきだし、避妊とは一体何かということも女性の目で考え直さないといけないと思うのです。

火曜日に集中する日本のお産

日本は少子化で「赤ちゃんをどんどん産め」と国が言っています。「いない赤ちゃんは赤ちゃんポストに入れろ」とまで言うほど大変な騒ぎです。何とかして子どもの数を増やしたいと考えているようです。しかし日本の出産がどうなっているかを見るとびっくりされると思います。日本の出産は非常にコントロールされています。コントロールの形が一番よく表れるのは分娩数の推移です。人工的な操作をしなければ出産の時間や曜日は一定です。ところが病院の分娩統計を見ると火曜日にピークがくるのです。その後、水、金、土、日の順になります。祝日・祭

日、そして盆暮れはぐっと分娩数が減るので。なぜだと思いますか。

赤ちゃんが産まれないクリスマスイブ

かつてイギリスのBBC放送は「クリスマスイブに赤ちゃんが産まれない」と放映して大きな社会問題となりました。なぜイギリスではクリスマスに赤ちゃんが産まれなかったのでしょうか。イギリスの産婦人科医は「クリスマスくらい、家族と一緒に団欒（だんらん）して、教会にも行って」と思ったのでしょう。それで科学の力である陣痛促進剤を上手に使用して、お産をできるだけクリスマスイブに当たらないようにコントロールしたのです。これでかなりの数の分娩数がクリスマスイブではなく、他の日に分散されたのです。それをBBCが放映したのでイギリスでは社会問題となったのです。

火曜日もなぜ午後2時に

そのことを知ったわたしたちは、厚生労働省に行って日本の分娩数をチェックしてみました。なんと1981年くらいから火曜日の午後2時に日本人はたくさん赤ちゃんを産むことが分かったのです。どうして月曜日ではなくて火曜日なのでしょう。人工的に陣痛を起こすために月曜日に入院し、子宮口を開く器械を子宮の入り口に入れ、一晩かけて子宮口を広げて、その後、陣痛をつける。翌日の火曜日は朝から点滴を始めると、午後2時くらいに分娩数がピークになるのです。だから日本人は火曜日の午後2時に一番産まれることになります。これほどまできれいな表になるかと驚くほどきれいな表です。これは一体だれがコントロールしているのか。満月でもなければ満ち潮でもないのです。だれかと言えばわたしたち産婦人科医なのです。

週休二日制のしわ寄せで

なぜ産婦人科医が、そのようなコントロールを産む女性にするのでしょうか。問題に思

って国会質問をした人がいます。そのときに産婦人科医会の回答が出ています。その回答は「週休二日制」だったのです。「日本では週休二日制が当たり前だから、医療従事者も同じ。土日の人が少ないときにお産をして、万が一のことがあれば救えないから、ウィークデーの昼間で人手がたくさんいるときに産みなさい」と言ったのです。納得されますか。納得しないで下さい。産む側から言わせてもらえば、自然な出産がしたいのに土曜や日曜日が予定日の人は、産ませてもらえないことになります。「これは女性にとって人権問題だ」とわたしはカリカリしています。

産みたいときに産めないのは人権問題

本当に人権問題です。つまり産みたいときに産めないようなお産を、週休二日制を理由になぜやるのか。これは産婦人科や医療界がいまだに男性主導だからです。つまり男性の価値観が支配しているから、そのようになってしまうのです。わたしがいる「まつしま病院」ではそのようなことはしません。むやみに陣痛促進はしないことを売りにして、自然な出産を心がけています。しかしこれをやろうとすると問題が起きます。多くの病院では産婦人科医が一番偉くて力を持っている存在です。だから産婦人科医の命令で、助産師や看護師がお産を扱います。もし本当に自然なお産をよいとして行うならば、サポートする側の意識改革が必要なのです。

正常な出産は助産師で

これには医療のなかに根深くはびこっている封建制、専門性が壁になります。男性医師の命令で女性看護師が働くという医療のありようはまずいと思います。しかも助産師は正常な出産は自分で扱えるという資格を国家からもらっているわけですから、正常な出産は助産師がやり、異常なときに医師が手伝うというスタイルでよいと思います。わたしたちの病院では話し合いの結果、正常な出産は助

産師がやり、異常な出産だけわたしたちがお手伝いすることになりました。わたしたちは医療者対利用者、つまり医師対患者関係、そして現場での医師対看護師の関係を变える必要があるのです。

性暴力被害の実態

わたしも知らなかった

力を持っているとか力が強いということは暴力の現場だけでなく、世の中すべてが支配の構造です。小さいときからそのような支配の環境を当たり前と思ってどっぷり浸かっていると、なかなか分からないのです。わたしは富士見産婦人科病院事件に携わって女性が変わらなければならないし、女性の視点で医療も行われなければならないと思いました。お産や子宮筋腫でも自己決定権を大事にするとか、いろいろなことをやって女性の立場で医療を実践してきた自負はあったのです。

しかし暴力の問題があることを知らされて、天地がひっくり返るくらいびっくりしました。というのもわたしは女性医療をそれなりにやってきたと思っていたわけです。だからもっと大変な問題があると知ったときには本当に驚きました。数多くの性暴力被害が女性に加えられていて、そのことが女性の健康被害に大きくつながっていることを、何十年も医療をやってきたわたしが知らないでやってきたという驚きでした。ショックでした。それで勉強をして暴力に対する医療対応を知ろうと決心しました。

カナダから講師招いて勉強会

問題はそれを見る目がないと何も見えないのです。ところが見る目ができると「ああ、あれも見える、これも見える」と問題が分ってきます。病気は、昔から、実はあったのに、それを発見する目がなかったために、あたかもなかったと思ってきたのと同じです。カナ

ダのバンクーバーにある女性センターで働いているセラピストと連絡し、講師に呼んで勉強を始めました。外国から講師を呼んで勉強するのでから病院の職員だけを対象にせず、あちこちに声をかけ120人規模の勉強会になりました。それを四回続けました。「医療での暴力対応が本当にやれるのだろうか」とか「逆に人を傷つけてしまう言葉をかけてしまったらどうしよう」と思ってしまい、なかなか最初の一步が踏み出せなかったのです。しかし、バンクーバーの講師から「まずは一步踏み出すことよ。そうでないといつまでたっても何も出来ません」と言われました。とにかくやってみようと24時間対応の形で始めたのです。心配でした。誰でも間違えることはあるのだから、失礼なことを言ったら「ごめんなさい」と謝ればよいと覚悟を決めてスタートしました。それからもう七年くらいたちます。

多様な性暴力の被害者

わたしは地域の警察にも出向いて「わたしたちの病院は24時間対応で性暴力被害に対応ができますから利用して下さい。うちの病院はほとんどが女医なので女医が対応します」と説明しました。当時の署長は理解のある方で、その後の連携がとてもうまくいっています。性暴力に対応するようになるといういろいろなことが見えてきました。まず年齢がとても若いことです。まだ初潮もない子どもたちが被害に遭っています。もう一つ驚いたことは、一般に強姦は暗い夜道を一人歩きしているときに起こるというイメージがあります。しかし現実には加害者は、普段から見知った人、つまり知り合いの人が多いのです。もちろん親もいるし親類や兄弟もいることが分かり、本当にびっくりしました。

強姦＝処女膜損傷の神話

わたしたちは、警察から連絡を受けて被害に遭った方を診察するのです。そのときに加

害者の証拠採取を本人の許可を得てします。その場合、警察の方は「処女膜は大丈夫ですか」と、しつこく聞いてきます。わたしたちは最初よく分からなくて「だから、どうしたというの」と思いました。セックスの経験がある人が強姦被害にあった場合、処女膜が切れることはありません。七、八歳で、まだ生理がない子どもでも切れないことがあります。わたしたちの頭の中にはなんとなく強姦＝処女膜損傷というイメージがあって、それが警察ではもっと強く、そうした目だけで見ていのではないかと思います。それから医者の中にも「膣の中に精液がなかったから強姦はなかった」と言って、被害にあった人に不信を持たれることもあります。きちんと医療対応する必要性を感じます。わたしたち医療者の仕事は傷があるかどうか全身を調べ、傷があれば治療します。また性感染症にかかっている可能性がないか、望まない妊娠の可能性がないかどうかを調べ、必要と判断すれば緊急避妊用のピルや抗生物質を処方します。

性被害は「魂の殺人」

このような傷は治りますが、それだけでは終わらないのが、こころに受けた傷です。被害を受けた後、ずっと、こころの傷を背負って生きていく。性被害は「魂の殺人」と呼ばれています。人生がそのときからまったく違ったものになってしまうのです。ある被害者は妊娠反応が陽性に出て半狂乱になりました。結果的に中絶の手術はしたのですが、自分の身体の中に妊娠したという痕跡を頭から取り払うことができません。刃物で自分の性器を切るという自傷行為を起こしてしまいました。結局、社会生活ができず仕事も辞めてしまいました。わたしたちは性被害の後、社会生活ができなくなってしまう人に会う度にこころを痛めています。そういう被害者がたくさんいるのです。

安全な場所はどこにもない

調査によると強姦被害に遭った人はかなりの数に上ることが分かっています。非常に若い人たちが性的な被害に遭っています。性的な被害に遭った人は男性に対して非常に不信感を持つとか、人が信じられないとか、加害をする人が家族の一員だった場合、安全な場所がどこにもなくなるわけです。そういう意味で、女性はどこにいても性的被害に遭う危険性があります。知っている人との間でも、職場でも、学校でも、家庭でも起こる。女性にとって安全な場所はどこなのかという状況です。これは重大問題です。

なかったことにしてきた社会の歴史

ある病気が20%あるなら、公衆衛生学的にはものすごい数です。国として緊急に対策をたてなければなりません。10%でも5%でも公衆衛生学上はとても問題です。でも性暴力被害、DVの頻度が、たとえば20%と日常的に連続して起きていても、社会はまったく関心を持ってこなかったのです。あつてはならないことをなかったことにしてきた歴史があると思います。これがまず問題なのです。医療従事者も社会人の一人ですから、自分の頭の中にある偏見を一掃することから始めないとなりません。暴力に対する医療的な対応ができたと言ってもは困るのです。やるのなら覚悟が必要だと思います。わたしも社会の一員として根絶させるために覚悟が必要です。つまり現実をきちんと見た上で、自分たちができることは何かを考えなくてはいけないと思うのです。

はびこる性暴力の神話

今でもこの社会は「女はこうあらねばならない。男はこうあらねばならない」という考えがまだまだ支配的だと思います。性暴力についても、もっともらしい口調で「性暴力の神話（いわゆる強姦神話）」が語られています。

たとえば被害に遭った人に「お尻の見えるようなミニスカートで、アクセサリーもジャラジャラ着けて、男を挑発するから被害にあっても当然」と言う人がいます。それから「夜中に暗い所を一人で歩くからレイプされても仕方ない」とか。人によっては「自業自得よ」などとすごい言葉をかける人もいます。このような意識はわたしたちのなかにずっとあったと思います。性犯罪は、特殊な人、つまり性欲が我慢できないとか、精神的におかしい人が加害者になるとか、まことしやかに言われてきました。しかし調査・研究により、学歴や社会的な地位・職業・住んでいる所などは何も関係ないことが証明されています。また女の人には「強姦願望」があると言われてしています。「嫌よ、嫌よもいいのうち」などと言われてきました。しかしそうではないのです。

「本当に嫌なら逃げればよかったのに」

被害に遭った人が、裁判のなかで「本当に嫌なら逃げればよかったではないか。最後まで抵抗すればよかったではないか」とよく言われます。しかし、もしかしたら自分が殺されるかもしれないという大きな危険のなかで性行為を受け入れることで、殺されないですむことがあり得るのです。ですからそんなに簡単に決めつけられないのです。それから「女はウソつくこともある」と言われます。女は確かにウソをつく人もいるかもしれないけれど、性暴力の被害ではウソをつくような重大な背景があるに違いないのです。当事者の言い分をじっくり聞き、尊重しないとイケないです。

見えてきたDV被害の実態

レイプ被害に対応するうちに、当然のことながらDV被害が見えてきました。DV被害の方がもっと数が多いと分かりました。そしてレイプ被害だけでなく、DV被害もきちんと対応しなければいけないと思いました。D

Vは家庭内で起こるために外からは見えにくいのです。良い時もあるので、よけいに分かりにくいのです。女性が暴力被害を受け続けると、だんだん力を失って逃げ出すこともできなくなります。良い時にまたやり直せると期待しているのです。だれかが介入に入っても「実はこの人は良い人なのです。お酒さえ飲まなければ」と言い、被害の実態は当事者にも見えていないことがあるのです。

産婦人科はDV被害発見の場

定期的に妊婦健診

産婦人科医療はDV発見のよい場になるとわたしは思っています。というのは妊娠すると定期的な妊婦検診があります。一回だけでなくお産するまで十ヶ月ずっと通います。長いお付き合いのなかで信頼関係が築けると、本当のことを話してくださるチャンスが他の科よりも多いのです。それから性器の診察やお腹を出して診察するので、暴力によってできた傷やあざを発見しやすく早期発見につながります。

問診表でスクリーニング

欧米などでは病院に来たすべての女性にスクリーニングが行われています。性的被害やDV被害があるかどうかの問診をするのです。これにより早期発見ができます。わたしたちの病院でも「あなたには、このようなことはないですか」と表題のついた用紙を使って問診をしています。「殴られる」とか「携帯電話をチェックされる」・「だれのお陰で食わせてもらっているのかと言われる」・「親類の悪口と言われる」・「避妊に協力しない」などの項目に印をつけていただきます。外来に来られる3%から5%の人はどこかに○が付きまします。これは申告して下さった方だけで、今はそのようなことを言えないと思っている方もたくさんいるわけですから、被害に遭われて

いる方はもっとたくさんいると思います。問診表の「刃物で脅かされる」という項目に○が付いていれば、危機感が迫っているわけですから、お話をうかがって安全が確保できているか、逃げる場所が用意できているかなどを確認します。わたしたちがお手伝いできる範囲であれば相談にのり、危険が迫っているならば他の機関につなげるということをしています。

怖い次世代への連鎖

DV被害を受けている方に対して心配していることがもう一つあります。これは次世代への連鎖と言われていることについてです。DV被害を見て育つ子どもは大きなトラウマを受けるし、成長したときに同じような加害的な行為にはしりやすいという統計があります。連鎖は怖いと思います。どこかで食い止めなければなりません。みんなが発見の目を持つことが大切ですし、どこにつなげればよいかを知っておく必要があるのです。DV防止法がありますが、まだまだ不完全で、これがあるからといって被害を受けた女性が100%守られることはありません。医療機関もその人を回復まで見ていくことは不可能なわけですから、みんなで協力してその人の回復につなげ、できれば予防をしなければなりません。

「わたし、監視されているのです」

わたしたちの病院の妊娠中の健診に、いつも女性に付き添って来る男性がいました。その当時、わたしたちはDV被害のことはよく知らなかったので、その男性をととても協力的で理解のある夫と思っていました。出産準備クラスにも出席していました。「真っ昼間のクラスに職場を休んで来られるのかな」などと言いながらも、その男性に対するわたしたちの評価は良かったのです。ところがその男性がトイレに立ったすきに、女性が「わたし、監視されているのです」と訴えてきたのです。

そこからDVが発覚しました。非常に危険な状態だったのですが、夫はお産にも立ち寄って無事に出産を終えました。夫の様子を見てみると良い人のように見えるので、「そんなに悪い人では、ないのではないの」という印象を持ってしまうのです。しかしその男性は子どもが産まれた後も暴力を振るい続けました。結果的にその女性は実家の秋田にまで逃げ、最終的に離婚をしたのです。

わたしたちは「こんなに面倒見がよく優しくそれで理解のある男性で、お産にまで立ち合うのにDVの加害者なのか」と初めは驚きました。しかし加害者パターンからいって大いにあり得ることなのです。最近診察室に入るドアの前に「まずは、ご本人のみお入り下さい」という張り紙をしています。なぜかと言えば、DV夫はドストカーのようにびったりと付いて診察室まで入ってきてしまうからです。ご本人が安心して言いたいことが言えないとDVの発見につながらないので、そんな形でいったん別れる場をつくっているわけです。

病院のトイレにも問診表

わたしたちの病院でのもう一つの工夫は、トイレに問診表と鉛筆を置いていることです。すると本人は自覚していない場合でも、紙を見て当事者かもしれないと気付くことができます。名前を書かずに受付に問診表を置いて行く人もいます。見ると被害の項目にたくさん〇がついていることもあります。今は言えなくても「いつかは、ここに駆け込もう」と思っているかもしれません。このようにDVを自覚できるチャンスをつくるようにしています。また妊娠中にお腹を蹴られて受診した場合に切迫早産という診断で、しばらくの間入院していただくことは可能です。病院がシェルターの役割を果たすわけです。しかしお子さんが産まれた後の問題は山のように残っているわけです。医療だけではどうしてもなくて、他の社会資源も利用していただいて、

みんなが周りでサポートすることが大切になります。そういう意味で社会すべての責任だと言っても言い過ぎではないと思います。

病院通いが多いDV被害者

DVでどのような健康被害が起きるかは、いろいろな調査があります。一つはWHOが世界13カ国を使って調査した集計です。日本では横浜市で調査が行われました。病院を利用する人を調べてみると、DVの被害者は被害を受けていない人よりも多いのです。体調不良がいつもあることが一つの証明になると思います。それから入院する人も暴力を受けている人の方が、を受けていない人よりも多くなっています。被害にあつてうつ状態やパニック状態、そして不眠症になる人も多くいます。精神安定剤と睡眠薬を使用している人もDV被害を受けている人に多くみられます。

サバイバーという言葉のもつ意味

「自殺を考えたことがある」と「自殺を試みたことがある」という人も、DV被害者に多いです。やはり「自分の人生は何一つ幸せなことがない」と思うし、「生きていても仕方がない」と考えがちです。DVはこころの深い所に傷をつけて、そのため死につながる行為を選ぶこともあるわけです。DV被害から回復しつつある人や、回復した人をサバイバーと世間では呼んでいます。サバイバーという言葉はサバイブできなかった人が陰にたくさん存在することを意味しています。セラピストが涙を流しながらサバイバーという言葉の持つ意味を説明してくれたとき、サバイバーの持つ深い意味が分かり、胸は熱くなりました。DV被害に遭ったときに本当に頑張ってサバイブできた人は力もあったし、幸運だったし、よい支援を受けることができた人だと思います。しかしその陰には自ら死を選んだ人もたくさんいます。この問題の深刻さを考えざるをえません。

重視されるスピリチュアルな健康

わたしは産婦人科の医師ですから、女性の健康を考える臨床の現場にいるわけです。医療のなかで女性の健康をどうとらえていけばよいのか少し触れてみたいと思います。

WHOの健康の定義は最近少し変わりました。昔、保健体育で習ったころは、健康とは身体的にも精神的にも健全な状態であって、単に病気ではない状態を言うわけではないと定義されていました。最近は身体的精神的な健康の他にスピリチュアル、つまり霊的な健康を入れているのです。意欲があるとか、こころが病んでいないことが大切だと認識されてきました。東洋医学で言えば良い「気」がめぐっているということなのでしょう。このようなことも健康のなかに取り入れられてきています。

二つのホルモンがあるのが女性

上岡さんのお話にもあったように、女性はホルモンに大きく支配されて健康があるのです。女性には二つのホルモンが分泌されています。男性は一つしかホルモンがないのです。二つあるということは、二つのホルモンはリズムを持って出ていて、周期的な変化をしながら身体に作用しているからです。ホルモン支配は自律神経のなかで行われていることなので、自律神経の機能と密接な関係を持っています。ですからホルモンが狂うと自律神経も狂い、自律神経が狂うとホルモンに関係した病気が起きてくるのです。

夜中に増える性腺刺激ホルモン

今の若い人たちは月経不順や無月経の人がたくさんいます。話を聞いてみると多くの人が「生活のリズムがおかしい」と答えます。夜中に電気をつけっぱなしにし、薄着で身体も冷え、飲むものもコンビニの冷たいジュースやアイスクリームです。そして美容のために果物しか食べないような人が結構います。これではホルモンが正常に働かず「生理がな

い」ということになります。

これは親の問題でもあると思います。「食事は三食きちんと食べなさい」とか、「冷えないような服装をしなさい」「夜中にまで起きているな」と注意しなければいけないです。性腺刺激ホルモンの分泌はサーカディアンリズムと言って昼と夜のリズムがあります。夜中に性腺刺激ホルモンは増えます。ですから夜中に起きていると性腺刺激ホルモンが乱れてしまいます。これが月経不順の原因になります。生活のパターンを直すだけで治る人はたくさんいます。女性の健康はホルモンの変化と大きく関係しています。

ホルモン変動に影響するもう一つの原因はストレスです。「わたし、ストレスあります」と言う人はたくさんいます。もちろん人間は生きている限り、ストレスのない状態はありません。ただストレスが度を越えてひどいと自律神経やホルモン系に異常をきたし月経が狂います。わたしたちは月経がないという人に出会ったとき、もしかしたらDVがあるかもしれないと考えます。このようなことでもこれがDVの発見につながることもあります。

ダイオキシンが子宮内膜症

他にも健康を損なう原因はたくさんあります。たとえば、今「子宮内膜症」が増えています。原因としてダイオキシンが挙げられています。つまり地球環境が悪くなったことが、女性の生殖機能に影響する病気につながってきたのです。湖のワニが女性化したのと同じような状況が起きていると思うと恐ろしくなります。

もうすぐ来る女医時代

「女性科」や「女性診療科」が

これまでの産婦人科医療は、男性主導型の価値観と封建的な医療のなかで培われてきました。しかし今は20代の産婦人科医師の70%

が女医になったそうです。女医到来時代ももうすぐなのです。これがよいか悪いかはまた別問題ですが、最近は産婦人科というネーミングをやめて「女性科」とか「女性診療科」と標榜している病院も多くなりました。これはジェンダーに配慮した医療を行うということです。ジェンダーに配慮した医療とは女医が女を診るというだけではないのです。女性の視点、つまり女性の立場に立って女性を診ることが大切です。たとえば子宮筋腫と診断されたから手術をするのではなく、その人がどう考えているか、どのような価値観を持っているかなどを十分に配慮して、一人ひとりに対応する医療を行わないと真の女性医療とは言えないのです。

改善されつつある病院の密室性

ジェンダーの壁は大きく、産婦人科は男性が多かっただけに封建的でした。まさに封建的な医療をしていました。昔は一般の人が分娩室に入ることはとんでもないことでした。しかし今は家族も子どもも、お連れ合いも分娩室に入って出産をする時代になりました。密室性は改善しつつあります。手術をビデオ・カメラで同時中継して外に流している病院すら出現しています。

まだまだの「ジェンダー医療」の視点

医者は難しくて分からない言葉を使って話をしています。質問をすると「お前なんか素人なのだから知ろうとしなくてよい」などという時代がありました。最近はそんな医者は減ってはきていると思います。インフォームド・コンセントも十分な説明をした上で、同意を得る風潮は芽生えてきていると思います。ただ女性の視点が欠けているところは、なきにしもあらず。ジェンダーを意識した医療を行っている病院はそれほど多くないのです。

当事者が力を取り戻せる支援を

産む、産まないという決定はとても難しい

問題です。特にDVがあって妊娠した場合、ここで中絶したいと思っても、夫が支配的なために決定できないという問題もあります。これも当事者の言い分をよく聞いて必要な支援を考えなければなりません。レイプ被害でも非常に傷つく根源は、自分がまったくコントロールの効かない状況に置かれ、力づくで支配された経験なのです。ですから医療のなかでも、力の強い医師が「自分の言うことを聞きなさい」と命じ、また夫が「お前こうしろよ」と言うのではなく、当事者が決めることをサポートできなければ、本当の意味での医療ができたとは言えないのです。

被害は通常のことではありませんが、被害を受けた人は普通の人です。その人が持っている力を再び取り戻せるよう支援をすることが一番大事な支援の仕方だ、ということを忘れてはいけないと思います。

男女間の不平等な関係が問題

国連は「女性に対する暴力の撤廃に関する宣言」の中で次のように言っています。

「女性に対する暴力は男性が女性を支配および差別し、女性の完全な発展を妨げる結果となった男女間の不平等な力関係を歴史的に明らかに示すものであること、および女性が男性に比べ従属的地位に置かれることを余儀なくさせる重大な社会構造の一つであることを承認する」と書かれています。わたしはこれが原点だと思っています。わたしたちは今、いろいろなことに気が付いて努力をしているわけです。しかし歴史は長く、世界中で同じことが起きていたことをまず認めないといけません。特に男性が認めてくれないといけません。つまり男性の一人ひとりはいい人であっても、男性中心の社会になってきたという経緯のなかで、このような関係性が生まれてきていると認めてくれないとだめだと思うのです。

対等な関係のなかで

医療そのものの在り方も、対等な関係のなかでされるよう努力しないとはいけません。その意味では被害を受けた人にとって、よい医療とはすべての人にとってよい医療です。わたしは臨床の場において、そのことを毎日かみしめています。被害者支援という特別な医療があるわけではないのです。普段、わたしたちがやっている医療行為のなかで、相手の人

との対等な関係とか、話を尊敬の念を持って聞くとか、その人の言い分に配慮し、意思を尊重することの集積が結果的に良い医療につながっていきます。それは被害に遭った人に特殊な医療がなされることではないので、この部分が正しく理解され実行されれば、風通しのよい信頼される医療界になるのではないかといつも思っています。

佐々木静子（ささき・しずこ 医療法人向日葵まつしま病院院長。NPO 女性の安全と健康のための支援教育センター理事。小松川警察犯罪被害支援ネットワーク会長）

1965年東京女子医大卒。賛育会病院産婦人科局に入局。1980年に当時は新しいエコー検査を売りにした埼玉県所沢市の富士見産婦人科病院で、千人を超える女性患者が必要ない手術で子宮や卵巣を摘出された事件が起きた。被害女性の裁判支援にかかわるうちに、男性医師主導の産婦人科医療のありかたに疑問を抱く。1991年に東京・江戸川区に「子宮と地球にやさしい」医療を実践する「まつしま病院」を開設。職員の大半が女性。20人を超える女性医師のなかには80歳を超える“円熟医師”がいるなどユニークな医療に取り組んでいる。性被害に遭った女性に対するケアでも実績を積んでいる。著書に『おんなのからだと健康の本』（はまの出版刊）など。医療活動の実績を踏まえて設立された「NPO 女性の安全と健康のための支援センター」のウェブサイトは <http://shienkyo.com/>

パネルディスカッション

被害者にとって必要な支援とは何か

司会 松本和子 (NPO 法人女性ネット Saya-Saya 共同代表)
パネリスト 中島幸子・カズエ・上岡陽江・佐々木静子

司会

司会の松本和子です。DV等暴力被害女性支援団体の「女性ネット Saya-Saya」の共同代表をしています。カリタスジャパン援助活動推進部会の委員です。

貴重な体験に基づくお話を聞いて、皆さんはこころの中でいろいろと思いめぐらされていると思います。ただ「良い話を聞いた」で済ませるのではなく、自分の問題として教会に持ち帰って、こうしたさまざまな虐待問題について「どのようにしていったらよいか」を問いかける場をつくり、広げていただければと思います。参加者の紹介をします。

困ったときにいろいろ知恵を寄せ集めるネットワークをつくっておかなければ、サポートはできないことが多いです。Saya-Sayaにも就労支援としてダルクの女性たちが来てくださり、そのなかに暴力被害の女性も大勢いましたね。上岡さんです。

膜症や子宮がんになったりする人が非常に多い。佐々木先生の問診で暴力被害が分かって、よく調べてみたらダルク女性ハウスのメンバーだったりするんです。

カズエちゃんのところとも連携しています。メンバーに子どもの虐待問題があったので、カズエちゃんに電話して「母親のグループはどこでやっているの」って相談できるんです。逆にこの間は夜にカズエちゃんから「すんごい人が来た。もう一度来たらどうしよう」って電話がきて、「そういう人は二度と来ないから大丈夫」と励ましたり。女性のケアは連携・ネットワークがとても大切で、暴力を受けた女性のケアには、身体の問題から精神的な問題、生活の問題まで全部含まれていて、すべての面でそれぞれサポートが必要なんです。そこが分からないとDV・虐待・性暴力被害のサポートはできません。

司会

本当にそうですね。

ケアには連携が大切

身体から精神までのサポート必要

上岡

佐々木先生の病院に診察のお願いに行ったことがあるんです。「ダルク女性ハウス」のメンバーには、子宮内膜症とか婦人科系の病が多い。佐々木先生に「こういう人です」と手紙を書いてお願いすると、危ない状況だと分かったうえで診ていただくという連携があります。刑務所にいる女性の約半数が、拘禁症状で生理が止まっちゃう。それでホルモンバランスが崩れて、出所後、子宮内

大切なのは志と心意気

上岡

松本さんからの電話は盆暮れ、正月に多くて、しかも恐ろしい。そんなときの電話は危ないから、みんな避けるでしょ。この間はお盆の8月15日に栃木の実家に帰るため特急電車に乗って席に座ろうとしたとたん、携帯が鳴ったの。「やばい。Saya-Sayaの松本だ」。切ろうかどうしようか。でも、どこもやってないから、わたしにかけてきたんだなあ。しょうがないと覚悟して電話に出ました。

「もしもし」「陽江ちゃん、ダルク女性ハウスに住民票を移したいっていう人があるんだけど」「うん分かった。じゃあ月曜日に」「月曜日じゃだめ、今日の5時まで」「えっ、今日の5時」。これ、2時半の電話ですよ。わたしは帰省の電車に乗っているというのに「女性ハウスの住所、今、すぐ言って」と、せかすんです。こういうときに、すごく大切だと思っているのは志と心意気です。これはもう心意気だと思って「分かった、いいよ」と引き受けたんです。ひどいでしょう、もう。

司会

あのときは本当に助かりました。

みんなが協力し合って

上岡

わずか三分で判断しなきゃならない。今すぐ決めろと言われたら「うん」って言わざるを得ないですよ。その後、病院を見つけて入れるとか、婦人相談窓口につなげるとか、すごく短時間のうちに判断しなくちゃならない。もう心意気です。松本さんにはそのへん押さえられたうえ、わたしの動向を知られている。怖い、松本さんの電話。(笑)でも現実には松本さんみたいな方が盆暮れ、正月関係なしに動いていて、佐々木先生のところみたいに24時間対応している病院がある。わたしたちダルク女性ハウスの仲間も、そういうふうを守っていただいているから、わたしも協力しよう、みんなで協力し合っていると思っています。

サポートする側もネットワーク

上岡

カズエちゃんとわたしは当事者であり、同じ問題を抱えた仲間のサポートを仕事にしています。そうした人たちで「豆ネット」というネットワークをつくって勉強会をしてい

ます。自分たちをサポートしていないと、自分たちがもう一回傷ついてしまう。話を聞くことだけで本当に疲れる。ずっと消耗するんです。そのままでは燃え尽きてしまうから、ケアする側のわたしたちもすごく健康に気をつけなくちゃいけないし、本当に大変なことだから絶対ひとりで抱えちゃだめ。そのため当事者同士でサポートし合うネットワークが必要だったのです。

歴史的な幕が開いた

司会

そうね、お互いにセルフケアをしていますね。食べたりして。佐々木先生は、子どもをおろすかどうかで心配している女性たちを紹介すると、「受け止めてもらえてよかった」って帰って来るので助かっています。

幸(さち)さんは、わたしがアディクション畑でソーシャルワーカーとして支援に携わってきて、アディクションの枠組みだけで暴力を処理できなくなったときに、アメリカで暴力の問題を勉強してこられた幸さんと出会い、暴力のメカニズムを明快に解説、分析してもらい元気をもらった人です。日本社会、特に教会では、こういった暴力の問題は理解されにくい、難しいと実感しています。

カズエさんと知り合ったとき、わたしはまだシスターでしたが、こういった問題について当時は教会の外でしか語れなかったのです。今回のセミナーで、やっと教会にも歴史的な幕が開いたと感じています。これからも教会で暴力、虐待問題をオープンに語っていきたいと思っています。

二次被害にならない支援を

教会に多い二次被害

司会

内閣府の統計では女性の三人に一人が

暴力被害にあっている、教会でも同じだと思っています。カズエさんと幸さんの話にもありましたが、教会では敷居が高くてとても語れない。そんな教会ではなく、隠さずにオープンに自分を語れるような場にしていきたい。そして語られたとき、わたしたちがきちんと受け止められるかという、残念ながらそうではありません。語ることで逆に傷ついてしまう二次被害が多くなっています。どういったら二次被害にならない支援ができるのかを、この短い時間で考えていきたいと思っています。

幸さん、どんな二次被害を受けて、どういう点が嫌だったか、教会の価値観のために大変だったことなど、ざっくばらんに語っていただければと思います。教会では、なんとかしてあげたいと思う心根の人は多いと思う。だけどその気持ちが相手にとって侵入になったり、お説教になったりしやすい関係にあるかなと思います。

わたしが負担に感じたこと

中島

二次被害はおそらく世の中にたくさんあると思います。あり過ぎて。教会で思い浮かぶのは、わたしが通っていたカトリックの小学校で学んだことの一つが「かわいそうな人たちのために何かしてあげましょう」ということでした。その発想自体は悪くはない。ところが大人になって、わたしがその「かわいそうな人」と見なされたとき、「かわいそうな人に何かをしてあげましょう」と思われるのは、わたしは負担に感じました。そこで初めてその発想をどう変えられるのかと考えたのです。もちろん人のために何かする、人に配慮するという思いはそのままにして、「自分とは別の世界の人」とか「不幸な人たち」という見方ではなく、お互いサポートし合える方法がないのかなと考えています。

「あの人、エンガチャーだよ」

中島

「レジリエンス」の活動をしていると、ちょっとしたユーモアとか工夫をしないと気分が重くなることもあるので、「わたしとは別の人」という接し方をする人を「エンガチャー」と呼んだりします。「エンガチャ」をする人という意味で、「エンガチャ」って、子どもたちが「汚いやつあっち行け」という遊び方をするじゃないですか、縁を切ると似たような感覚を感じるのです。「あなたたち、かわいそうな人」という目線で話される人に出会うと、「アッ、あの人エンガチャーだよ」って互いに伝え合ったりすることがあります。

一緒に活動しているさつきさんは、幼い子ども二人を連れてDVが原因で夫のもとを離れていました。彼女の話で、すごく分りやすい例だと思うのは、ある日、彼女は子ども二人を連れて遊園地に行く途中で出会った人に、「どちらに行かれるんですか」と聞かれて、「これから遊園地に行くんです」と答えたら、「まあ大変ですね」と言われた。なぜ母子家庭だと「大変ですね」になるのか。それがエンガチャーの発言だと思うんです。もし夫婦連れで子どもと遊園地にいたら、「まあ大変ですね」にはならないでしょう。日常生活で悪気がなく発言しているかもしれませんが、そう言われた人の気持ち、自分がその人の立場だったらどう感じるかを考えながら、一つひとつの言葉に気をつけることが大切です。

尊重に欠けるセリフ

中島

今日お見せしなかったスライドで「尊重に欠けている会話」というのがあります。それには「普通こうでしょう」とか「これ当たり前でしょう」「こんなの常識じゃん。何で分からないの」という日常生活で誰もが聞

くセリフが含まれています。でも尊重が欠けているというのは、わたしにとっての普通は他の人にとっては普通でなかったり、わたしにとっての常識が日本を一步出たら常識ではなく、逆になっていたりするからです。だから「そんなの当たり前じゃん」とか「みんなそうしてるよ」と言いたくなる時、一歩立ち止まって「その言葉が本当に適しているのか」「尊重して伝えているのか」を考える。そして二次被害を避けるためには、傷ついている人に「どうして」とか「なぜ」という言葉は極力使わないほうがよいと思います。悪い言葉ではないのですが、責められていると感じやすい言葉だと思います。だれも望んで被害に遭ったわけではないのに、「どうしてそんな人と結婚しちゃったの」とか「どうしてそんなところにずっといたの」と言われるのは本当にきついです。相談されるときには「どうして」「なぜ」という言葉を使わないようにするだけでも、二次被害は減るかと思います。

司会

ありがとうございました。カズエさん、お願いします。

援助者に心がけてほしいこと

相手の代わりに解決しない

カズエ

中島さんと違うことを言わなきゃいけないですね。中島さんのお話は、ここで拍手するくらいピンポーンだったんです。わたしが講演で話したことの繰り返しになりますが、援助する側は、援助者として何かしたい、何かしないと援助者としてだめだという思いや、また神様の目からみて、いい人でありたいという思いがあるかもしれないですね。援助者の思いで何かをすることがとても多いと思うんです。だからそんな態度をとっていな

いかどうか、わたしはいつもここに留めていたいと思います。援助者の思いですというのは、たとえば連絡帳に「子どもをたたいたいちゃうんです」って書いたら「そういうことってありますね」と、そう書いた相手の気持ちに思いをはせる代わりに勝手に結論めいた返事を返すことです。さっき見せていただいたすてきな絵本に、「あなたは悪くない、暴力はあなたのせいじゃない」と書いてあったのですが、実はわたし、この言葉にすごく傷ついたことがあるんです。

「あなたは悪くないのよ」に傷つく

カズエ

それは仲間ではなくカウンセラーに初めて自分の過去にあった性被害のことを、ただ物語として感情とつながらないまま、人の話のようにしゃべったときでした。たぶんカウンセラーはわたしの話にショックを受け、被害者に対してはこう伝えたほうがいい、伝えなくてはならないと本には書いてありますから、そうしなければならなかったのだでしょう。「あなたは悪いんじゃないのよ」と言ったんです。けれどわたしにとっては突然ころの中にもガーンと踏み込まれて、わたしを感じていた十歳当時の罪悪感にいきなり触れられて、「あなたは悪くないのよ」というのが「あなたが悪い」って言われた気がした。そのときにはまだ、自分の罪悪感に私は気付いていなかったんです。

ゆっくり進む回復のプロセス

カズエ

実は今日もロングスカートはいていますが、ロングスカートをはけるまでに何年もかかっています。というのは「そんな短いスカートはいていちゃいけない」と言われていたので、被害にあったときにロングスカートをはいていたんです。わたしがカウンセリン

グを受けたり書いたりして、あのときの加害者が何を感じていたのかを推測できるまでにものすごく時間がかかっている。そのプロセスは本当にゆっくりした時間で、自分が安全だと思える環境のなかでゆっくりゆっくり進んでいくので、その途中で第三者がいきなりポンと答えを出しちゃいけないと思います。その後わたしがカウンセラーになる勉強をしていて、あのときは良い体験をさせてもらったなと思います。要するにわたしは、いまだに医者とかカウンセラーとかセラピストを信頼できなくて。わたしにとっては仲間たちが一番安心できる、わたしのための癒しというか、回復ためのパートナーなんです。仲間たちとの間では「批判しない・評価しない・アドバイスしない」の約束事があるからいいけれど、そうでない人からの「大変でしたね」という言葉は評価というか、結局「わたしとは違う人」と切り離されている感じがするんです。大変かどうかは自分しか分からないんです。

「簡単じゃねえーよ」

カズエ テレビの公共広告機構（ＡＣ）で、虐待を扱っているコマーシャルがあります。「目の前にいる子どもを抱きしめることから始めよう。それは誰にでもできる簡単なこと」というＣＭが流れてきて、母親がオズオズと子どもに向かって手を差し出すのです。それを見ながらわたし、思わず「簡単じゃねえーよ」って口走ってしまふ。子どもを抱きしめることができたなら苦労しない、というか仲間たちはそれでとても悩んでいます。自分の子どもを抱きしめることができないのは、子どもに自分の姿を投影していくと、まず自分を大事にできていない、かわいく思えない、愛せない、大切にされていない。その人間が子どもを抱きしめても、それは形だけです。目の前の子どもが自分のＤＶ被害の相手の遺伝子の血を引いた子だとしたら、ちょっ

と顔を見るだけでもつらい。だから、「抱きしめてみよう」というアドバイスだと思えますが、アドバイスが相手にとって侵入になったり、暴力になったりするケースは、本当にそこらじゅうにあると思います。

どうしてほしいかを聞くのが一番

カズエ じゃあどうしたらいいのか。どうして欲しいかを本人に聞くのが一番いいの。暴力とか虐待とか何か問題が発生しているとき、「良くしていこう」「解決していこう」と援助者が考えても何もできない。そんなときに手伝いが必要なこともたくさんあるし、何かの課題に対してパートナーとして対等な立場で考えてもらえたら、つまり、この人はこの人、本人は本人の立場で、この課題に取り組むためのパートナーのような関係でみてもらったら、わたしは安心だなと思います。

司会 本人に聞くって大切なことですね。解決するのは本人自身だっていうことです。カウンセラーの遠藤優子さんから流れてきたメッセージであったと思うんですが、本人が解決する、それを聞く耳があるかどうかというところですよ。じゃあ陽江さん。

立場の微妙な違いが大切

上岡 今、カズエちゃんの話聞いていて、わたし、カズエちゃんに「大変だったね」って、いつも言ってると思って（笑）。それは大丈夫なの。

カズエ 陽江さんは、わたしの存在を認めているからいいの。「あなたは大変だったけど、僕は大変じゃない」って聞こえないの。

上岡

ああそうか。わたし「大変だったね」って言って何十人も泣かしてきたかも（笑）。たとえば、わたしは薬物・アルコール依存の本人だけど、暴力の被害にはあってない。だけど、ものすごい暴力被害を受けてきた仲間の話を、わたしは共感をもって聞ける部分がある。それって何だろう。わたしは危ない目にもあっていないし。あっ、危ない目にあっているけれど酔っていて分からないのよ（大爆笑）。アルコールと薬物を両方使って意識なくなるの。それで目覚めると首を打っていたり体じゅうにアザがあったり、泥酔して動けない状態で、お風呂で裸で倒れていたりしたんだけど。こういうふうにもみんなと知り合いで仕事も一緒にやったりしているけれど、微妙に立場が違うんですね。それがすごく大切だと思っています。

入れ替わる加害者と被害者

上岡

わたしのところでは「依存症のなかで出合ってきた暴力」という立場でやっています。でもわたしのところに被害者として来た人が、違う立場からは加害者だったりする。被害者としてわたしの前に登場してきた女性の若いメンバーが、わたしの目の前で十年かけて、今度は虐待の加害者になるというのを見ちゃうわけです。そうすると被害と加害が分けきれない。たとえばうちのメンバーがアルコールや薬物もやめて安定してきたら、今度はその子どもに問題が出てくるわけね。母親が落ち着いてくると子どもが学校へ行かなくなったり非行化したり、そして子どもが母親を殴ったりしてね、目の前で被害と加害のスイッチが切り替わるように変わっていくのを見て、わたしだけでは受け止めきれなくなる。そういうときに松本さんやカズエちゃんや、わたしとネットワークしている人たちが、それぞれの立場から協力してくれる

ことが非常にありがたいと思っています。だけど本当に会おうのって嫌なんだよね。痛くって、人の話、聴きたくないの。

カズエ

そうだね。わたしも。

ダルク女性ハウスに集まる人たち

相談には二つのタイプ

上岡

正直言って暴力の話を聴き続けるのって、とっても大変なのよ。ダルク女性ハウスに相談に来る人たちは二つのタイプに分かれるの。ひとつは家族が相談に来られる人たち。そういう方は家族とお会いして、どういうふうにしていくか決めていく。本人を入院させるかどうかとか、あるいは本人にどういうふうの問題に気付いてもらうかを方向づけていく。家族と一緒にいかかっていくやり方ができる人たち。もう一つは、今お話しているような大変な人たち。もうサポートしてくれる家族がいなくなって、ホームレスになっていたり、刑務所に何回も行っていたり、本当に行き場がなくて、ホームレスの施設に入ってもいながら、リストカットしながら、覚せい剤を使いながら、強迫症状の手洗いをしているような人もいるわけですよ。

怒りとともに語る仲間の痛み

上岡

わたしね、こういう大変な人に18年間会い続けてきたの。こういう人たちをプログラムに乗せるのは本当に大変なのね。だから一度会っただけでそれきり会わない人が何百人っている。でも一度しか会わない、一度しか聞いていないのに、聞いた話は、こころのなかにすり傷のように残っていくの。何か語ろうとするとわたしのなかに出てきて、深い

傷のなか、怒りとともにじゃないと語れない時期が長かった。だからダルク女性ハウスをやってきた18年間で、ほぼ16年間は怒り狂っていましたね。怒りとともにじゃないと、仲間の受けてきた痛みって語れなくなっちゃう。何でこんなに怒りながら話しているのか、本人も「アレ」って思っていたりして（笑）。

自分の問題として聞いてしまう

上岡 そんなふうに話を聞くだけですごく傷ついて、それを誰かに話すとなると怒りとともにしか語れない。わたしの毎日が怒りに嗜癖（しへき）しては良くないと思って、この二年ぐらいで随分変えたんだけど。カズエちゃんは「陽江さんはちゃんと聞いてくれるから大丈夫」って言ったけど、誰かの話を聞くとき、わたしは自分の問題として聞いちゃうから、ものすごく痛むの。そういう激しい暴力、特に近親者から受けた性暴力の話を「恐らくそんなことはないだろう」って絵空事のように聞いたり、まったくの他人事として「ああ、そんなかわいそうな人もいるのね」って聞いたりすれば胸も痛まないと思うけれど、わたしにはできないの。まるで自分に起こったこと自分にも起こり得ることとして聞いてしまう。だからものすごく消耗するの。

「覚えていますか。十年前のこと」

上岡 話を聞いた後ね、本当に、たった一度しか会わない人、二度と会わないかもしれない人のことを、朝、目が覚めた瞬間に、「あの人、これからどうなるのだろう」と思ったことは数えきれないほどあるんですね。消しても、消してもそう思ってしまう。もう会わないのに。でもね十年後に再会したりする。「覚えていますか。十年前に来ました」とか

って、あるんです。そうすると本当に「やっていてよかった」って思いますね。そういう恐ろしい話を突然始める人、いますからね。ファミレスで一緒にごはん食べていたら、「ところでわたしの性虐待の話なんだけれど」って、いきなり。わたしはごはん食べながら性虐待の話なんか聞きたくないから、「あのださ。今晚どうするの」って話題を変えてしまう。だって、ちゃんと受けとめられるかどうか分からないし。

信じておいてよかった

上岡 でもわたしはどんなことがあっても、その人が話したことは信じるようにしています。そんなことないだろう、大げさに言っているだろう、脚色もあるだろうって思わないの。相手の話を必ずあったことだと受け止めていると、ウソだったら話をしていくうちに、その人自身がだんだん元の話に戻っていきます。それで「あれは言い過ぎで本当はこうなの」ってこともあるけど、現実はずっとひどいの。最初に話したことは10分の1ぐらい。その本人が五、六年たって「本当は」って話し出すと「うわあ、よかった、あのとき否定しないでおいて」って思う。本当に。もっとひどい話が出てきて「あのとき陽江さんにはそこまで話せなかった」と言われたりすると、もうドキドキって感じ。信じておいてよかったみたいだね。

神父様の前ではいい顔

上岡 うちのメンバーは、案外、教会に行っている人が多い。助けてほしいと思ってね。それでどういう問題が起こるのかというと、まず横のつながりのない閉鎖的な教会だと、「先生や神父様の言うことを聞きなさい」みたいに言われ、教会に行くことで再び精神

的にコントロールされて、また逃げなければという問題が起きてきます。そうやっているなどところを転々としてきたという話をメンバーから聞きます。夫婦そろってカトリックという人がいて、本当は夫のDVがあるんだけど、「夫は神父様の前では手のひら返すようにいい顔するの。神父様には本当の姿を見てほしい」と言っていました。シスターや神父さんの前では、自分の一番いいところを見せたくなくなってしまう。そうすると本当の話をしたいけれど、なかなか語れないことになってくるんですね。

虐待は雰囲気で分かる

上岡

でも神父さんはたくさん人の話を聞いているから、本当は分かっていると思うよ。どうしてかと言うと、わたしの子どもを診てもらっている小児科の主治医が素晴らしい先生で、「虐待があるかどうか、なんとなく雰囲気で分かる」って言うんです。雰囲気での母親は子どもを殴っている、この子の家では何か起きていると分かるって。だからおそらく神父さんやシスターの前にカップルや女性が行ったときには、話の内容じゃなくて、その人のたたずまいや雰囲気で見える部分があるかもしれないですね。

産む、産まないには複雑な背景が

医師の立場から

司会

ありがとうございました。そういった現実を真剣に受け止めながら、佐々木先生、女性の視点、フェミニズムの視点で二次被害とか偏見とか、教会ではタブー視されている中絶というシビアな問題にかかわられていて、どうお考えになるのでしょうか。

佐々木

医師の立場は、診断の結果から治療計画を看護師に指示するなど命令的に動かし、緊急のときは命令せざるを得ない立場にあります。対等にじっくり話を聴く立場に立てずに医療対応するなかで、二次被害を起しやすいいという感じがしますね。人はだれでも自分の価値観を押し付けがちだから、医師は立場が強いという点では二次被害にかなり注意しなくてはいけないと、いつも思っています。

中絶のことですが、産む、産まないの選択は非常に難しいことで、「一つのいのちは地球より重い」というのは、だれが聞いても当然のこのように理解できるわけです。アメリカでもいのちを大事にして、妊娠したら中絶をしてはいけないと強く考えている人たちと、女性の人生を考えた場合、これから生きていくうえで妊娠が障害になるなら中絶もやむを得ない、と考えている人たちが対立的に存在する事態になっています。どちらも、いのちが尊いことは重々分かっているわけで、中絶をしないですめばそれに越したことはないのは百も承知なんです。

産めない状況もある

佐々木

けれども医療の現場でレイプによる望まない妊娠、またレイプとまではいなくても避妊に協力しない男性から性交を迫られ、結果的に妊娠してしまって「わたしは、今は産めない」という状況を多々見ていると、産婦人科の医師がその人と向き合って十分に話を聴くと、中絶をすると言ってきた人が気持ちを変えて出産してもよいと変わることがあるんですね。その一方で経済的サポートをしようが、よく話をしようが、産めないときは産めないという状況があるのも事実です。

結局はその人の人生を優先して考えて、生きていくためにとりあえずこの妊娠は望まないのであれば、中絶はいいだろうとわたしは

思っています。それこそが、リプロダクティブライツ（性と生殖に関わる権利）ということのなかに含まれるのではないかなと思うんですね。

「じゃあ、お前は人殺しをしたじゃないか」って言われたら、確かに人になる芽をつんだかもしれないけれども、それと自分の人生を天秤（てんびん）にかけたとき、自分が分かってそれを選択したということは許されているのではないかなと思っています。そのことをなかったことにはできないわけで、それこそあとで非常に罪悪感に悩んで、精神的に不安定になったりすることもあるわけです。だけど自分が十分考えて行った選択であれば許されるし、それを糧にして、もう一回人生を生き直せばいいとわたしは思っています。

赤ちゃんポストか、社会の養育責任か

佐々木

赤ちゃんポストですが、育てられない人が黙って生まれた赤ちゃんを置いて去る、その受け皿になる産婦人科の問題について、社会的な意味で救済になると思う半面、人の妊娠から出産までは268日必要なわけです。その間たとえしゃべれない胎児であっても胎盤、臍帯（さいたい）を通してある種の交流と関係性のなかで新しいいのちが育まれるのは事実です。育てられないから名も名乗らずに生まれた子どもを黙って置いて去るのは、産む大人としては無責任だと思いますね。実際に申し出ただけであれば出産後お預かりして、その子どもを養子に出す手続きは社会的にきちんとあるわけです。だからその制度を利用すればいいと思います。妊娠したら産むべきという世間だとか、中絶の選択は許されない雰囲気とか、だれの子であっても産めない事情があるのだったら、しかるべきところでその子どもを養育する責任を社会がきちんととれば、隠れて子どもを置いていくことはしなくなるとわたしは思うのです。個人が

名を隠してまで子どもを置いていく社会がむしろ問題ではないかと思いますね。

マリア様はレイプ被害者かも

司会

貴重なご意見をありがとうございます。みなさん、これを受けてどう感じられたでしょうか。とても重い問題ですが、女性の視点で考えていくと答えが違ってくるかもしれません。釜ヶ崎の本田哲郎神父さんが最近、クリスマスメッセージとして書かれたものに、彼は聖書学者でいろいろな時代考証をされていて、二千年前の当時は、マリア様はレイプ被害者かもしれないという見方があったという文章を読ませていただきました。もしそうであるなら、虐待を受けた被害者にとって救いのメッセージになるとわたしは個人的に感じました。皆さんはどう受け止められますか。これは結論を出す問題ではないですから、これから教会で論議して将来につなげられればいいかなと思っています。

難しい加害者の気付き

モラハラをどう気付かせるか

司会

質問がきています。「加害者がモラハラに気付いていない場合、日本ではパワハラとも言いますが、一方的に力で抑圧的なコミュニケーションをすることが職場や家庭のなかにあります。いじめ続ける人が自分でそれに気付いていない場合、どう気付かせたいのでしょうか」という質問です、幸さん。ひよっとすると、夏休み帰省中の上岡さんにした電話の依頼もパワハラかなとわたし自身反省しました、ごめんね、陽江さん。

「あれはしつけ、プロレスの技だ」と言い訳

中島

加害者が自分の行動の暴力性に気付けば、傷付きや暴力は減ると思います。ただ残念ながら気付かない人が圧倒的に多いのです。たとえば報道される虐待の数はほんの氷山の一角で、逮捕された加害者の親は「あれはしつけだった」と言っています。DVの場合も人が亡くなっているのに、「あれは暴力ではない。プロレスの技だ」と言い訳した加害者もありました。第三者から見たら人が亡くなったのだから、暴力以外の何ものでもないのですが、暴力を振った本人は気付きという最初のステップに到達していないのです。

何十年も継続させないとダメ

中島

DV加害者プログラムを実践している「アウェア」代表の山口のり子さんと一緒に仕事をすることが多いのですが、アウェアと同じような場が東京には二、三カ所あります。アウェアに通っている加害者は2、30人で、一年間のプログラムを一年通い続ける人はそのうちのごく少数です。山口さんに言わせると一年では足りない、もっと長い時間をかけなければ、「自分より下と見なす人は傷つけてもいい」という発想を変えることはすごく難しいそうです。最初の大きなハードルである「気付き」まで、多くの人は到達しない。それをクリアすると次の段階として、それまで使ってきた人間関係のとり方をどうやって捨てていくかを学ぶ。それも大きなハードルです。次は実際に学んだことを行動に移していく。これができない人がたくさんいます。それをクリアしても、行動に移したものを死ぬまで何十年間も継続させるのが大きなハードルとなる。最後まで全部クリアできる人が何人いるかという問題です。

自覚なしに変化は望めず

中島

DV加害者プログラムが何百、何千とあるアメリカでも成功率は高くないのです。加害者研究が進んでも、プログラムが優れていても、変えようという本人の意志がなければ変わらないのです。つまり加害者が変わればすべての問題は解決します。DVの場合、加害者が暴力を振わなくなったらDVではなくなるのです。被害を受けた人たちがどんなに望んでも、加害者にその意志がなければ加害者に暴力は見えてこないし、暴力を認める最初のステップにつながりません。だからと言って、すべての人が変わらないと言ってはいません。なかには変わる人もいます。ただし難しいのです。

野放し状態の加害男性たち

司会

なかには加害者は変わる、夫は良くなると待っている妻たちは多いと思います。しかし変わろうと思わなければ変わりにくい、意識されなければ変わらないというのが現実です。わたしのところに、たくさん被害女性たちが支援を求めてこられます。

しかし加害男性が野放し状態にされていて、そのうちに女性と再婚して、また傷つけ続けているという状況を見ると、これを罰則とする法律をつくってほしいとさえ思います。社会が犯罪だと認めない限り暴力はなくならないと思います。現実には訴えられても自分とは関係ないと自己対峙（たいじ）しない男性が多いのです。自分の問題だと気付く教会になっていきたいと思いますね。

被害女性が暴力から離れて人生を再構築するにあたって、サポートグループとか自助グループの仲間たちとの出会いが大切です。教会でもそういったグループが必要ではないかと思うのです。陽江さん、長い間グループ活

動をやってこられた体験と、アメリカの刑務所内にできた自助グループ「アミティ」についてもお話ししてほしいと思います。

自助グループには三つの種類

上岡

わたしは自助グループ活動を23年やっています。自助グループ的な活動には、大きく分けて三種類あります。一つは、ぜんそく、乳がんとかペースメーカーを使っている人など患者同士のグループ。ときどき集まって情報交換したり、年に一回総会したり、政府に対して交渉したりするような活動をしています。

二つ目はDVの被害から逃げてきた人のサポートグループや、保健所でやっているような虐待の母親たちのグループ、虐待の母親という表現ごめんね。何気なく使って当事者をすごく傷つけちゃう。ごめんねとか言いながら話をするんですけれど。このグループは、できては消えていく。これが大切だと思っています。DV被害者は二年くらいすると変化して落ち着いていきます。そうすると最初のグループは必要なくなって、また別のグループが必要になっていく。新しい人が現れて被害者グループが必要になったら、またつくればいい。できては消えていく、移り変わっていくことが必要なのです。

三つ目はアルコールや薬物の自助グループで、歴史も長く、何十年も続けていくのが特色です。活動に共通の哲学があって構成人員が多く、世界的な広がりもある。アメリカではこのグループが山ほどあって、ニコチン中毒、コカイン中毒、薬物、アルコールからギャンブル依存や摂食障害と、ありとあらゆるグループがあります。

社会で疎外された人たち

当事者活動に共通点

上岡

先日、一つ目の種類、がんのグループについて話を聞きました。このグループは医療ができない、疎外している部分を取り返すための活動です。がんの治療は日本ではすごく遅れていて、なすすべがないので、当事者たちが集まって本当は医療がすべきことを自分たちでやっている。その意味で二つ目のDVや母親グループ、三つ目のアルコール・薬物などのグループも、社会のなかで疎外されてきた人たちの当事者活動という点でまったく同じことをしているのだと感銘を受けました。

支え合ったり、助け合ったりして

上岡

わたしは薬物依存症の自助グループの一員として23年やってきました。この種のグループは大きなコミュニティーなので、さまざまな形の活動ができます。自分の治療のためにミーティングに参加もできるし、出産や子育て、うつで引きこもってミーティングに参加できない場合は、電話などで仲間と話すことでサポートしたり、されたりして、コミュニティーにつながってられる。グループやコミュニティー全体の運営のための仕事も日本中、世界中にたくさんある。回復には何年も何十年もかかるわけで、だから長い人生でライフスタイルや状況が変化しても、病気になったり状態が悪くなったりしながら、生活のなかで起きてくるさまざまな問題を支え合ったり助け合ったり、ということを自助グループの仲間とのつながりのなかでやっていくのです。

男は二種類しかないよ

上岡

DVを受けていた仲間が男から離れて自立するとき、引越しの手伝いや探したアパートが安全かどうかを確認しに行くんです。そんなときに「男は二種類しかないよ、暴力を振るう人と振るわない人の二つだから」なんて、すごいこと言っちゃうんです。「それは大ざっぱ過ぎよ」って怒られるけれど、でも本当に加害者性を認めるのはすごく難しい。だから「暴力を振るうヤツは一生暴力を振るうから駄目よ」ってわたしは言います。

新しいパートナーが、また暴力的な男性だったとしても、「今度は大丈夫」と思っちゃうんですよ。「前は暴力にあったけれど、今度はあわないんじゃない」と期待しがちです。そこでわたしが「なし、なし。男は暴力振るうか振るわないかだから、振るう人はちゃんと治療に行っている人としか付き合っちゃ駄目」とね。

対処の際限ないのが依存症

上岡

自助グループ活動って、生活の中心ですよ。教会に行くようなもので。わたしにとっては、グループにつながりながら長くいろいろな人と付き合っていく。

依存症は、薬物・アルコールをやめたからって解決にはならない。問題はどんどん変化していきます。薬物やめたらアルコールに、アルコールやめたらギャンブル、それもやめたら仕事に依存して、となったりする。アルコール飲んでいたら暴力を振るわなかったのに、やめたとたんDVになっちゃった。だから、もう一度アルコールを飲んでくれたほうがマシじゃないとか。こんなことが本当にあるんです。やめてから起こってくるあらゆる問題に対して、どう対処していくか際限がありません。

回復のための知恵の蓄積

上岡

わたしの自助グループには何十年も伝わっている回復のための核となる哲学、知恵の蓄積があります。それを使って対処しながら生きていくことをやり続ける、自助グループが存在しなかったら生きられなかったという感じですね。

楽しいんですよ。15年以上も付き合っているロサンジェルス仲間と最近も会ったんだけど、彼女と初めて会ったのは、ミーティング場のトイレでした。並んでいたときわたしの前に彼女がいたんです。わたしは「女がヤク中になったら、売人か娼婦かどっちかになっちゃうよね」って何気なく言ったら、それで彼女は救われたんだって。彼女は娼婦をやめたばかりのときで、「だから自分でヤクをやっていたのはしょうがないんだなあ」って思えたんだって。それからずっと付き合っているんですよ。

自分をつくらなくていい居場所

上岡

いま彼女は社会人の暮らしをしていて、わたしも自助グループの活動をさせていただき、子育てをしている。そうやって自助グループのなかで出会って、お互い人生を伴走していくような仲間が、わたしにはたくさんいるんですよ。

まず「自分の問題を語れる安全な場所」があって、そこで自分が評価されないことが大切で、それがあから安心して話ができる。そういう仲間たちとは、自分が一番おかしいと思っている大変なことが話せているので、自分をつくらなくていい。見下されることが分かっている、そこらがすごく大切なのです。逆に自分がだれかを下に見始めたら危ない。再使用、再発の危険信号です。依存症者って卑屈か傲慢のどちらかで、真ん中がな

いの。わたしが「人が自分より下だ」って思い始めたときは傲慢の極地にいるときで、それに気づくと今度は卑屈になっちゃう。それが行ったり来たりしちゃう。仲間と会ってみんなに話して、自分がどこにいるか、どんな状態かをチェックできる。再使用の危険をそうやって避けているのです。

注目される「アミティ」の回復力

終身受刑者たちの自助グループ

上岡

アメリカには「アミティ」という治療共同体があって、暴力と犯罪、薬物、アルコールなどの再犯を防止するプログラムを刑務所のなかでも実践しています。three strikes outと言って、カリフォルニアで三回、刑を犯すと終身刑になってしまいます。その終身刑の受刑者たちが「生き直す」プログラムを「アミティ」がやっているんです。終身刑の人たち自身が中心になってプログラムを運営し、他の受刑者たちをサポートしていく。そのなかで自分が生き直して、自分のなかの加害者性と被害者性を認めるということをやっています。

閉じ込められていた被害者の側面

上岡

男性の終身刑受刑者たちは「自分のことを語るためには、暴力を振るった相手の女性の話を聴かないと語れなかった」と言っています。最初は「おれの問題じゃない。あれは弱者の問題だ」と。三年ぐらい聴かされ続けてやっと「もしかして自分の問題だったのかもしれない」と思い始める。閉じ込められていた暴力被害者としての自分の側面が、やっと出てくる。そのプログラムを記録した『ライフアーズ』（「アミティ」に参加する終身受刑者の姿を通して、犯罪や暴力、生きる

意味について問うドキュメンタリー映画）という記録映画があります。そのなかで殺人を犯した人が「十年たったときに初めて分かった」って語っていましたね。わたしね、それぐらいかなと思います。加害者は記憶を消すんです、受け入れられないから。本当に自分がやったことが何かを受け入れて、現実をきちんと見られるには十年ぐらいの歳月が必要なんだと思いました。日本のある医療刑務所の所長も「八年ぐらいかかる」と同じようなことを言っていましたね。

性虐待を受けていた殺人犯

上岡

重い犯罪による終身刑の人も生き直せる。そのために殺人を犯した人が同じように殺人をした人に対して、「どうしてか」って切り込んでいくんです。すごい、そのミーティングが。当事者同士だから普通では聞けないことを聞いたり、言ったりします。

そのなかで男たちが何を話し出すかという、嫌になっちゃうよね、ここでもまた性虐待被害の話なんです。殺人を犯した人の口から最後に出てくるのは、実は性虐待を自分は受けていたという話なんですね。それを受け入れていくために教育が必要なんです。

罰するだけでは変わらない

上岡

アミティの施設は大学のキャンパスのような景観になるよう、わざわざ設計してつくってあるそうです。アミティの方針は徹底して「学びの場」なのです。もし教育を受ける機会があったら事件は起こさなかった。社会性を身につける機会を奪われた人たちが罪を犯してしまう。だれも教えてくれなかったのです。必要なのは教育です。みんなが一般常識と思っていることさえ知る機会がなかったのです。たとえば学校へ行くため朝は何時

ごろ起きるのか、夜は何時ごろ寝るのか、食事はどんなものを食べるのか。地域の人たちの文化では当たり前になっている季節のお祝い事だとか、社会はどんな仕組みで、たとえば選挙に行くとはどういうことなのか。そういう一般常識を知らないまま再び社会に出たらどうなってしまうのでしょうか。加害の側面を罰するだけでは何も変わらないのです。

少年院で被害者の話だけではダメ

上岡

たとえばよく少年院で「教育」として、被害者に会わせて話を聴かせることをやっている。あれは最高に危ないのです。というのは、その子たちも本当は被害者なんです。その少年たちに被害者の話だけを聞かせると、「ごめんなさい」って言わざるを得ないから、自分が受けた被害をまた否認するしかなくなってしまう。それがストレスとなってさらに大きな暴力につながる可能性すらあるのです。加害者にとっては、自分の被害者性と加害者性の両方を受け入れるための教育プログラムが必要なのです。刑務所の中での教育プログラムを、受刑者が望んで受けたわけではなくても、一年以上やると回復率が上がるという研究結果が出ています。

『虐待という迷宮』

上岡

ダルク女性ハウスとアミティと、原宿カウンセリングセンターの信田さよ子さんと、『虐待という迷宮』（2004年、春秋社刊）という本を出しました。

刑務所の受刑者でも、きちんと話を聴いて、話し合っていけば変わる。そういったなかに当事者たちの共感や知恵が入っていることが大切なんです。この本は、当事者たちがどうやって生き延びていくのか、という女性たちのすごい話を収めています。

司会

分かりました。まだまだ話し足りないと思うので。皆さん、ぜひ本を読んでください。時間がなくなってきましたけれど。カズエさん、自助グループで言い残されたことがあったら、短く一言。

虐待ママグループに母なる存在

カズエ

自助グループの良さと教会のコミュニティの良さと似ているところがある、と今思い出しました。陽江さんが語っていた自助グループのステップにあるスピリチュアリティは、多分、教会ではよく言われている霊性とか魂だと思います。わたしは仲間たちのつながりのなかで、わたしのグループを「虐待ママグループ」と呼んでいます。虐待ママグループのなかで、わたしは自分の母なる存在のようなものを見つけたんです。それは誰かこの人というのではなく、グループの真中にわたしの母と呼べるエネルギーがある、そこにわたしの居場所、わたしを受け止めて育ててくれる何かがあると思いました。

ハイヤーパワーに向かって話せ

カズエ

ミーティングで話すときは、わたしのスポンサー（自助グループでの先輩）が「人にではなくてハイヤーパワーに向かって話さない」って教えてくれて、ああそうかと思って、やっとわたしは正直に話すことができました。人が聞いていると思うと何かウケねらいで、おもしろい話とか深刻な話にしようと考えてしまう。ハイヤーパワーというのは神様って言ったり、自然って呼んだり、いろいろな言い方をするんだけど、「このなかにいる神様に向かって話せばいいんだ」と気付いたことが、自助グループにいて良かったなと思うことです。本当にわたし

私たちは小さな神秘体なので、自分の頭のハエも追えないほど何もできないときもあるけれど、身体が必要なときは寝られるということもグループで教えてもらえました。

DVの被害者家族に接する仕方は

司会

確かに教会の共同体のなかで「平らな関係」とか「安全性」と言ったときに、その可能性があるかもしれないですね。最後に幸さんに質問が来ています。「DVだと分かった家族の女性と子どもが十日間ぐらい連絡のないままいなくなった」。質問者は学校の先生のようなのですが、「再び子どもは登校してきて、加害者の夫のもとに帰ったらしいという現実があって、そのお子さんは無力感があって感情がありません。どうしたらよいか、時間があればサポートグループについて話していただければ」という質問です。

一人ひとり自分に合うやり方で

母親自身のケアが子どものケアに

中島

暴力のあるところにいる子どもたちのケアは大変です。多くの場合、母親と子どもという組み合わせが多いです。母親が子どものことを気遣っている。そういうときにわたしたちが母親に伝え続けることは「お母さんが自分のケアをすることが、間接的に子どものケアにつながりますよ」ということ。たとえば飛行機に乗ったときに酸素マスクについては「大人がまずマスクを着けてから子どもに着けてください」というアナウンスがあります。大人が子どもに着けようとしているうちに倒れてしまったら、子どもも着けないまま倒れてしまうからです。日常生活で母親が子どものケアをする力をつちかっていくには、子ども中心となりがちであっても、自分

も大切だということを忘れない、子どもも大切、でも、自分を後回しにしてしまわないことを伝えています。

子どもは小さい人間

中島

子どもへのケアについては何日間かのワークショップを行うぐらいですから、3分間で話すのは難しい。『大切な人を亡くした子どもたちを支える35の方法』（梨の木舎刊）という本があります。これは死別体験をした子どものケアについての本ですが、ダギーセンターという施設が出した本を訳したものです。ここで教えている方法は死別だけでなく、いろいろな喪失感、大切なもの、大切な人を失った人たちのケアで使える方法だと思います。大人が子どもと接するときどうしても上から下へと見てしまいがちですが、それをどうしたら変えていけるのか、「子どもも小さい人間」という接し方ができるための「35の方法」が書いてあります。

わたしはグループワークが苦手

中島

自助グループについて陽江さんとの共通点の一つですが、わたしもグループにほとんど出ていません。なぜグループに出ないかというと、人それぞれ合う、合わないがあり、わたしは合わないのです。グループに出てもすごく話しくいと感じてしまうし、わたしは一对一のカウンセリングが合うタイプだからだと思います。ですからレジリエンスでは、さつきさんがグループを担当しています。一人ひとり自分の合う形を見つけていくのも一つの方法だと思います。本やワークブックを使うこと、講座のように、そこでの場所、時間、情報を自分のために費やすということは自分のセルフケア、わたしがわたしを大切にすることにつながると思います。そう

いったなかでグループワークという方法が合う人にはとても効果的だと思います。

大切なグリーフワーク

中島

陽江さんの講演にあった子どもたちが死について話せないというのは本当です。子どもたちにはそういった言葉がないのです。死のことだけではなく年令によってはさまざまな言葉がなかったりします。言葉がすべてではないのです。言葉に頼ろうとするのは大人たちの感覚です。そうだったら言葉ではない形で、自分のなかにためこまず外に出す方法はないのか。それが遊びであったり、アートセラピーであったり、さまざまな表現であったりします。ダギセンターは、同じような体験をした子どもたちが集まって、さまざまな表現を学んだりして、子どもたちが力を発揮できる場所になっています。今、世界の何百校で体験されているのは有効な方法であると評価されているからです。この方法はグリーフワークと言われています。グリーフというのは深い悲しみという意味で、それもとて大切なものを失ったときに感じる悲しみのことです。グリーフワークでは、今、抱えている悲しみを絵に描いたり、ものを作ったりするなかで表現していく作業を行い、抱えにくいものを少しずつ抱えやすい形に変えていきます。

ため込まず、安全に出せる場が大切

中島

DVのグループに時々参加すると、こういうグループがあるのも大切だなと思います。たとえば逃げ出した被害者が実家に帰ったとします。逃げてよかったと思う部分が9割あるとします。ひどい暴力を受けたりハラハラしたりしなくてすむ。でも1割は関係を保っておきたかった、DV加害者が好きだと

いう気持ちもある、子どもにとっていいお父さんでいるときのあの人とは関係が続けていたかった、というところがあるんです。その感情を抑え込むのではなく、安全に出せる場所が大切だと思います。そうしないと実家で「ときどき会いたくなるんだよね」と言ったときには、みんなによってたかって「あなた、なんてバカなこと言っているの」と言われたりして、こういうことは言ってはいけないんだ、こういう感情を持つてはいけないんだと思ってしまいがちです。持っていないんです。人間の感情にはいろいろな面があって一見矛盾しているように見えるけれども、矛盾しても感情を持つていていいんです。ただ、ため込まないで言える場所、安全に受け止めてもらえる場所を探す、それがグループ効果がある瞬間だと思います。

「性暴力被害者支援専門看護師」が全国に必要

司会

ありがとうございました。最後に佐々木先生への質問で、「性暴力被害者支援専門看護師」資格について、簡単に説明していただいていいですか。

佐々木

わたしたちのNPO法人では支援者の研修をしています。そのなかで看護師の資格を持った人を対象として、Sexual Assault-Nurse Examiner (SANE) と言って、性暴力被害者支援専門看護師の養成講座をしています。欧米では法看護師 (Forensic-Nurse) という暴力被害全般を支援できる研修を受けた看護師が活躍しています。日本ではまだどちらも認定制度がありません。わたしたちは男性医師が多い医療のなかで、レイプ被害にあった女性の診察で、男性の医師しかいないときに、専門教育を受けた女性の看護師がきちんと医師をリードする立場で参加すると医療の中味が変わってくると考えています。性

暴力被害者支援専門看護師がいる医療機関に行ったほうが、良いケアが受けられるという情報も広めたいと思っています。そうすれば国レベルも養成に動いてくれるのではないかと考えています。NPOの性暴力被害者支援専門看護師の講座を受けた看護師は、まだ百人前後しかいないので、全国的な規模からみれば少ないのですが、これを広めていきたいと思っています。

司会

どうもありがとうございました。本当は教会に求める支援とは何かというところまで話したかったのですが、これは明日の課題として残しておきたいと思います。わたしたちが暴力を現実の問題として受け止め、これから何ができるかを一緒に考えていければいいかなと思います。

松本 和子（まつもと・かずこ NPO 法人女性ネット Saya-Saya 共同代表）

社会福祉士、精神保健福祉士、DV カウンセラー。前カリタスジャパン援助活動推進部会委員。私立光塩女子学院幼稚園教諭などを経て山谷の「ほしのいえ」開設に携わり、夜回り・作業所などの支援活動が続けてきた。DV など暴力被害女性の地域支援ネットワーク「女性ネット Saya-Saya」で野本律子さんとともに共同代表を務める。

第3部

あらゆる暴力に「ノー」の教会を目指して

聖職者による性的虐待問題— 教会が性的虐待に立ち向かうには

小柳義夫（工学院大学情報学部長）

教会と暴力、さらには宗教と暴力という問題は、非常に難しい課題を含んでいます。2006年9月に教皇は南ドイツを訪問しましたが、そのときレーゲンスブルク大学で行った講義についてイスラーム教徒が憤慨し、教会を破壊し、修道女を殺害するという事件が起こりました。そのときの講義の論点の一つは「信仰と暴力」「理性と暴力」でした。

また十年以上前のオウム事件でも、オウム真理教という宗教集団が正当化した暴力が問題になりました。絶対に帰依しているグルから暴力的な犯罪行為（サリンをまくとか）を指令され、実行したわけです。

もちろんキリスト教も例外ではありません。二千年の歴史のなかで、教会のためにということで暴力行為が行われた例は、まさに、枚挙にいとまなし、です。

今回お話ししたいのは2002年1月以来、日本のマスコミまで賑わせたアメリカなどにおける聖職者による未成年者への性的虐待問題です。これはカトリック教会にとって極めて重大な危機でした。この危機はいまなお続いています。2006年10月28日に教皇はアイルランドの何人かの司教と謁見した際、「未成年者の性的虐待はここを痛める問題である。聖職者による虐待の場合はなおさらである」と述べています。このようなお話をしなければならないことはまことに残念ですが、事実を正しく認識することは再出発への必要条件だと思います。

極秘に処理してきた教会

15年間に200人の子どもの

アメリカにおける聖職者による性的虐待問題は、1960年頃から持ち上がっていたようです。しかし教区は問題を起こした神父らをたらい回しにして、隠ぺいしてきました。訴

訟事件が起きたのは1990年代になってからで、ジェームス・ポーター元神父がマサチューセッツ州、ミネソタ州などで15年間にわたって200人以上の子どもたちを虐待した、として起訴されたのが最初だと言われています。しかしいずれのケースも極秘に処理されてきたため、今回のように表ざたになって大問題になることはありませんでした。

これが世界を揺るがす大事件になったのは、アメリカのボストン・グローブ紙が2002年1月6日に特ダネとして報じたからです。アメリカ同時多発テロ事件が起きた9月11日の四ヶ月後のことでした。これを機にテレビはもちろんのこと、ニューヨーク・タイムスをはじめアメリカの有力新聞が精力的に報道し、多くの事実が一挙に明るみに出てきました。

ボストン・グローブ紙が報道した内容

ボストン・グローブ紙が最初に報道した記事は次のようなものでした。

「ゲーガン元神父（66）が1962年の叙階以来、30年にわたってボストン教区のいくつかの教会で小学生を性的に虐待してきたという話が、1990年半ばから持ち上がっていた。2001年7月、ボストン大司教であるロー枢機卿は、この事実を知りながらゲーガン元神父を1984年から教区内でたらい回しにしてきたことが明らかになった。枢機卿の弁護士は、彼の転任は適正であったとした。しかし補佐司教の一人は、ゲーガン元神父を聖ジュリア教会へ任命するのは危険であると考え、枢機卿に手紙を出していた。実際にはゲーガン元神父は1989年に病気休暇を取るまで三年間にわたって、聖ジュリア教会で侍者会など三つの青少年のグループを担当し、少年に性的な虐待をした。数ヶ月間、性的虐待をした司祭のための更生施設にいた後、再び聖ジュリア教会に戻り、さらに三年間にわたって虐待を繰り返した。1998年になって司祭職から離れた」

被害者が次々に名乗り出る

この記事がきっかけとなって聖職者の性的虐待問題に火がつき、連日、テレビは特集番組を組み新聞も大きく報道しました。こうしたマスコミ報道に触発されて、過去に聖職者によって性的虐待を受けた被害者たちが次々に名乗りを上げて損害賠償を求め、また教区がひそかに賠償金を支払って隠密裏に処理し

てきたケースが次々に明るみになってきたのです。

たとえばボストン教区のポール・シャンレイ元神父（71）は、52歳のときに6歳だった少年を性的に虐待、以後8年間にわたって関係を持ち続けていたとか、ブラックウェル神父（56）は性的虐待を受けたという青年に拳銃で撃たれ、病院に収容されたといった具合です。また1976年から1982年にかけて、少年を性的に虐待したと訴えられていたコネチカット州のアルフレッド・ビーティヒホファー神父は、聖ルカ病院に入院中に自殺しました。

ボストン教区の大司教であるロー枢機卿は声明を出し、過去の聖職者による青少年に対する性的虐待を謝罪する一方、自分は知らなかったので意図的にたらい回しにしたわけではないと弁明しました。しかし辞任を求める動きは激しさを増していったのでした。

異例の枢機卿会議がバチカンで

事態を重視したアメリカ司教協議会の会長ウィルトン・グレゴリー司教らが、教皇庁を訪れて対策を協議した結果、4月23日からバチカンで異例のアメリカ人だけの枢機卿会議を開くことになりました。この会議にはアメリカ人の枢機卿13人が全員呼び集められ、教皇は「若者を傷つける司祭や修道者には居場所はない」と訴えたといわれています。

これを受けてアメリカ司教協議会は、これまでは密かに処理してきた未成年者に対する聖職者の性的虐待問題について、どう対処するかの本格的な検討に着手せざるを得ませんでした。

ストライク一つでアウト

6月にダラスで開かれた臨時司教総会で、zero-tolerance（酌量に余地なし）またはone-strike-you're-out と呼ばれる厳しい「児童・未成年者保護憲章」が採択されました。one-strike-you're-out というのは野球にたとえたもので、野球ではストライクが三つで打

者はアウトになりますが、ストライクが一つでもアウト、つまり現在・未来において一度でも児童・未成年者への性的虐待問題を起こした司祭は、無条件に司祭を免職するという厳しいものでした。同時に「性的虐待の取り扱い基準」をはじめ、信徒で組織される「性的虐待に関する全米監視会議」の設置、未成年者の性的虐待の訴えはすべて捜査当局に通報することなどが決まりました。

バチカンでは修正を要求

ところがバチカン当局はアメリカ司教団の改革努力を評価する一方で、この基準は「罪を許すというカトリック教会の教義と整合性を保つのが難しい部分がある」「何を性的虐待とするかの基準が不明確である」などとの理由をつけて修正を要求。結局、11月にワシントンで開かれた司教総会では「訴えられた聖職者を機械的に聖務停止処分にするのではなく、まず教会内部で審判する」という一歩後退した形の修正案が採択されました。

その後2003年2月にバチカン当局は、未成年者を性的に虐待した司祭に関する基準を修正し、裁判と還俗が迅速に進められるようにしました。アメリカ司教団が採択した基準を全世界に適用することにしたわけです。同時に「ゆるしの秘跡」の秘密を破る罪についても、バチカンの従来の基準が修正されました。

信徒だけの全米監視会議スタート

「児童と若者の保護局」の設置

画期的なことは信徒で組織される「性的虐待に関する全米監視会議」と「児童と若者の保護局」が設置されたことです。監視会議のメンバーはすべて信徒で、裁判官・弁護士・ビジネスマンなど13人。議長には検察出身でオクラホマ州知事を二期務めたフランク・キーティング氏が就任しました。また保護局の局長にはFBIに24年間勤め、女性としては

初めてトップから三番目の地位に立ったキャスリン・マクチェスニー女史が指名されたのです。

監視会議は全米195の教区の監査を開始、二年後の2004年に発表した調査報告書には聖職者による性的虐待の驚くべき実態が記されていました。

被害者の81%は少年

1950年から2002年までの53年間に、4392人の聖職者（聖職者の4%）が10667人の未成年者を虐待したと訴えられていたのです。その大半は司祭で、修道司祭は929人、終身助祭は41人という内訳です。

被害者の81%は少年で、63%は二度以上の虐待を受け、30%近い被害者は同一の司祭から二年から四年にわたり、10%は五年以上も虐待を受けていました。加害者の56%は一人の少年との関係を続け、十人以上の被害者を虐待した聖職者はわずか3%。加害者の7%は自分自身が子ども時代に虐待を受けたことがあるという恐るべき連鎖の実態が明らかにされたのです。

ただしこれらの数字はあくまで告発された件数であって、全部が確認されたわけではありません。ちなみに警察に通告され処理されたのは613件で、うち217人の司祭が告発され、128人が有罪とされ、百人が刑務所に送られたということです。

ゲーガン元神父は30年間に130人も

問題になったゲーガン元神父はその後裁判にかけられ、30年間にわたって130人もの少年を、司祭館の寝室や自動車の中やプールなどで性的虐待をしていた事実が明らかにされ、禁固九～十年の判決が出されました。ロー枢機卿と五人の補佐司教はこの事実を知りながら、少年と接触する仕事を続けさせたとして非難されました。また130件以上の民事訴訟が起こされ、ボストン教区は86人の原告に対し、総額1000万ドルの和解金を支払うことで

和解しました。ゲーガン元神父は2003年8月、服役中の刑務所内で受刑者（37）から暴行を受けて死亡しました。その受刑者自身も子ども時代に大人から性的虐待を受けていたということです。

こうした聖職者による性的虐待事件は、ボストン教区だけでなく全米各州に及び問題が起きていない州はアーカンソー、テネシー、ユタ、ワイオミングの四州というありさまです。

アメリカ司教団が謝罪広告

これを受けてアメリカ司教団は2月27日にUSAトゥデイ紙に、29日にニューヨーク・タイムズ紙に謝罪広告を出しました。

「わたしたちはこの罪を認め痛悔し、過去に起こった虐待が再び起こらないことを保証するために必要なことを行うという固い決意を表明する」

これらの報告を受けてさまざまな議論が起きました。報告書は「司祭の独身制の問題は任務の範囲外である」と言いつつ七ページを独身制の問題に当て、「ある司祭にとって独身は間違いなく恵みであるが、ある司祭にとっては重荷であり、孤独・アルコール・薬物乱用・不適切な性的行動などに陥りやすい」と指摘し、司教に熟慮を求めています。

ロー枢機卿の後任にオマリー司教

ボストン教区では対応のまずさだけでなく、性的虐待をした司祭に、その事実を知りながら職務を続けさせたり転任させたりしていた責任を問われ、ロー枢機卿は2002年12月に辞任が受理されました。ロー枢機卿はその後メリーランドの女子修道院のチャブレンを勤めていましたが、2003年1月に裁判所で証言を行い、「問題司祭をたらい回しにしたのは、復活の力を信じていたからだ」という弁解をして、3月にその記録が公表されると批判を浴びました。そして2004年5月27日、ローマのサンタ・マリア・マッジョーレ教会の主席

司祭（Archpriest）に任命されました。

後任には2003年7月にフロリダ州のパームビーチのオマリー司教が就任。オマリー大司教は直ちに500件を超える性的虐待に関する訴訟の和解に取り組み、交渉の末8500万ドル（約100億円）を支払うことで決着しました。このほかボストン教区は、1994年から2001年までに、149人の性的被害者に対して2120万ドルも支払っていたことが明らかになりました。

被害者への補償金は総額1800億円

一時は財政悪化のため、ボストン教区は連邦破産法の適用を申請するのではないかと報じられましたが、結局、隣接するボストンカレッジ（イエズス会経営）が旧大司教館を含む43エーカーの土地などを1億ドルで購入することになり、破産するまでにはなりませんでした。

一方監視会議が委託したJohn Jay Collegeの研究報告も発表され、性的虐待による教会側の支出は2002年までに5億7300万ドルで、うち2億ドル強は保険会社から支払われました。その後補償交渉が進み、2007年5月現在、総額15億ドル（1800億円）に上っていると報道されています。

性的異常者の専門病院

わたしが驚いたのはアメリカのカトリック教会には、聖ルカ病院（St. Luke Institute）という性的異常と呼ばれる司祭のための病院があることです。1981年にメリーランド州に創設され、70人の司祭が入院しているそうです。4分の1は未成年との性的問題で訴えられているといわれています。他にも同じような施設があるとのことで、さすがアメリカと思うと同時に問題の根の深さを感じざるを得ません。

世界各国で聖職者による性的虐待

英国、ドイツ、フランスでも

聖職者による青少年への性的虐待問題はアメリカだけではなく。報道されているだけでカナダ、オーストリア、ニュージーランド、アイルランド、英国、フランス、ドイツ、メキシコ、ポーランド、香港、フィリピン、アルゼンチンなど多くの国にも及んでいます。

たとえばアイルランド修道会協議会は、教会経営の寄宿制の学校で1940年代から1960年代に、性的虐待を受けた子どもたちに約1億2500万円を支払うことに同意しました。

またポーランドでは神学生からセクハラを訴えられたボズナニの大司教は、神学校長から神学生の安全のため神学校に近づかないよう要求されました。大司教は嫌疑を否定しましたが辞任を申し出、その後教皇は辞任を受理しました。

アイルランドのファーンズ教区のコミスキー司教は、教区の数名の司祭の児童虐待の訴えの取り扱いに対する批判を受けて、3月28日に教皇に辞任を申し出ました。アイルランドのコネル枢機卿は、これまで司祭の性的虐待のデータを警察に通報しなかったことを謝罪しました。「教会法の秘密規定が児童虐待の司祭を守ることになってしまった」と弁解しました。

日本でも性的虐待の調査

日本の司教団は一般信徒に向けて「子どもへの性的虐待に関する司教メッセージ」を2002年6月21日に出了しました。それによれば日本でも性的虐待の事例があったということです。詳細は公表されていません。

2003年2月の臨時司教総会では、2002年定例司教総会後に設置された「子どもへの性的虐待問題に取り組むプロジェクトチーム」作成の、「教会が子どもを守るために『聖職者

による児童性的虐待に対応』司教のためのガイドライン」が承認されました。

子どもへの予防教育として「こんな時には（司祭にも）ノーと言おう」ということが強調されています。このガイドラインは、教会全体のためのものとして作成されるはずでしたが、どういうわけか、出来上がった段階では、表題は「司教のための」ガイドラインとなり、内容は公開されていません。画期的な内容なのに残念なことです。

児童より女性への性的虐待多い日本

このガイドラインの作成過程で、日本の場合は児童というより女性も含めたセクシャルハラスメントの問題として、教会は積極的に取り組む必要があるという提言が司教団から出されました。この提言を受けて社会司教委員会の下に設置された「女性と子どもの権利擁護のためのデスク」は、実態把握のためのアンケート調査の協力をカトリック新聞で呼びかけました。その結果110件の解答があり、そのうち40%近くが性的虐待などの被害者であることがわかりました。このアンケートをもとに「女性と子どもの権利擁護のためのデスク」は、2006年3月に『セクシャルハラスメントに気づくことから＝あらゆる暴力にNO！という教会を目指して＝』※という小冊子を発行しました。

※124ページ参照

他宗派での性的虐待問題

この聖職者による性的虐待問題はカトリックだけではなく。英国国教会でもカナダの原住民居住区の学校での性的虐待、教会の侍者への虐待など、1999年までに全体で200件の訴訟に直面し、ある教区では賠償のため破産申請を考慮しているという話です。ジェンキンス氏によれば、「性的問題はカトリック教会だけではない。モルモン・エホバの証人・仏教・ユダヤ教・バプテスト・ペンテコスタ派のどの教派にでもある。極端な例

では、ペンテコスタ派の牧師が80年代に数百人の少年を虐待したケースもある」と述べています。(フィリップ・ジェンキンス氏はペンシルバニア州立大学教授で、宗教社会学の専門家。エピスコパル教会信者。著書『小児性愛と司祭—現在の危機の解剖』(1996年))

教会の体質、構造に問題

個人的な罪とは言えず

わたしは『監視会議』の報告を読んで本当に驚きました。一般の新聞はもちろんアメリカの教区の新聞などでも、この聖職者による性的虐待問題の背景に何があるのか盛んに議論されました。そもそもこれだけの加害者・被害者が出てくると、単に個人的な罪とは言えず、教会の体質・構造そのものに問題があると考えざるを得ません。なかでも議論が集中したのは(西方)カトリック教会における司祭の独身制に問題があるのではないかということです。また司祭職から女性が排除されている問題も議論されました。

司祭の独身制が、司祭の権威が

しかし独身制については、少なくとも直接的な原因ではないという見解が多いのも事実です。小児性愛の傾向のある司祭の、司祭全体に対する割合は、市民全体の割合より低いというアメリカの統計もあります。ただ司祭職は職務上未成年者と接する機会が多く、割合としては少なくとも多くの被害者をつくる可能性は大きいのです。また「性的問題に悩み、解決できない人間、あるいはノーマルな性的関係を持ってない人たちが、隠れみのかとして司祭職に就くことがある」との指摘もあります。一番重要なことは司祭が教会において権威を持ち、それによって少年に近づいたことです。「神父様は神様だと思っていたので逆らえなかった」というような声が被害者から出ています。教会の大勢の見方は司祭性善

説であり、司祭が墮落すると、これをチェックするメカニズムがありません。司祭の独身制は司祭に規律と信頼のオーラをつくり出し、これが性的虐待を助長し、隠ぺいを容易にしたとの指摘もあります。

教会の隠ぺい体質が被害者を拡大

もうひとつの問題は教会の隠ぺい体質です。最初是否定していましたが、ボストンのロー枢機卿は被害者からの苦情を知りながら、問題司祭を別の小教区に移籍させていたために被害が拡大しました。移籍して解決する問題もないわけではありませんが、性的虐待では逆効果でした。教区に対する多額の損害賠償はこの責任に対して要求されています。裁判になって公になるのを恐れて、和解金が秘密裏に払われた例も多いのです。その裏にはカトリック教会が離婚・中絶・同性愛など性に関して厳格な倫理を主張していることが指摘されています。つまりこんな事件が表沙汰になると主張が弱くなることを恐れて隠ぺいしたということです。また同性愛を恐れるあまり神学校での生徒同士の交流を禁じたので、高位聖職者になっても相互に交流できなかったという指摘もあります。

米国では少数派の閉鎖意識が

アメリカのカトリック教会は、アイルランド、イタリアなどからの移民とともに増えてきましたが、20世紀半ばまでは少数派(3000万人)でした。その後ヒスパニック系などが増加し、現在約6200万人と人口の約22%を占めるに至りましたが、少数派としての閉鎖意識が残っていると言われています。隠ぺい体質の裏にはそのような歴史的事情もあるのです。アメリカにおける家庭の崩壊との関連も議論されています。カトリックの家庭でも片親の家庭が多く、問題司祭が父親不在の家の子どもをねらい打ちにしたというケースもありました。

日本でも未成年者の性的虐待が

最近問題になっていることは冤罪の可能性です。アメリカ司教団の方針は、無実な司祭に対する意図的または誤解・妄想などに基づく不当な告発に対して、司祭の権利を十分守っていないという批判があります。訴えられたが無実と判明した例も少なくありません。今後修正していくなかで検討されるでしょう。

他方、信徒による監視組織をつくり、専門的調査団体に委託して、ここまで徹底的に調査し、またそのデータを公表したアメリカの教会の開かれた姿勢にも驚嘆せざるを得ません。日本のカトリック教会でも未成年者の性的虐待の事例があったということまでは司教団は発表していますが、詳細は一切発表されていません。インターネット上には真偽不明の情報が流れており、アメリカとは対照的です。

天文学的数字の損害賠償金

聖職者による性的虐待のグランド・ゼロ（爆心地）と言われるボストン大司教区の大規模な集団損害賠償訴訟を、和解にこぎつけたオマリー新大司教のカリスマ性には感服せざるを得ません。しかし損害賠償額は天文学的です。アメリカ合衆国全体では少なくとも1000億円を越えるものと思われます。（2007年5月の推定では1800億円）。6000万の信徒を有するアメリカのカトリック教会にとっても少ない額ではありません。教会は、賠償金は保険や財産処分によって払うので、献金は使わないと述べていますが、元を考えれば結局同じことでしょう。

「神父様は神様だ」

子どもに対する性的虐待防止教育というのも頭の痛い問題です。教育すべきは神学生や司祭の方であって未成年者ではない、という批判もあります。ボストン教区の小教区や教区立学校では、虐待予防教育があまりにもあからさまで、そこまで子どもに言う必要がな

いのではという声が上がっていました。日本司教団もカイドラインを出しましたが、実効性をもたせるにはどうしたらいいのでしょうか。「神父にもノーと言おう」と子どもに教えようとしています。大人の信徒は神父に気に入られることが最大の関心事で、子どもに「神父様は神様だ」などと教えているのに、それが子どもに通じるのか疑問です。教会における司祭像そのものから再構成する必要があるように思われます。

聖職者のチェック機構が必要

このような問題を論じていると「あなただって自分の若いときを考えれば性的な間違いをひとつも犯さなかったと言えますか」（罪なき者まず石を取れ）などという批判を受けますが、この批判は的外れです。なぜならこの問題の本質は性的な過ちなどというのではなく、権力犯罪だからです。日本ではアメリカほどの聖職者による未成年者への性的虐待があるとは思えませんが、権力によるいじめ、パワーハラスメントまで広げて考えると、われわれにとっても他人事ではないのです。

独裁的権力は腐敗する

今回の問題は、カトリック教会の組織的な弱点を図らずも露呈してしまいました。その責任は司祭だけではなく信徒にもあります。教会を運営する責任は司祭と信徒が共同して担わなければならないのに、司祭はしばしばワンマン体制を好み、信徒も「神父様にお任せする」ことに安住する傾向があります。これは成熟した教会の姿とは言えません。東京教区などで提案されている複数の小教区からなる宣教協力体の体制では、信徒が小教区（聖堂共同体）の運営に主体的にかかわる必要が出てきます。その意味でひとつの新しい方向を示していると期待されていますが、現実はどうなるのでしょうか。

チェック体制のない独裁的な権力は腐敗するという法則は教会でも例外ではありません。

今後は、教会のさまざまなレベルでチェック 機構を確立していく必要があると考えます。

小柳 義夫（おやなぎ・よしお 工学院大学情報学部長、教皇庁文化評議会顧問）

東京大学理学部物理学科卒。筑波大学電子情報工学系教授、東京大学情報理工学系研究科教授などを経て2006年より現職。カトリック学士会事務局長、大学キリスト者の会前委員長、財団法人「真生会館」評議員、カトリック新聞諮問委員、藤女子大学キリスト教文化研究所客員所員。虐待問題については2002年にアメリカで起きた聖職者による性的虐待事件をきっかけに関心を抱き、カトリック学士会機関誌『創造』119号、121号に「聖職者の未成年性的虐待問題について」というレポートをまとめた。教会が暴力に立ち向かうためには、まず教会内部に根を張るさまざまな形の暴力をなくす必要があると訴えている。教皇ベネディクト16世選出に際して「新ローマ法王に望む 地域・文化の多様性尊重を」の原稿が読売新聞夕刊に掲載された。

シンポジウム

「イエスならばどうするか」

司会 横川和夫

シンポジスト 幸田和生・松本和子・小柳義夫

司会

シンポジウム「イエスならばどうするか」。もしも現代にイエスが現れたら、今のような教会でよいのだろうか。本当の福音とは何かを、わたしたちはこの三日間、考えさせられてきたのではないかと思います。これから、そのテーマをめぐってシンポジウムを開くわけですが、その前に各講師の方々にこの三日間、どのように受け止められたかについて、簡単にお話いただくことから始めたいと思います。それでは松本さんから。

暴力が起きやすい教会、学校、施設

松本

小柳先生の報告を聞いて、現実を直視することがいかに厳しいことか。わたしの身体は怒りやさまざまな思いのためガチガチで、今にも破裂しそうな感じです。DVの研修でアメリカのオレゴンに行ったとき「ポートランドの教会は性虐待の賠償金が払えず破産宣告したばかりです」と地元の人が語っていました。こういった現実、昨日お話しされていた方たちのお話とダブリます。被害を受けた子どもたちは、今も影響が残っているはずです。そして被害の事実を語るチャンスを与えられず、永遠に癒されることがないとしたら、どうなっていくのでしょうか。この現実がわたしに重くのしかかっています。

った中島幸子さん、カズエさん、上岡陽江さんの当事者の方たち、ここは教会で、皆さんが受け入れてくれるという信頼と期待感があったからこそ話せたのだと思います。わたしの勝手な推測ですが、皆さんのお話がわたしには「教会はわたしたちを守ってくれなかった、見てくれなかった、助けてくれなかったじゃない」という叫びに聞こえてきました。これまで皆さんは、教会の外で話をされ続けてきました。

カズエさんのお話は「女たちの会」という小さな自助グループの集まりで聞きました。わたしの仕事の間でも、教会では話せないという相談をたくさん受けました。「教会で話したら、神父さんから『これはあなたの十字架だから耐えなさい。必ず希望がある。信じなさい』という答えしかもらえなかった。だから、今も、この苦しみは、わたしが背負っていく十字架です」と言って、苦しみを背負っておられる方がたくさんいます。その現実を目の前にして、こうしたメッセージでよいのだろうかと疑問に思います。それより、キリストの「どんなことがあっても、あなたはわたしにとって大事な存在なのだよ」というメッセージが教会にあるのではないか。わたしはそれを信じて、どんなことがあっても“ALL OK”という立場でいるのですが、そうすると教会の価値観とズレてくることが非常に多かったのです。

教会は助けてくれなかった

松本

昨日、本当に勇気を出してお話くださ

特権を持った力の行使が問題

松本

それでは、どのようなことが必要なの

かをこれから考えていきたいと思います。特に教会の中の暴力、小柳先生も語っておられましたが、支配と特権をもった力の行使が主任司祭と信徒との関係のなかで起きているところもあるように思います。自分とは関係ない世界で起こった問題ではなく、自分のこととしてとらえ直していかなければいけないと、大きな問題提起をいただいたと感じております。

問題の本質は性より権力

小柳

昨日、カズエさんのお話をお聞きして思い出したのが、一週間くらい前に読んだアメリカの司教団が出している電子ニュースです。それは司祭から性的虐待を受けた当時12、3歳の少年が、その後どんな一生をたどったかという記事でした。両親にも話せず、家出をして祖父母のところに行っただけでも話がでず、教区立の中学校で不登校になって、結局、軍隊に入り、終わってから実業界に入って成功した。もちろん教会から離れたのですが、最近になってロサンゼルス司教からの謝罪を受け入れて、立ち直ったという涙ながらの話です。こんな話が今でも続いているのが現状のようです。

わたしは、このニュースを2002年に聞いたときに、問題の本質は、性の問題よりも教会のなかでの権力の問題だと思いました。もっと言うと、わたしが当時いた教会のなかの問題と二重写しになって、それから虐待問題に関心を持ち、情報を集めるようになりました。日本の司教団がまとめたガイドラインは立派なもので、内容のごく一部は、パンフレットにも出ていますが、非公開にしたのが不思議で、残念な話です。なぜオープンにしないのか。せつかく、ここまでまとめたのに司教団は何を考えているのだろうと思います。

教会にも被害者を黙らせる現実が

幸田

小柳先生の講演で話された内容は、ほとんど知っていることだし、この話があると前もって知っていましたが、聞いていて自分がこれほどダメージを受けるとは思いませんでした。被告として、検事の論告求刑を聞いているような感じでした。松本裁判長は、本当にきついですね。(笑)

この三日間、最後にこのような話になることは分かっていましたし、遠藤優子さんの「家族は危険な場である」というお話を聞きながら、「家族」を全部「教会」に置き換えて聞いていました。ピンピン響いてきました。親密な関係で、それが長期に持続し、密室であって、ということは、全部がある面では小教区という場に当てはまる気がします。さらに権威とかヒエラルキーというものに事欠かないのが教会、小教区だと思います。教会は、暴力が起こり得る場であることを、わたしたちは、なかでも特に司祭はきちっと自覚しなければならないと感じました。そして教会だけでなく、カトリックの施設や学校も暴力が起こりやすい、起こり得る場であることを頭に入れて、物事を見ていかなければなりません。わたしたちのなかには「聖家族」幻想というか、教会という場は良いところで、カトリックの家庭は良い家庭という幻想があって、これが問題を悲惨な状況にしまう、つまり被害者を黙らせてしまう現実、危険があることから考え始めなければいけないと思います。

どうしたら風通しのよい教会になるか

幸田

遠藤さんは、風通しをよくするという話をしてくださいましたが、教会にとっての本当に大きな課題だと思います。わたしたちの教会、小教区、カトリック施設をどうした

ら風通しよくできるか。できることをきちんとやっていきたいと思っています。

二日目の皆さんのお話でも、本当にいろいろなことを感じさせられました。わたしたちが、被害者、サバイバーの話をまず聞くことから始めなければいけないと思いました。これについては、また後で、ゆっくりお話ししたいと思います。

司会

小柳先生のお話と、昨日のそれぞれの虐待を体験した人たちの「教会には場がなかった」というお話が、ちょうど裏と表の関係で、非常に複雑で、構造的な問題が潜んでいるのではないかと思います。この三日間のセミナーは、そういう構造の一角に風穴を開けるきっかけになればよいと思っています。松本さん、密室性についてどうでしょうか。

閉鎖的な教会を打破するには

松本

わたしもボーン・クリスチャンなので、教会を大きな家族のように思っ育ててきました。家族であるからこそ安心できる、何でも言える場所であるはずが、現実はそのようではない。昨日のカズエさんや幸さんのお話にも「熱心なクリスチャンの母親を悲しませたくない」とありましたが、わたしにもすごく共通していました。母を悲しませない、母につらい思いをさせない。これが教会で本当の話ができない大きな理由かもしれないと感じました。

この世にいない児童虐待の犠牲者

松本

わたしは、二年前「正義と平和」全国大会で、初めてDVの問題の分科会を担当し、そこに幸さんをはじめ何人かの当事者の方たちに出いただきました。ところが、その当

事者の一人は、もうこの世にはいないのです。本当につらいなと思います。

彼は、家を出る直前まで虐待を受けていましたが、何もないかのように、家族そろって教会に行っていたという話をされていたのです。彼は小さいときから両親のDVを見たり、虐待を受けて育った児童虐待の犠牲者でした。昨日、カズエさんも話しておられましたが、「自分なんか死んでもよい」という希死念慮をずっと抱えて生きざるを得ない状況にありました。それを人前では決して見せず、教会では青年会などで活躍していました。学校ではいじめられ、家では虐待で苦しんでいたけれど、神父さんにも相談できなかったのです。

排除でなく共感の価値観を

松本

彼はこのような問題でつながった「JUST」という自助グループに参加していました。そこで自分の体験を初めて話し始めたのです。わたしも、そこで彼の物語に出合ったのです。ということは、いかに教会ではそうした問題が話しにくい、わたしたちは問題を抱えた人を受け入れる素地を持っていないのか、それはどうしてなのかを考えていると、わたしたちは虐待問題に向き合えないと思います。わたしたちが持っている価値観は、暴力被害を受けた人たちに心底から共感できる価値観なのでしょうか。逆にその人たちを排除する価値観を生きているのではないのでしょうか。このことを自分自身にも訴えかけていきたいと思っています。

司会

いろいろ突き詰めて考えていくと、今の小教区のあり方そのものが問われてくるのではないかと思います。東京では新しい試みをされていると聞いたのですが。

日本では女性への性暴力が問題

幸田

その前に先ほど言わなければいけないことがありました。『司教のためのガイドライン』が公表されていないということですが、実は、わたしは司教になる前に、この児童性的虐待についてのガイドラインを作るプロジェクト・チームに参加していました。このプロジェクト・チームは、司教のためのガイドラインを準備したのではなくて、教会全体のためのガイドラインと思って準備しました。でも司教たちは、これを司教のためのガイドラインと決めたのです。

これと関連してもう一つ。わたしたちは日本の司祭のなかに、未成年の少年に性的な虐待をした司祭がいることを知っています。ただし数は少ないと思います。でも日本ではそれと同じ構造でもっと多いのは、司祭の女性への性的な暴力の問題です。それから司祭の信徒への精神的な暴力の問題が本当に多いと思いました。こういうことも視野に含めながら、このガイドラインを準備したことも、お話しておいたほうがよいかなと思います。

教会の密室性を打ち破る試み

幸田

小教区のあり方についてですが、東京教区では「宣教協力体」といって、いくつかの教会を一つのまとまりにして、そのなかで司祭と信徒が一緒になって、その地域の宣教を考えていけるような体制を呼びかけて、微妙にスタートさせています。現実には、なかなかうまくいかないですが、一人の司祭と信徒の父親と家族というような閉塞した密室状態を打ち破りたいという思いがありました。こう言うと司祭たちはあまり良い顔をしないかもしれませんが。

どこかで風通しをよくしていないと、小教区で司祭と信徒の関係が煮詰まってしまう、

これをなんとかしなければいけないと感じていました。他の教区では、共同宣教司牧という形で行われていると思います。虐待・暴力を防止するためにはウォッチする、「ちゃんと見ていますよ」という姿勢を示すことが大切だと、遠藤優子さんは指摘されていましたが、小教区での司祭と信徒の関係は本当に閉鎖的で、「他の教会の神父や信徒も見ていますよ」という姿勢は、実は大切ではないかと思っています。

問われる司教・司祭・信徒の関係

司会

司祭と信徒の関係の問題になってくると、教会には位階制度、つまり教皇・枢機卿・司教・司祭・信徒という上下関係があって、それに依存し過ぎてしまった信徒の多くは、なかなか司祭や司教には思ったことが言えないとか、許可を受けないと何もできない構造が根強く残っているのではないかな。こういった問題は、どのように受け止め、対処していったらいいのか。これは教義との関係もあり、非常に難しい問題だと思うのですが。

固い教義に縛られて窒息する危険も

松本

わたしたちは今の時代に生きているのですから、神様が「このように生きよ」と一人ひとりに与えられた使命を基に、自分の主体性のなかで考えていく信徒でありたいと思っています。ガリレオ・ガリレイが何世紀も後で認められるような固い教義に縛られていたのでは、わたしたちは窒息してしまうような気がします。

「Saya-Saya」にはDVの支援者養成講座で使うマニュアルがあります。表紙に「抑圧理論」と書いていますが、DVは抑圧から起きている。この本には、これまでの歴史的な流れのなかで、教会が説いてきたことが書

いてあります。イギリスでは「親指の法」と言って、「親指よりも太いムチで女性をたたいてはいけない」とか、結婚もせず子どもを育てたことのない修道士が女性についていろいろ論じている。「夫に逆らってはいけない。夫に逆らう妻は、打ってもよい」と、修道士が書いているのです。

男性中心の神学、教会法

松本 このような男性中心の歴史的な積み重ねが今の教会法で、わたしからすれば「男たちが自分たちの都合のよいようにつくってきたもの」と言いたくなります。『薔薇（バラ）の名前』などの映画にもあるように、頭だけで書かれたような男性中心の神学で、わたしたち女性のはんじがらめになってなるものかと思います。女性は、もっと大地に根ざして、生き生きと生きていきたい。そのなかに神様のメッセージがあると言いたいです。そうしてみると、位階制とは何なのだろうか。なぜ女性の司祭がいなのだろうかと疑問に思うところです。この点については、今後の教会の検討に委ねたいと思います。検討する際には、もっと女性の信徒の声を参考にしたい。わたしたちも参加して検討し、つくっていききたいという思いもあります。もしかしたら将来、女性のパパ様、いやママ様が登場する時代がくるかもしれません。（笑）

司会 小柳さんはこの問題に対してはいかがお考えですか。

必要な司祭、信徒の意識改革

小柳 教会の風通しをよくするにはどうすればよいか。これは最後のご質問にもありましたが、いろいろな可能性を検討していかなければ

なりません。アメリカで教会改革に取り組んでいる方が、時々、真生会館などで講演されています。彼は、「教会を民主化する必要性がある」と強調しています。確かに大変に重要なポイントですが、わたしは、日本ではそれだけでは絶対だめだと思います。アメリカの教会では信徒が高い問題意識を持っているので、民主化すれば大きく変わるでしょう。しかし今、日本の教会で民主化したら、みんな、多数決で司祭の独裁をサポートします。これは確実だと思います。ですから民主化と同時に、信徒や司祭の意識改革、養成が大事だと思います。

求められる主任司祭の地位相対化

小柳 そのような意味では、幸田司教が触れられた宣教協力体の真の目的は、主任司祭のステータス（地位）を相対化することだと思います。わたしは、宣教協力体の前の「地域協力体」のときの委員をしていましたが、この話を聞いたときに、まずピンときたのは、これによって、司祭の指導にセカンド・オピニオンがもらえるということです。相対化されることによって信徒の責任性が増す。ただし、これも民主化の問題と同じで、信徒にそれを担うだけの覚悟がなければうまくいかない。宣教協力体が必要になった原因の一つは司祭不足です。一人の司祭が三つの小教区を担当するとするなら、各小教区は信徒が運営しなければなりません。もし本当に小教区運営の責任を信徒が担うことになったら、状況は変わると思います。現状は幸田司教も話されていましたが、従来とあまり変わらない形なので、わたしはイライラしているのですが、もう少し進めば、主体性の芽が出てくるのではないかと考えています。

男性に都合のよい聖書解釈

司会

位階制の問題を歴史的に説明していただくと、我々ももっと理解を深め、問題点をクローズアップできるのではないかと思います。幸田司教、その点について。

幸田

位階制の問題もありますが。ごめんなさい。今、歴史的にきちんと説明できないのですが。男性のみという問題は、松本さんも話されていたけれども、すごく大きいと思います。わたしは、『新共同訳聖書』を読んで、愕然（がくぜん）としたことがあったのです。それは、マタイ福音書の5章の有名な言葉、「だれでも、情欲を持って女を見る者は、こころの中ですでに姦通の罪を犯したのだ」（マタイ5・28）です。この箇所を、『新共同訳聖書』は、「女を見る」ではなくて、「他人の妻を見る」というように訳しているのです。「女を」と言ったら、すごく広いですよ。女性に対して、情欲の目で見るという見方ではなくて、人間として尊重する見方をするべきだというのが、イエスの本来の教えだと思いますが、なぜか『新共同訳聖書』は、「他人の妻」と訳しているのです。

他人の妻だと姦通に

幸田

なぜかといえば、「姦通」というのは他人の妻とすることだからですね。他人の妻でない人と性的関係を持っても姦通とは呼ばない。だとすれば、ここで言っている「女」とは、「他人の妻」であるはずだと考えてそう訳しているわけです。男性の側から見れば、他人の妻でなければ、情欲を持って見てもよいことになって、男性にとって都合のよい解釈なのです。これが、『新共同訳聖書』でも、まかり通っている。太田道子さんのような素

晴らしい女性の聖書学者がいらっしゃいますけれど、彼女は旧約ですね。新共同訳で新約聖書を訳した人たちは、ほとんど男性だったのでしょう。これは一つの例ですが、教会のなかでいつも男性の視点が優先されて、男性が物事を決定しているという事実を深く反省しなければいけないと、わたしは思います。そういう意味で、女性そして子どもたちの声に耳を傾けないと、とんでもない教会になっていってしまうと強く感じています。ヒエラルキーについては、かんべんしてください。

現実にきちんと向き合う

司会

現実には、男性優位の教会をどう立て直していくか、変えていくかという問題になると、位階制の問題がどうしてもからんでくるのではないかと思います。

松本

遠藤優子さんが、「特権とかヒエラルキーは、その立場にいる人が意識するのとはしないのとでは大きく違う」と語っておられました。わたしは、女性のパパ様とか、すごく大きいことを言いましたけれども、今できることは何かと言えば、現実をきちんと受けとめて向き合うことだと思います。日本社会では、こういう問題があって、こんなことが起きているという認識があると、ではどうしようかという次のプロセスが生まれてくると思います。権威による上意下達で信徒の主体性が奪われ、自分たちで物事を考え、決定できないような体制になってはいけません。信徒がさまざまな活動に参加するときに、神父さんの顔色をうかがったり、神父さんの一言ですべてが決まってしまうのではなくて、信徒がきちんと発言していく、その積み重ねが大事だと思います。

罪意識が被害者を追い詰める

司会

もう一つ考えなくてはならないのは、倫理的な価値観、特に罪意識を強調しすぎるために、何か問題を起こした場合、それを正直にオープンにできない傾向が強いのではないのでしょうか。中島さんのお話にありますが、罪意識がさらに弱い人を追い詰める。そのために教会から遠ざかる。本来ならば、問題を抱えた人のありのままを受け入れる、叫びに耳を傾け共に歩むのが福音的な立場だと思いますが。幸田司教は、この問題についてはどのようにお考えですか？

姦通した男はどうなったの

幸田

昨日も出てきた話ですが、性暴力によって望まない妊娠をした人が、中絶をすることについてどう考えるか。わたしがその話を聞くといつも思い出すのは、姦通の現場で捕らえられた女性の話です（ヨハネ8・1-11）。姦通の現場で捕らえられた女性が、イエスのところに連れてこられます。その場で、「相手の男はどうしたのだ」と言いたくなります。姦通の罪は、女性も男性も同じく罪になります。それなのに女性だけが連れてこられるのです。男は逃げてしまったのかどうかは分かりませんが、ありがちなことではないですか。男は逃げますからね。気をつけましょうね（笑）。結局、女性だけが罪に問われるのです。あってはならないことだと思います。性暴力によって妊娠した重荷、大変なことを女性だけがいつも負わされている状態は許し難いと思います。それに対してわたしたちが、その女性に「あしろ、こうしろ」と言うのは、本当におかしいことだと思いますね。

教会は倫理で人を裁かない

幸田

イエスは姦通の現場で捕らえられた女性に、「あなた方のなかで罪のない者が、まず、この女に石を投げなさい」と言いますね。すると、一人また二人と去って行った。そしてイエスは最後に、「わたしもあなたを罪に定めない」（ヨハネ8・11）と言います。彼女のしたことを良いと言っているわけではないです。でも、だからといって、「お前は罪人だ。断罪する」とは言いません。「わたしもあなたを罪に定めない。これからは、もう罪を犯さないように」と。彼女が、これからどうやって歩んでいったらよいのか、この女性を励まして本当に新しい生き方に向けて送り出していく。それがイエスのやり方だったと思うのです。倫理は必要かもしれない。でも倫理で人を裁くのが教会の役割ではないのです。本当に傷ついている人をどうやって癒やして、励ましていくかというイエスの福音の原点から、わたしたちのあり方をいつも、いつも問いかけていかなければならないと思います。

いのちは誕生で終わらない

小柳

その関連でアメリカの状況などで妊娠中絶に関して感じたことを申し上げたい。中絶が重要な問題だというのは、一つの生命が関係しているからです。非常に重大に考えなければいけないと思うのですが、また反面、アメリカの政治と教会の関係では、ヒステリックとさえ思われる状況があるのも事実です。たとえば、中絶医はピストルで殺してもよいとか、あるいは“母体”を犠牲にして胎児を助けた話が美談のように語られる。美談かもしれないけれど、中絶の問題とは直接には関係ない話ですね。

選挙で、どの候補に投票するかのとくに、

中絶問題をリトマス試験紙にして決めなさいと指導しているところが、アメリカの一部にあります。これに対し二年前から「いのちは誕生で終わるわけではない」というキャンペーンが展開されています。つまり中絶の問題だけがいのちの問題ではなく、暴力の問題から戦争や死刑まで、すべてバランスよく考えなければならないという主張です。物事をバランスよく議論することが問題を考える際に大変重要ではないかと思います。

女性の自己決定を大切にする

松本

わたしは、「女性の自己決定を尊重する」ことが大切だと思います。自己決定は、他人が侵入できない尊厳の問題とも関連します。どんな人にも、自分という大事な尊厳の領域があって、そこに他人が踏み込むことはできない。その自己決定のプロセスのなかで、神様と本人にしか分からないことがあります。アドバイスを求められたら、アドバイスはできるけれど、決定するのは本人で、それを尊重する。暴力の問題は、いつも死と背中合わせで、死の危険にさらされています。先ほど虐待の問題を抱えていた人が亡くなったケースも、虐待を受けた後、何年もたってフラッシュバックしてくるという問題なので、当事者の自己決定は、その人が生きることを最優先しなければならないとわたしは思います。本当に生きていて欲しい。この思いをいつも抱えています。

被害者だけで終わらない性的虐待

松本

日本では司祭による児童に対する性的虐待は少ないと幸田司教は言われましたが、女性に対する性的虐待は、各国と同じようなレベルであると思います。ただ語られないだけです。幼少時に司祭から性的虐待を受けた

男の人からわたしは話を聞きましたが、当時の教会は、彼の性的虐待の被害の訴えに耳を傾けて「聞く」教会ではなかったのです。彼は成長し、結婚してからも、フラッシュバックに苦しむと語っていました。虐待の問題は遠藤優子さんの話のように、周りの人にさまざまな影響を及ぼします。アメリカの性的虐待の問題も、被害者の子どもが成長して司祭になり、そして今度は加害者になっています。それだけでなく家族や兄弟、そして周りの地域、さらには世代間を越えて連鎖して、数えきれない人たちが被害に遭っています。それを思うと、表面に表れた数字だけでは論ずることはできないと思います。

虐待で無視できない聖母マリアレイプ説

司会

昨日のシンポジウムで松本さんは、聖母マリアも当時はレイプされて妊娠したのではないかという説もあったと話されました。2007年度四旬節の『ひびき』※のテーマが、このセミナーと同じ「暴力からの解放を」というテーマで、暴力、虐待の問題を取り上げました。釜ヶ崎などで生活している路上生活者も、社会的な虐待を一番受けている人たちではないかと考え、彼らとともに生活しているフランシスコ会の本田哲郎神父にわたしは話を聞きに行きました。本田神父独自の聖書解釈によると、イエス自身も当時の社会から虐待されていた。虐待された体験があるからこそ、虐待されている人たちの置かれた立場がよく分かる。聖母マリアも、当時の状況を考え合わせると、もしかしたらレイプされたり、貧しい生活をしていたために身を売って生計を立てたりしていたかもしれない。ナザレ村のあるガリラヤ地方は、民族が混在し、しかもローマ軍も駐屯していて不安定な地域だった。妊娠を知らずにヨゼフと婚約し、その後、自分が妊娠していると知って驚き、これは大変だと相談するためエリザベト

を訪問したということだったのではないかと
いうのです。性的虐待を受けた人たちが、そ
の話を聞いたら自分の立場やつらさを分かっ
てくれるのは聖母マリアであり、イエスでは
ないかと受け止め、癒やされるとわたしは思
ったのです。

※124ページ参照

被害女性にとっては大きな力に

松本

昨日そのような話をした後、わたしは
パネラーの皆さんに「どう思われますか」と
聞いたかったのですが時間がなかったので、
できませんでした。パネルディスカッション
が終わった後、カズエさんに聞いてみたら、
「マリア様もレイプされた被害者かもしれな
いと聞いて、わたしはすごくうれしい。その
ことを多くの被害女性たちが聞くと力がわき
出る」と言われたのです。わたしは、そのこ
とを「わたしが代弁してもよいですか？」と
聞いたら、了解を得たので、今日ここで話さ
せていただきます。カズエさんは「教会から
タブーをなくしてほしい」と言っていました。
タブーというと、中絶や離婚、自死の問題が
ありますね。

なぜマリア様があのとき、あの身重の身体
で遠い山道をたどりエリザベトを訪問された
かは分からなかったけれど、本田神父さんの
説明でストーンと胸に落ちたんです。妊娠し
ていることを知って、だれかに相談して胸
のうちは聞いてもらいたかった。それでエリ
ザベトを訪ねたら、本当に受け止めてもらっ
た。エリザベトはすごいカウンセラーですよ
ね。そして、あのマニフィカトが出たと思う
のです。そうだとしたら、すごくよく分かる。
だから「わたしのこころは神を崇め、わたし
は救われた」と、高らかに叫んだのです。こ
れは救いのメッセージなのだとわたしは思い
ました。

相手の立場に立って聞く人に

松本

このカテドラルの地下に納骨堂があり
ます。そこにわたしが路上でかわった女性
が、引き取り手がなくて葬られています。つ
い思い出してしまいます。彼女たちも、ずっ
と暴力の被害者でした。虐待を受け、転々と
して路上生活に追い込まれ、また虐待を受
けて子どもを産み、その子どもは施設で育ち、
摂食障害になった。でもボーダーラインとい
う診断で精神病院にも入院できず、ある日ア
パートで亡くなったのです。母親の死後一年
目でした。母と娘が葬られています。納骨堂
を訪れたら、二人の親子のために祈っていた
だけたらと思います。

たくさんの無念の死があります。沈黙のう
ちに亡くなられた方が大勢います。タブーを
なくしていきたいと思います。こうしたこと
が、教会のなかで語られるには、エリザベト
のように語られたことを相手の身になって
聞く人がいるということ。皆さん、わたしは
この話を、これまでずっと教会の外で聞いて
きたのです。やっと今回、こうした場で話せ
ることができてすごくうれしいです。それも、
かわいそうな人の大変な話と思って聞かない
でください。自分もそのなかの一人なのだと
思ってください。「今日、かわいそうな話を
聞いたなあ」と帰らないでいただきたいと思
います。このタブーをどうなくしていけるか
を、自分の問題にしていただけたらうれしい
です。ちょっと押し付けがましいかもしれま
せんが提案させていただきます。

さまざまな受け止め方があっていい

小柳

キリスト教の歴史のなかで聖母マリア
に関する物語は、「いやしいはしため」から
「天の女王様」まで山ほどあります。いろい
ろなイメージネーションがあり、実際にどうだ

ったかを議論してもあまり意味がない。イメージネーションだから、さまざまな受け止め方があってよいと思います。そういうイメージネーションのなかで、自分の生き方を確立していきたいと思います。ただ聖母マリアのイメージは、どのようなキリスト論の上に立てられているかと合わせて議論すべきだと思います。前にお話した、中絶における女性の自己決定の話は、わたしとしては、もう少し別の視点、つまり抹殺されるかもしれない生命の側の自己決定、あるいは発言力のない人に対し、教会がどのような思いを寄せるかを合わせて考えるべきだというのが、わたしの意見です。

処女懐胎は何を意味しているか

幸田 中絶のことを一言だけ。中絶に反対することは、叫ぶこともできないまったく無力な胎児の立場から考えたら、だれも反対できない話ですけれども、一見無力な胎児の立場に立っているようでありながら、実際は性暴力の被害者の立場に加担しているのではないかという気もするのです。

マリア様の話ですが、聖書ではマリアはマタイ福音書でも、ルカ福音書でも処女でイエスを身ごもり、イエスを生んだと書かれています。それが事実かどうかは、わたしたちの問題ではないと思います。現代の聖書学でもそのようなことは問題にしないと思います。ただマリアが処女でイエスを身ごもり産んだという処女懐胎が、一体何を意味するのか。福音書は、なぜマリアが処女でイエスを産んだということを語ろうとしているのか。それはマタイでもルカでも同じですけれども、イエスの誕生が聖霊によるものと語ろうとしているのです。処女であるというのは人間的に見れば、子どもを産めない女性であることです。その産めるはずのない女性からイエスは産まれてきた。つまり救い主の到来が人間

の業によるのではなくて、圧倒的な神の恵みによることを強調する表現、それが処女懐胎であった。聖書を読めば、そのように読めます。

男性の見方が主流に

幸田 ところが歴史のなかでマリアの処女性だけが強調されて、「だからマリアは清く、汚（けが）れがないのだ」という見方がされていくわけです。歴史のなかでどんどん強くなっていきます。そしてマリアは処女であり、かつ母であるという理想の女性としてまつり上げられていくわけです。でも処女であり母であるという女性は、この世のなかに一人もいません。マリア様は、自分たちとは別格で例外となる。ついでに言えば、処女であり母であるのが女性の理想というのは男性の勝手な見方です。昨日の更年期の話ではないですが、男性が勝手に処女が良い、母が良いと女性にそういうものを求める。とんでもない話です。マリア様は、そういう役割を担わされて、あがめ奉られたわけです。19世紀が、その頂点だと思います。

第二バチカン公会議で変わった見方

幸田 19世紀中ごろに、聖母マリアの無原罪の御宿りという教義宣言が出ますけれども、そのときの雰囲気はそうでした。やはりマリア様は、普通の罪深い人間とはまったく違って、初めから罪の汚れがまったくない方だと考えられました。ところが現代の教会におけるマリアについての見方は変わったのです。特に1960年代、第二バチカン公会議の教会憲章の第八章で、マリアについて語られるとき、そういう見方がされなくなるのです。マリアは教会そのもの、教会の典型、わたしたちの一員であって、もちろん最も輝かしい一員で

あるけれども、わたしたちから見て例外的な存在ではなくて、わたしたちの一員としてすばらしい方という見方をするようになりました。

例外ではない無原罪の聖マリア

幸田

教会憲章で見つめるマリアの姿の一番は、被昇天のマリアの姿です。聖母マリアが身体も魂も天に上げられた。それはマリアが例外的に天に上げられたとは見ないのです。1950年の教義宣言のときからそうですけれど、わたしたちみんなが天の神様のもとに行く代表として、マリアの被昇天を祝っているのです。長くなっていますが、現在のミサの無原罪の聖マリア、12月8日の祈願を見てください。それは、19世紀の見方と違うのです。19世紀は、マリアは例外的に無原罪という見方でした。ところが、今の無原罪の祈願をみると、「マリアと同じように、わたしたちも清くなれますように」。マリアはキリストによって救われて、しみも傷もない者とされた教会の代表として見られるようになっているのです。そこが大きな違いです。

マリアも自分たちと同じ一員

幸田

何を言いたいかというと、マリアを自分たちの一員と見る、そしてマリアが自分たちと同じように苦しむ方であり、貧しい者であり、身分の低い者であると受け取ったときに、すごく大きな力が得られる。これは現代の、たとえばラテンアメリカの人たち、さまざまな所の人たちが感じてきていることです。そういうことを考えるならば、マリアがレイプ被害の女性だったという受け取り方をすることによって、レイプの被害に遭った方々が、そこからすごく大きな力を受け取るということが、とてもよく理解できます。

損なわれない人間の尊厳

松本

今のお話を聞いて本当にそうだなと思いました。メキシコの黒いマリア様は、まさにそうです。黒かったはずはないけれども、マリア様として生活のなかにおられる。レイプ被害に遭ったマリア様がいてもおかしくないし、そのことで汚れる、清さがなくなると感じるのは、偏見ではないでしょうか。レイプ被害に遭った女性が、どこが汚れてどこが悪いのでしょうか。人間としての尊厳も何も奪われていないのです。恥じるべきは加害者であり、加害者こそ人間としての尊厳は壊れているかもしれません。レイプされようと何一つマリア様に欠けるものはないのです。わたしは、そのすてきなマリア様を愛したいと思います。

離婚の問題をどう考えるか

司会

もう一つお話をしてもらいたいことがあります。教会は離婚を禁じているために、DVの被害や暴力を受けている人たちが逃げることができないでいる、昨日も会場にそういう方がおられましたが、その点について、どう考えたらよいのでしょうか。

松本

当然、本人の自己決定にゆだねるべきだと思います。夫と離れたいと思うのであれば、離れてよいと思います、その際に離婚もありだと思います。その根拠として、昨日、わたしは幸田司教からすてきな聖書解釈を聞いたので、それをお話いただければよいと思います。

人間の苦しみの現実を考えて

幸田

わたしは小教区で働いていたときに、DVで苦しんでいる女性たちに何人もお会いしました。わたしも臆病ですから初めのころは「もうちょっと頑張ってみたら」とか言っていましたけれども、最終的には「早く逃げなさい」と、すぐ言うようになりました。教会法では結婚の解消はすごく難しいのです。わたしの友人の教会法の専門家に「なんでこんなに窮屈なの？もうちょっと現実の人間の苦しみとか考えてよ」と文句を言ったことがあるのです。そしたら彼は「教会法の問題ではなくて、教会法が基づいている教義の問題である」と言うんです。「教義が、結婚は解消できないと言っているから、それを教会法が細かく規定しているだけだ」と。では教義は何に基づいているかという点と聖書です。でも本当に二千年間やってきた「神が結び合わせたものを人は離してはならない」という言葉の解釈の仕方が、本当に正しい唯一の解釈なのだろうか。そのことから見直さなければいけないと、わたしは考えています。

男の立場しか考えなかった律法学者

幸田

長くなるので覚悟して下さい。マルコ福音書10章ですけれども、イエスがこのことで問い詰められます、議論をふっかけられるわけです。「夫が妻を離縁することは、律法にかなっているのでしょうか」という質問です。離縁に関する律法は、申命記の24章の1節にあります。そこには、「人が妻をめとり、その夫となってから、妻に何か恥ずべきことを見だし、気に入らなくなったときは、離縁状を書いて彼女の手渡し、家を去らせる」と書いてあります。「人は」というのは男ですね。律法は、男のことしか考えていません。そもそも申命記の律法が成立するのは、紀元

前7世紀、あるいはそれ以前です。紀元前7世紀までには成立していた。そして、この時代に協議離婚とか、妻が夫に向かって「出て行きなさい」と言うのは、あり得ません。今の考えるような離婚とは違って、離縁といえは夫が妻を一方的に追い出すことしかなかった時代です。

離縁に二つの条件付けた律法

幸田

男性が圧倒的に強かった時代に、律法は離縁に関して二つの条件を付けているのです。一つは、「妻に何か恥ずべきことを見だし」、妻の側に明らかな落ち度がなければいけないということを言っています。もう一つは、「離縁状を書いて彼女の手渡しなさい」。これは追い出された女性が一人で生きていくことはとても大変な時代ですから、せめて彼女に再婚の可能性を与えるためです。この二つは、今の人から見たら不十分なことは重々承知ですけれども、紀元前七世紀の社会では、男性が妻を勝手に追い出すことに制限をしているのです。分かりますよね。申命記の規定がなければ、夫は気に入らなくなったら妻を追い出すことができるのが当たり前の社会だったのです。妻の側に重大な落ち度がなければいけない。そして再婚もできるように保証してあげなければいけないという女性を守ろうとした律法だったのです。

妻を追い出す理由も男の都合

幸田

その後、律法学者がいろいろと議論していきます。彼らは「何か恥ずべきこと」とは何かを厳密に規定しようとするのです。そして、もちろん律法学者は全員男性です。長い時間のなかで、主流になっていく解釈は、「何か」と「恥ずべきこと」を分けて読む。「恥ずべきこと」は、他の男性との性的

な付き合いなどですけれども、「何か」の方はもっと広い。文献に残っている有名な例があります。これを言うと、皆さんは笑いますけれども、「何か」の中には正当に妻を追出す理由として「夫の食べ物を不注意で焦がしてしまう」という例が挙げられている。これが文献に残っているのです。つまり、こういうことがあれば、夫は妻を追出してよいと解釈されていくのです。これが、イエスの時代の主流の解釈でした。だから、イエスがファリサイ派の人たちに「モーセはあなたたちに何と命じたか？」と尋ねたときに「モーセは離縁状を書いて離縁することを許しました」と答えたのです。彼らは、もう「何か恥ずべきこと」という条件を無視してしまったのです。とにかく、離縁状さえ書けば、妻を追出すことが出来るのだというのが、イエスの時代の律法学者、男たちの解釈だったのです。

イエスが説いたのは律法ではなく福音

幸田

それに対してイエスは「ノー」と言うのです。ですからイエスが直接的に「ノー」と言っているのは、夫が自分が気に入らないからと妻を追出すことです。そしてイエスは創世記の1章と2章の言葉を引用しますが、それについては今日説明する時間がありません。最終的にイエスは「神が結び合わせたものを、人は離してはならない」と言います。これは、どういうことでしょうか。この文脈の中ではっきりしています。当時の男性が考えていたように、妻というのは気に入ったら家に置いておいて、気に入らなくなったら外に追い出せばよいというものではない。「妻というのは、女性というのは、神から与えられたかけがえのないパートナーであって、本当に大切にしていかなければいけないのだ。自分にとって利用価値があるかどうかではなくて、人格を持った大切な存在なのだ。そう

いうものとしてかわらなければいけないのだ」ということを言うのがイエスの言葉です。これは福音です。律法ではなくて福音なのです。当時、弱い立場にいた女性にとっての福音だと思います。

イエスの言葉をどう受けとるか

幸田

しかし初代教会は、この言葉を律法として受け取るのです。イエスが決めた新しい掟（おきて）として受け取るのです。そして、それを厳密に守ろうとします。キリスト教以外の、古代の地中海沿岸の社会では結婚というものが、それほど尊重されていませんでした。そのなかでキリスト者は、結婚を本当に大切な絆として守ろうとしたのです。それは良い面もあった。当時、女性の立場は弱い地方が多かったですから、女性や妻が不安定な立場に置かれていた社会で、キリスト教が、結婚は一生の約束であると強調したことは、女性にとって良かった面があると思います。ただし、それを律法として持ち続けていったときに、現実と合わなくなってくるということはありません。

イエスは何を見ていたのか。イエスは結婚という制度を守ろうとしたのか。それとも、そのなかで苦しんでいる弱い立場にいる女性の方を見ていたのか。そういうところから問い直していかないと、いけないのではないかと思います。

教会は暴力防止に立ち向かえるか

司会

あと残り十分しかなくなってきましたのですが、会場から厳しいご意見が出てきました。「教会論になっているけれども、教会がどのように暴力防止に向き合うか。その話が抜けているではないか」ということです。一言ずつお願いします。

松本

わたしたちが現実いきちんと向き合うこと。教会で、わたしはコミュニティーのなかの教会というときには、生活領域と問題別領域と両方あると思うのです。その問題別領域に向かって教会が開かれ、風通しがよくなることで暴力に向き合っていけると思います。気が付いたら、たくさん話が入ってきますよ。そのことで、どう解決していこうかということ、これから教会が取り組むことができるのではないかと。それが、福音の目線につながっていくのではないかと思います。

職能に応じた組織化を

小柳

松本さんの話とかなり並行している部分があるのですが、先ほども申し上げました通り、教会そのものをいかにオープンにするかというときに、一つのポイントは小教区だと思います。小教区というのは人間が地域に縛られていた時代にできた制度で、良い点もありますが、いろいろと問題点もある。たとえば職能に応じた教会の自由な組織化が、非常に大きな役割を果たすのではないかな。もう少し大きく言えば、最近流行のいわゆる公共の哲学です。公共性の理論、哲学は随分進んでいますが、「公共空間としての教会」という立場を今後考えていくべきではないかというのが、わたしの見方です。

被害者が声を上げるしかない

幸田

短くしたいと思いますが、暴力の加害者は、被害者がしゃべらないと思っているのですね。黙らせることができると思っているのです。自分には力があって、社会的な地位もあって、「たとえ何か言っても、誰もこんな人間の言うことは、まともに扱わないだろう。だから黙らせることができる」と思っ

ている。それと戦うには、しゃべることしかない。被害者が声を上げるしかないと思います。そして、たとえばこういう場、それから松本さんが話された二年前の「正義と平和」全国大会でやった分科会などで、だれかがしゃべれば、「わたしもだ」という人が必ずどんどん出てくるのです。その場をつくっていかなければいけない。DVに関しては、特に教会ではまだまだ声が上げられない。自分は、このような思いをしてきたということが話せない雰囲気があると思います。でも、やはりだれかが話し始めて「わたしもそうだった」と言っていく。そこからすべてが発するし、わたしたちがそれに耳を傾けて聞くということから始まると思います。

司祭は自分一人で抱え込まない

幸田

それからもう一つ。教会では、暴力の被害者のお話を聞こうという姿勢があれば、司祭は聞きます。司祭のところに話しに来てくれる人がいます。でも司祭は、その問題を一人で抱え込まざるを得ないという危険があるのです。だれにも話せないと感じてしまって、自分一人で何とかその人を助けようと思う。でも、それはすごく危ないことだし限界があります。わたしは、もちろん今では「松本さんのところに行ってみたら」とか言えますけれども、小教区という集まりが安全な場とは残念ながら思えないのが現実です。小教区でだれかがDVや虐待の当事者であると分かっただら、たぶん確実にその人はもっと傷ついて二次被害を受ける気がしてなりません。

一緒に歩む受け皿を教会に

幸田

そこで、こうした話を聞かれた皆さんが、本当に痛みや傷を抱えている人たちと一緒に歩んでいこうと思われる。そして皆さん

が核になって、教会のなかでDVや虐待の問題をまじめに考え、受け止め、傷ついた人たちと一緒に歩んでいこうとする、さらに小さな受け皿というかグループというか、そういうものをつくっていくことが必要だと思います。

司会

このテーマは非常に大きく、一時間半で結論が出るとか、何かができるという問題

ではありません。もっと時間があれば、さらに続けてもよいと思いますが、今回は、これで一応終わりにしたいと思います。三日間に提起されたさまざまな問題を単に傍観者的に見るのではなくて、自分の問題としてとらえていくきっかけにすることをこの話を聞いて、わたし自身も含めて再確認したいと思います。三日間、重い話にお付き合いいただきありがとうございました、感謝申し上げます。

参考文献

- 1) p.106 「児童より女性への性的虐待多い日本」
『セクシャル・ハラスメントに気づくことから＝あらゆる暴力にNO！という教会を目指して＝』編集・発行 カトリック中央協議会 社会福音化推進部「子どもと女性の権利擁護のためのデスク」 2006年3月刊
- 2) p.106 同上
「8 聖職者による性的虐待 70, 80代の女性も被害に訴える：第三者機関の設置こそ必要」
2007年度四旬節小冊子『ひびき 2007』p.34～p.37収載。 カリタスジャパン発行
- 3) p.117 「虐待で無視できない聖母マリアレイプ説」
「9 虐待問題と福音 イエスこそ虐待の被害者：釜ヶ崎に身を置いて開眼させられた」
2007年度四旬節小冊子『ひびき 2007』p.38～p.41収載。 カリタスジャパン発行

幸田 和生（こうだ・かずお カリタスジャパン担当司教）

東京教区補佐司教。1985年東京カトリック神学院卒業、東京教区司祭に叙階される。高円寺教会、高幡教会、西千葉教会司祭、および東京カトリック神学院モデラートを歴任。2005年2月司教叙階。著書は『ゆるしの力』（女子パウロ会）、『福音をきくために』（オリエンズ宗教研究所）。東京教区ウェブサイト「福音のヒント」（<http://tokyocatholic.cocolog-nifty.com/>）を連載中。

むすびに

聖書はトラウマからの回復物語

幸田和生（カリタスジャパン担当司教）

わたしは小教区を担当していたとき、さまざまなこころの傷を負った人々を少しでも理解し、サポートしたいと願って勉強するうちに、ジュディス・L・ハーマンの『心的外傷と回復』（みすず書房）という本に出会いました。この本に何度も書かれている原則があります。

エンパワメントとリコネクション

トラウマの体験の中核にあることは、無力化（disempowerment = 被害者から力を奪い去ること）と、離断（disconnection = 関係を切り離すこと）である。一例を挙げれば、レイプの被害にあった女性は、そのとき自分が逃げることも抵抗することもできなかったという無力感を徹底的に味わわれ、また、同時にだれも（神も）助けてくれなかったという孤立無援感を強烈に感じる。これは他のトラウマ体験にもすべて共通する。それゆえにトラウマからの回復の基本は、その悲惨な体験を生き延びた人であるサバイバーにエンパワメント（empowerment = 有力化、その人の持っている力を認め、強めること）を行い、リコネクション（reconnection = 再結合、新しい結びつきをつくること）をもたらすことである。

イエスの時代の人々の苦しみ

「PTSDのバイブル」と呼ばれるこの本は、一時わたしにとって本当にバイブルのようになり、聖書を読むよりもこの本を読むことが多くなっていました。そんなとき、改めて福音書を読んでもみると、今までと違うイエスの活動の姿が見えてきました。それは、二千年前にイエスが行っていたのは、まさにこの「エンパワメント」と「リコネクション」ということではなかったかという発見でした。

あの時代、イエスが出会った多くの人はこころの傷を抱えていました。重い皮膚病や女性特有の出血病のために「汚れた者」というレッテルを張られ、人々から隔離されていた人々。病気や障害はその人の罪の結果であると見られ、神からも人からも見放されたように感じていた人々。悪霊に取り付かれていると言われて、共同体から排除されていた人々。徴税人や娼婦という職業のために「罪びと」のレッテルを張られ、そこから抜け出す道がなかった人々。人々の苦しみの根底にあったのは、自分はダメだという思いであり、神からも人からも断ち切られてしまっているという絶望感でした。

「イエスのいやしとは？」

イエスはその人々に、「あなたも神の子である、アッパ（親）である神はあなたを決して見捨てず、ご自分の救いに招いていて下さっている」と語りかけました。イエスとの出会いによ

って、人々は自分の中から神の子であることは決して奪い去られていないことに気づき、絶望とあきらめのなかから立ち上がっていきました。イエスとのつながりを通して、イエスを中心とした兄弟姉妹としてのコミュニティーに招かれ、さらに社会的な人とのつながりを取り戻していったのです。これが福音書の伝えるイエスの「いやしとゆるしのわざ」だったと言えるのではないのでしょうか。一つの例だけ見ましょう。

「重い皮膚病の人のいやし」

さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、「み心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、言われた。「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい」。しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のない所におられた。それでも、人々は四方からイエスのところ集まって来た。(マルコ1・40-45)

身体とこころの回復の物語

誰にも近づいてはならない重い皮膚病の人に、イエスは手を差し伸べて触れていきます。断ち切られていた人との関係がここで取り戻されていくのです。そしてイエスはこの人が清くなることが神の望みであると確信しつつ、「清くなれ」と言います。この人の中に神の子としての尊厳を認めるからです。さらにイエスは、その人を祭司のところに送り、清めの儀式を通して、人々の共同体に復帰させようとしめます。しかし、癒された人は実際には祭司のところにいったのでしょうか。むしろそのままイエスの弟子たちのコミュニティーに加わっていったのかもしれない。このように福音書の多くの物語は、肉体的な癒しとともに、どのように人々がイエスによって本来持っていた力を呼び覚まされ、神と人との関係を取り戻していったかという、トラウマからの回復の物語として読むことができるのではないのでしょうか。

教会の使命

教会はイエスのわざを受け継いで生きる共同体です。力を奪われ、孤立無縁の状態になっている人に、その人とかかわりを通して、「あなたには立ち上がることでできる素晴らしい力があるのだ」というメッセージを伝え、その力を引き出し、同時に、本当に豊かな神との関係、人との関係、社会との関係を取り戻していくのが教会の使命です。

残念ながら、現実には、トラウマを負った人が教会の中で二次被害を受けたという話もよく耳にします。被害者の話を聞いたとき、倫理的に裁いてしまうような発言が教会のなかではありがちです。逆にその人をかわいそうな人と見て、余計な世話をし過ぎ、その人の最後に残された力さえも奪ってしまうこともあります。やはり、暴力やトラウマに関する基本的な理解が必要です。それだけでなく、被害者のなかにある「神の子」としての尊厳と回復力を信じるこ

と、共同体のなかにいてくださる目に見えない復活のキリストの働きを信じる必要があります。

サバイバーの話を聞くことから

どこから始めたらよいのでしょうか。まず暴力・虐待からのサバイバーの話に耳を傾けることから始めるしかないと思います。サバイバーが語る言葉は、暴力によって決して奪い去ることのできない、その人の神の子としての輝きと力を現します。そして、一人のサバイバーが語り始めれば、必ず「わたしも……」という人が出てきて、そこから「リコネクション」が始まっていくのです。

当事者が初めて主役に

2006年に「虐待・暴力・性暴力」をテーマにして行われたカリタスジャパンのセミナーはその第一歩でした。あの場で、当事者が初めて主役となり、声を上げることができました。参加した多くの人はこの問題を教会の外の問題ではなく、教会のなかにいるわたしたち自身にとって身近な問題であると意識することができました。その後、2007年には、各教区の福祉委員会とカリタスジャパンの共催の形で、暴力に関するセミナーが全国数ヶ所で開かれました。被害者の支援・相談、予防・防止への取り組みに立ち上がった教会もあります。

この問題への取り組みはまだ始まったばかりです。「自らの体験を語る場を用意すること」、「その痛みや苦しみの声に耳を傾けること」、このような努力の積み重ねによって、教会も社会も少しずつ暴力を乗り越えていくことができるにちがいありません。

感謝とご冥福を

セミナーのコーディネーターである横川和夫さん、パネルディスカッションの司会をされた松本和子さんと各講師の方々、そして痛みを満ちたご自分の体験を語ってくださった当事者の皆さんにここから感謝しています。また横川さんと、セミナーの企画・立案からかかわってこられた前カリタスジャパン事務局長の野坂秀男さんには講演録作成にあたってもご尽力いただきました。

残念なのは、講師の一人であった遠藤優子さんが2008年1月22日に逝去されたことです。生前にテープ起こし原稿をチェックしていただいていたので、遠藤嗜癪問題相談室の了解を得て収録させていただきました。遠藤さんのご冥福をお祈りいたします。

2008年10月1日

本書に収録の「講演」・「パネルディスカッション」・「シンポジウム」の内容は編集・制作の都合で、用字用語を統一し、内容の重複などを修正したうえ、講演者の了解を頂いています。この点をお含みの上、下記の点でお気付きのことがありましたら、ご指摘、ご教示頂けたら幸いです。

- (1) プライバシーに差しさわりのある場合は、氏名は仮名にしています。
- (2) 差別語、タブーとされている不適切な表現については、注意を払っていますが、講演での話し言葉のなかにはそのまま採用している場合があります。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障がい者その他の人のために、録音又は拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項によりいっさい自由である。

カトリック全国社会福祉セミナー講演録

『虐待・暴力と福音』

2008年10月1日 発行

©カトリック中央協議会 2008年

編集 カリタスジャパン社会福祉活動推進部会

発行 カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館内

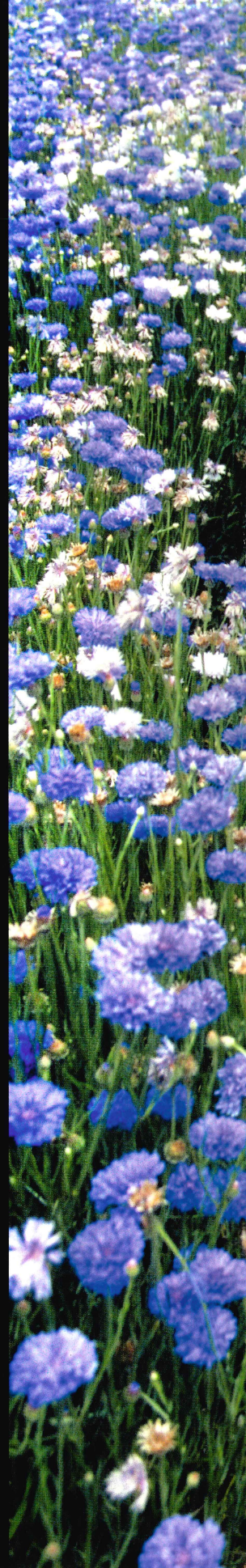
電話 03-5632-4411

カリタスジャパン直通電話 03-5632-4439 ファックス 03-5632-4464

印刷 精興社

表紙写真：チェレスティーノ・カヴァニャ

表紙デザイン：平賀健作



Caritas Japan®
カリタス ジャパン